

日本キリスト改革派教会 大会教育委員会

教会学校 教案誌



church school curriculum



人の子は、失われたものを捜して
救うために来たのである。

ルカ19章10節

vol. **77**
2020年4~6月

「救済史」
に基づく二年サイクル 第2年

教会学校教師のための説教準備ガイド(1)…………… 牧野信成
教会役員養成のために「長老の務めについて(1)」…… 市川康則
家庭における契約の子の教育について……ステファン・ファン・デア・ヴァットとカリナ
【信仰告白の証】「私の信仰」…………… 田好基生

2020年4～6月カリキュラム (第77号)

—救済史に基づく2年サイクル 第1年—

月 日 教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
4 月 5 日	一番大切なこと：	問 1	ウ小1,12,20、ハイデ1,6,53,74,120
	神さまと共に歩む	ヨハネ12：27－36	ヨハネ12：35
	人生の目的は、神と共に歩むこと。信仰生活の恵みを感謝しよう。		
4 月12日 イースター	復活されたキリスト	—	子どもと親30、ウ小30
		ヨハネ21：1－19	ヨハネ21：22
	罪を赦す神の大きな愛を覚え、その御心に従っていこう。		
4 月19日	一番大切なこと：	問 1	ウ小1,32,34,36,100、他
	神の子とされて	ルカ19：1－10	ガラテヤ3：26
	人生の目的は、神の子として生きること。神の子とされていることを感謝しよう。		
4 月26日	信じて歩む道：	問 2	—
	神を知る喜びに生きる	ヨハネ4：7－26	コリント一10：31
	人生の目的は、神を知り、その栄光をたたえること。あるがままの姿で主に従おう。		
5 月 3 日	信じて歩む道：	問 2	子どもと親44
	神と人に仕えて生きる	ヨハネ4：31－42	2テモテ4：2
	人生の目的は、神を喜び、神に仕えて歩むこと。あるがままの姿で主に仕えよう。		
5 月10日	救われた歩み：	問 3	ハイデ21、子どもと親35
	イエスさまを信じる	ルカ24：28－43	使徒言行録16：31
	神はキリストによって和解してくださった。信じるだけで救われる幸いを覚えよう。		
5 月17日	救われた歩み：	問 3	ウ小33,34
	神の子とされた喜び	ルカ15：11－24	ルカ15：20
	神の子とされ、神の子として歩むことこそ人生のすべて。神の子の自覚を深めよう。		
5 月24日	教会と共に歩む道	—	ウ小88、ハイデ65、66
	呼び出され生きる	使徒2：41－47	使徒2：42
	約束の聖霊降臨と使徒たちの力強い説教は今ここに。聖霊の力を求めて生きよう。		
5 月31日 ペンテコステ	キリストの教会の誕生	問 4	ウ小88、ハイデ65－67
		使徒2：1－42	使徒2：38
	神と共に歩むとは、信仰共同体と歩むこと。教会なくして救いなし。主日を大切に。		
6 月 7 日	信仰生活・送り出されて 生きる	問 4	ハイデ86－91
		ルカ10：38－42	マタイ28：18,19
	神と共に歩むとは、神の国を前進させるために派遣されること。伝道、奉仕、証に生きよう。		
6 月14日	愛に生きる	問 5	ウ小39,88、ハイデ86
		ルカ10：25－37	ヨハネ15：12
	神は愛であるので、人は神と隣人を愛することが本来の姿。神の愛を感謝して。		
6 月21日	祈りに生きる	問 5	ウ小39,88、ハイデ86
		マルコ1：35－39	テサロニケー5：17
	愛に生きるためには、日々、神の愛に満たされることが必要。祈りなくして力なし。祈りを大切に。		
6 月28日	聖書・神の御言葉	問 6	ウ小2,3、ウ信1章
		ペトロ二1：16－21	詩編119：105
	聖書なくして神とその御心は分からず、信仰もない。聖書の尊さを知ろう。		

も く じ

2020年4・5・6月カリキュラム

まえがき「子ども教理問答の必要性」	立石 章三……………	4
巻頭説教「成長する天の国」	小峯 明……………	5
教会学校教師のための説教準備ガイド I	牧野 信成……………	7
長老になるための教育準備（1）	市川 康則……………	9
家庭における契約の子の教育について ステファン・ファン・デアヴァットとカリナ……………		13
信仰告白の証「私の信仰」	田好 基生……………	19

聖書黙想・説教展開例・分級展開例……………21

4月5日……………	22
4月12日……………	31
4月19日……………	39
4月26日……………	45
5月3日……………	51
5月10日……………	58
5月17日……………	65
5月24日……………	71
5月31日……………	78
6月7日……………	84
6月14日……………	90
6月21日……………	96
6月28日……………	102

聖句カード……………	108
次号カリキュラム（2020年7・8・9月）……………	110
「子どもと親のカテキズム」案内……………	111
教案誌自由募金案内……………	112
執筆者よりひとこと・あとがき……………	113

まえがき

子ども教理問答の必要性

立 石 章 三

横浜中央教会では教会学校の礼拝を、小学生以下と中学生以上に分けて2回行っています。中学・高校生課では昨年1年間、私の作成した『中学生・高校生のためのキリスト教初歩教理問答』をテキストに、1回に4問を牧師が解説し、適用の説教をしてきました。

私がこの教理問答の必要性を感じたのは、教会学校出席生徒の構成が契約の子と近隣の子供で半々であること、また生徒は必ずしも毎週出席するわけではないので、聖書を連続して講解する説教ができないことです。それで毎回一話完結話でありながら教理の体系を学べるテキストをいつも携帯させることによって、聖書の全体像を理解させようとしたわけです。

過去6年間に小学生用の『キリスト教子ども教理問答』、中・高校生用の『キリスト教初歩教理問答』を作りすでに3版になりましたが、このテキストを作り続けることは私自身の訓練になりました。できるだけ短い言葉でキリスト教教理を簡潔に述べるのは結構難しいからです。

中・高校生はかなりの抽象的概念も考えることができる年齢ですから、初歩教理問答ではスタートの第1問に最も時間をかけました。私は神知識（神概念）の中に時間を導入することに下記のような問と答を作りました。

問1：この世界はいつ、どのように始まったのですか。

答：神が、見える世界と見えない世界のすべてを造られました。神は最初に光を造り、次に時間を造られました。神は時間の外におられる方ですが、自然と人間と生物をすべて、時間という枠組みの中で生きるように定められました。

この問答によって、最も難しい問題の一つである「この世に悪が入り込んで来た」のは、神の決められた時間の中だけというように展開できます。また見える世界、この世だけがすべてではない、人生には次のステップ、神の国での人生があると教えられます。

このテキストを携帯させることは子どもにも、親にとっても効果があったようです。未信者の親は子どもが教会で何を教わっているかということが一番気になることでしょう。しかしこのテキストを見れば一目瞭然です。「変なことは教えていなようだ」と安心できます。またその日欠席した子どもは、当日分のテキストを読むことによって連続性が出てきます。

洗礼志願者に『ウェストミンスター小教理問答』を教えることは教師の必須事項ですが、洗礼・信仰告白にあたっての「6項目の誓約事項」の解説も牧会生活の中で必須です。改革派教会のすべての教師が、「誓約事項」の解説書と「子ども教理問答」を自分で作るように自己訓練されるなら、改革派教会教師全体の知的レベルがボトムアップされるでしょう。

巻頭説教

成長する天の国

マタイによる福音書13章31～38節

小 峯 明

各教会の教会学校で奉仕しておられる教師たちと信仰教育に関わる奉仕をしておられる方々に神様の祝福を祈ります。わたしたちの働きは、今はまだ小さなものに見えるかもしれませんが、社会と歴史を変革しています。それはまだ目に見えない働きのようなのですが、やがて少しずつ目に見えるものになっていきます。主イエスは、ガリラヤで伝道を始めた時に「悔い改めよ。天の国は近づいた」と語っておられます。天の国はまさに主イエスにおいてすでに到来しています。

その天の国の特徴を語るたとえばマタイ13:31～33には二つ語られています。「天の国はからし種に似ている」。そしてもう一つの譬えは「天の国はパン種に似ている」と語られています。二つとも相互に関連した主題を語っています。それはとても小さいものが巨大になるということであり、最初と最後は比較出来ないほどの差があるということです。

主イエスの時代のユダヤではからし種は、野菜を漬ける時などに用いられ、医療にも用いられましたようです。からしの葉はからし菜として全野菜中最も大きく成長し、ガリラヤ湖の地方では3mにも達するものがあるそうです。黒からしと白からしと二種類ありますが、どちらの種もとても小さく、黒からしの種子は0.95ミリから1.6ミリほどです。あんぱんの上にまぶせてあ

る芥子の実と同じ位の小ささです。

天の国はからし種に似ているというのは最初主イエスと共に到来した時に天の国はこれほどの小ささであったということです。それは隠されているような存在であり、だれも気にも留めない存在であり、吹けば飛ぶような存在でした。

しかしその最後は、全ての野菜の中で最大になり「空の鳥が来て枝に巣を作るほどの木に」なります。ここに天の国の特徴があります。

その天の国は主イエスにおいてわたしたちが神と共にある、神との交わりを与えられる領域です。それは今もわたしたちの教会において存在し礼拝において最も鮮やかにその姿を現します。国といっても、地上の国家のように国境があるわけではありません。むしろ、地上の国境を越えて成長していきます。

ただ、このたとえば「成長すると」と語られていますが成長の過程や時間よりも、始めと終わりの比較が強調されています。当時のユダヤ人たちは、天の国がそのように到来するとは思っていませんでした。彼らはローマの軍隊を打ち破り、ユダヤ帝国を実現する神の支配を期待していました。けれども、主イエスによって到来した天の国は、ユダヤ国家の独立ではなく、主イエスを信じることで入れられる信仰の共同体です。その信仰の共同体はからし種

ほどの小さい共同体として始まりますが、やがて全世界に及び、最後には世界全体が神の支配のもとにおかれます。

次の譬えは天の国はパン種に似ていると記されています。ご承知のように、パン種はイースト菌でありパンを醗酵させる酵母です。ここではパン種の量は記されていませんが、いずれにしても少量です。他方粉は3サトンと記されています。1サトンは約12.8リットルですから、3サトンは約39リットル。パンにすると約150人分の量に当たります。ここでも僅かなイースト菌が粉全体を醗酵させて膨らませることが語られています。天の国は、最初は僅かなパン種だけでも、ついには粉全体に影響して全体を膨らませます。

ここでパン種を「混ぜる」と記されている言葉は、中に隠すという意味もあります。そのように、天の国は隠された形で始まります。しかし、発酵が進むと全体が大きく膨らみます。地上に到来した天の国は、この世界の中にあってはまことに小さな存在ですが、その全体を変えてしまう力を持ちます。この二つの譬えには解説がありません。たとえそのものによって天の国の特徴がわかるからでしょう。しかし、成長のスピードと発酵のスピードは具体的には語られていませんので、わたしたちも成長が遅いと戸惑いを感じるかもしれません。

後に主イエスが昇天される時に、使徒たちは「主よ、イスラエルのために国を立て直してくださるのは、この時ですか」と尋ねました。栄光の神の国は復活された主イエスによって今実現されるのですかと尋ねたわけです。からし種の種は、一気に発芽し今、この時に瞬間に成長するのですかということでしょう。

主イエスは時については直接答えずに、弟子たちが聖霊の力を受けて、ユダヤとサマリアの全土、また地の果てに至るまで、わたしの証人となると言われました。天の国は使徒たちによって宣べ伝えられて各地で教会としてその姿を示し、成長し拡大するということです。その天の国は主イエスの十字架と復活を通して弟子たちの目に力を持って示されました。主イエスは昇天されますが、使徒たちに聖霊が注がれます。そして使徒たちと彼らに続く世々の教会は地の果てにまで遣わされて今日に至っています。マタイ福音書はそれから終わりが来ると24：14で語っています。

からし種の木は今も成長の途上にあります。使徒たちも地の果てと言われて途方に暮れたかもしれません。しかし、聖霊が注がれた日に、神は世界の各地から多くの人々を五旬祭の巡礼者としてエルサレムに集めておられました。彼らの中にはペテロの説教を聞いて回心して各地に戻って行った者たちがいたでしょう。

からし種の成長は今も続いています。わたしたちの社会においてはあまり目に見える進展は感じないかも知れませんが、この国でも天の国は今も成長を続けています。そのために使徒たちが用いられたように、わたしたちが用いられているのです。祈ります。

主なる御神 あなたの御名を崇め賛美します。天の国の進展が、聖霊によるわたしたちの働きによって成長し進展しています。信仰によってその神の御業を見させてください。各地の教会で奉仕しておられる一人一人を、そして教会の営みを守り支えてください。主の御名により祈ります。アーメン
(船橋高根教会牧師)

連載

教会学校教師のための説教準備ガイド I

牧 野 信 成

牧師ではない教会学校の教師が、子ども礼拝で説教する場合は少なくないと思います。しかし、そのための訓練を特別に用意している教会がどれだけあるのかわかりません。大抵はそれぞれの教会が従来行なって来た仕方を見よう見まねで学んで、だんだんと身に着けるのではないのでしょうか。牧師やCS教師会で責任をもって準備教育がなされていれば理想的ですが、そうした手引きなくして困っている先生方のために、何らかの手助けができればと願って、ここに説教準備のためのガイドを記します。CS教師になるための資格のようなことは以前に相馬先生が書いておられたのでそちらに委ねます。ここでは本教案誌を用いていることを前提にしますが、応用は幾らでもできると思います。

〈ステップ その1〉

その日に割り当てられた聖書箇所は、カリキュラムのサイクルに則って選ばれています（他の教案誌でもそう）。ですから、それがどのような順序で選ばれているのか、前後のつながりを確認します。

この点、本誌のカリキュラムは今『子どもと親のカテキズム』の問答に従って聖書箇所を選んで説教しますから、その順序とテーマは明確です。前号までの「救済史に基づくサイクル」では、聖書物語の筋道を辿りますから、与えられた箇所がそのどの辺りに位置付けられるかを確認する必要があります。

あります。例えば、バベルの塔の話（2月23日）は1章から11章まで続く人類の墮落と発展の物語の終わりであり、12章から始まるアブラハムの選び（3月1日）の物語を準備する重要な位置を持っています。

「カテキズム」による説教をする場合も、聖書の御言葉に基づく説教を心がけますから、選ばれた箇所の前後のつながりを確認するのは聖書解釈の基本です。

〈ステップ その2〉

さて、では実際に与えられた箇所を読んでみます。日本語の翻訳聖書には数種類ありますが、教会の事情に合わせて用いる翻訳を選ばよよいでしょう。まずは自分の聖書で黙読します。出来ればその後、声に出して読むといいでしょう。その時、大切なのは言葉を実感的につかむことです。言葉を実際に口にすることで、テキストの特徴に改めて気づかされることがあります。一度きり読んでお終いにせず、納得が行くまで何度か読んでみましょう。

〈ステップ その3〉

テキストにアンダーラインなどの書き込みをします。聖書そのものに書き込むのをためらうなら、テキストを別のノートに抜き書きするか、コピー機で複写しましょう。聖書ソフトを持っていれば、そこから当該箇所をコピーして新しいノートを作れば良いでしょう。

まず、意味が分からなかったり、理解が曖昧な単語や文にしるしをつけましょう。また、繰り返し出てくる語に注意してしるしをつけましょう。一番重要だと思われる語や文にも線を引いておきましょう。それぞれ色を区別しておくで見やすくなります。

長いテキストの場合は、どこで段落が区切れるか確認しておきましょう。日本語訳でなされている段落が必ずしも適切でない場合もあるので注意しましょう。そうして全体の流れ（起承転結など）を把握しておきましょう。

〈ステップ その4〉

ここで、他の翻訳聖書と比較してみます。新共同訳を用いているならば、新改訳、聖書協会共同訳などの新しい翻訳を参照することをお勧めします。余力があるならば岩波訳、フランシスコ会訳などもオススメです。さらに英語訳も役に立ちますが、利用できる範囲で十分です。教会の書棚にはこうした翻訳聖書の幾らかは備えておきたいものです。

比較してみると案外違いに気がつくものです。訳語が違えばニュアンスも違ってきます。明らかに解釈が異なる場合は、自分はどちらの理解を採るか考えなくてはなりません。また、読んだだけでは気づかなかった問題のありかを、この比較によって改めて発見できる場合もあります。気付いた点はノートに書き込んでおきましょう。

ちなみに牧師は原則として原語（ヘブライ語・ギリシア語）で聖書を読んで説教の準備をします。今日では便利な聖書ソフトが数種類ありますから、PC上でその作業を進めることができます。そうして牧師は

原典から言葉のニュアンスを直接把握するよう努めますが、それに近いことを翻訳の比較のよってある程度することができません。後は解説書（注解書）の力を借りれば、とりあえず十分です。

＊

ここまで聖書の他には何の本も開いていません。しかし、この段階でテキストのメッセージはだいたい形をとってきているはずです。今日の御言葉は何を中心的に伝えようとしているのか、どう子どもたちに伝えたいのか、という黙想は、すでにこの段階で始まっています。

ただ、自分の読解力や黙想を過信することのないように検証作業が必要です。それが、この後のステップです。

次回にその案内をしますが、今回のこの作業を、手を抜かないで丁寧に進めてください。慣れるまでに時間がかかるかもしれません。心急くことなく、聖書の一つ一つの言葉に向き合う作業は、それ自体が祈りに近いものになりますし、習熟すると愉しみにさえなります。

＊

さて、今回のおさらいです。

- 1 前後のつながりを確かめる。
- 2 テキストを黙読・音読する。
- 3 テキストをコピーして観察する。
- 4 翻訳聖書を比較する。

説教準備のために各自「説教ノート」を作ることをお勧めします。手書きでもPCでも構いません。そのノートを手掛かりに、後に説教原稿の執筆が始まります。質問があればどうぞ編集部までお寄せください。

（長野佐久伝道所）

長老になるための準備教育 (1)

市 川 康 則

(1) 長老主義制度による教会政治

——宣教長老と治会長老

長老になるための準備教育として必要な事柄を幾つか申し上げることにいたします。まず、そのための前提的（序論的）な事柄を確認しておきます。

教会を特定の組織また制度として運営し、形成するための働きが教会政治です。私たちの教会は聖書に教えられる政治制度また形態として、長老主義政治を採っています。これは単純に言えば、長老と呼ばれる複数の役員による共同の教会指導のことです。

新約聖書で教えられ、また命じられている恒常的な職務は、長老（＝監督）と執事です。長老は必ず複数立てられ、共同で教会（すなわち教会員）を霊的に指導し養育します。既に最初期の教会に、長老の中に特に御言葉の教えにも労する長老がいましたが、時の経過の中で他の長老たちから区別され、一つの職務としての教師職が確立して行きました。しかし、それでも、教師も長老の一形態であるという理解が継承されて行きました。それで、長老主義教会では、教師（牧師、宣教教師）は宣教長老と言われます。

これに対して、教師ではない長老（通常言われる長老）は治会長老と言われますが、文字通り、教会を治める、すなわち霊的に統治する人たちです。そして、治会長老（複数）と宣教長老（多くの場合、一人）とで

会議ないし議會を構成し、聖書と教会憲法（特に教会規程）の下に合議制によって意思決定し、それぞれの務めを果たすようにしています。

治会長老は決して、単なる何かの係ではありません。長老は、本来の、唯一の統治者（牧者）であられるイエス・キリストの器であり、また、キリストに代わる助け主（弁護者）、聖霊の神の器であって、統治権能を委ねられた人たちです。しかし、真の統治者の器となるということは、その統治者の僕になるということに他なりません。長老になる（長老職に就く）上で最も重要なことは、この点の明確な自覚・認識です。

さらに、キリストの僕であることは、キリストが弟子たちに関わられたように教会員に関わらなければならない、ということでもあります。キリストは、弟子たちの洗足に象徴されるように、僕となられました。それゆえに、長老もまたキリストの僕として、兄弟姉妹たちの僕でもあるのです。

牧師と長老は共に長老ですが、宣教長老が取り次いだ神の言葉が教会員において豊かに実を結ぶために労する、言い換えれば、キリストが聖霊の神により、御言葉を通して群れを牧されることに良く仕える—これが治会長老の務めです。牧師も長老も、神の言葉が会衆を霊的に養い成長させるために、それぞれの働き（宣教と治会）に召された人たちに他なりません

牧師と長老はそれぞれの働きをします

が、その基礎付け・方向付けのために一つの会議を構成します。これが小会（小会議ないし小議会）と呼ばれる組織です。この他に、一定地域の諸教会の代表者である教師と長老が構成する中会（中会議／中議会）、そして、全国の諸教会（あるいは諸中会の）代表としての教師と長老が構成する大会（大会議／大議会）があります。これは長老主義政治の特徴の一つ、教会会議の段階的構成です。

長老候補者は長老主義政治のこのような特徴を良く理解しておく必要があります。

(2) 一教会員としての信仰と奉仕における成長

教師も長老も決して会衆の上位にある聖職者ではありません。それぞれ、一教会員に他なりません。したがって、会衆を霊的に指導し統治する役員自身が、一信徒として信仰生活と教会奉仕においてその良き実例となることが大切であり、また有益です。「政治規準」の第五十五条(治会長老の任務)の第四項に「個々のキリスト信者が愛の律法によって果たすべき一切の義務を、特に治会長老として果たすこと」と定められている通りです。

長老候補者は一信徒として、信仰告白あるいは成人洗礼に際して求められる誓約事項（全六箇条）に忠実であることが前提である、と言わなければなりません。特に第五・六箇条（教会生活・奉仕、改革派教会の政治）の順守と励行が必要です。

礼拝出席は（特に御言葉に聴き、聖餐に与ることは）教会員としての霊的生活の土台・出発点です。また、教会はその頭であられるキリストの体であり、信徒はその体の各部分ですから、各自は体全体の中で自

分が占める位置、果たすべき役割を的確に理解し、良き働きをしなければなりません。

また、教会を建て上げることの一環として、献金があります。貨幣経済社会に生きる限り、牧師給与、水光熱費、保険金、工事費、その他諸々の必要も、お金で賄^{まかな}うしかありません。そのために献金が必要な訳です。

しかし、金銭を始め、すべての持ち物（と思っているもの）は、実は、神の御心に適った仕方^さで管理、運用するためにこそ委ねられた賜物であるのです。そのために、教会の必要を良く知り、どのように、どれほど捧^{ささ}げるかを十分考え、神への感謝と献身の証にふさわしく捧げなければなりません。決して律法主義や功績主義に陥ってはいけません^が、神が養い支え続けてくださることへの信仰と感謝から、収入に応じて賢く捧げましょう。

長老候補者は、自分の礼拝出席（また欠席）や奉仕活動や献金の現実がどうか、他の信徒から見て（模範でないにしても）有益な見本となっているか、自問、自戒することが必要です。

洗礼（信仰告白）の誓約事項の第六箇条は、私たちの教会政治の受容とそれへの忠実（信頼）、およびそれによる教会の純潔と平和の努力を求めています。一言で言えば、教会の一致の努力です。教会政治は、政治のための政治ではありません。頭なるキリストの一つの体にふさわしく、各部分が全体として一つにまとめ上げられるためにこそ、教会政治がある訳です。

このことと関連して付け加えますが、教会そのものが一つの共同体ですから、その運営と形成の責任主体である小会も、会議形態の共同体です。それゆえ、そこでは各

人が自分の意見を明確に述べると共に、他者の意見を真剣に聞くということが不可欠です。謙遜と忍耐の内に、他者との意思疎通の習熟にも努めましょう。

教会政治は役員だけの関心事また管掌事項ではありません。それは全教会員が関わり、参与する事柄です。教会政治は、キリストが聖霊によって御言葉を用いて教会を統治されることの、制度的具体化のための方法また制度です。長老候補者は一信徒として自覚的、積極的に、ふさわしい仕方て教会政治に関わるように努めることが必要です。このような努力は、長老職に就いたとき、その職務遂行のための良き備えとなります。

(3) 御言葉の学びと祈りにおける修練

ここからは「政治規準」第五十五条が定めている長老の務めを個別に取り上げます。但し、個別と言っても、個々の務めが互いに独立している訳ではなく、密接に他の務めと関連しています。

第五十五条第一項で教会員の中に教理と道徳の腐敗が生じないように見守ることが、第五項で教会員のための牧会的祈祷が、第六項で説教が実を結ぶように見守ることが、そして、第八項で御言葉を教え、率先して伝道することが、それぞれ定められています。

これらの務めを果たすために必要な共通事項を要約して言いますと、長老は特に御言葉の学びと祈りに熱心になることが第一義的に重要である、ということです。なぜなら、御言葉と祈りはセットだからです。御言葉は、神が民に語られることですが、当然、それが聴かれることを前提にしています。祈りは、民が神に語ることですが、

その内容が御言葉に適っていることを前提にしています。これら二つは、契約関係における神の行為と民の行為で、互いに他方を前提とするという相互関係にあります。

長老は、教会員の信仰（教理）と生活（道徳）が誤らないように、また、教会員が御言葉を聴いて励まされ、それを具体的に実践して、信仰がさらに成長し、奉仕活動が豊かになって行くように、気を配らなければなりません。しかし、それができるためには、聖書の知識が不可欠です。聖書の教えが真の実りか否かの判断基準だからです。

そして、そのために祈りが不可欠です。その祈りは、長老自身の適切な働きのためであると共に、教会員の信仰と生活の適正化を願って神に執り成すためです。長老は祈りにおいて教会員を担い、神の前に差し出し、神の祝福に与らせるのです。そもそも、真の牧会者、祝福の授与者は神ご自身です。長老は、神が会衆にそのようにしてくださるための器に他ならず、それゆえ、その器が中心的になすべきことは、神の祝福が会衆に与えられることを祈り求めることです。

このように、御言葉を学び、正しく知り、それに従って教会員を霊的に養う、そしてこれと一体となって、神に執り成しの祈りを捧げる—これが長老の最も重要な務めです。

御言葉の学びの必要性に関連して、さらに申しますと、教会では時々牧師が説教できないことがあり、長老が代わって説教しなければならない場合があります。したがって、御言葉を良く学んで理解していないなら、この務めは十分に果たせません。

御言葉を学ぶとは、より適切に言い換え

れば、神が御言葉を通して語られるのを聖霊の導きの下に聴くということです。御言葉の学び（聖書とその教理の知識）は、知識のための知識ではなく、根本的に会衆を霊的に養うための知識です。そのためには、先ず自分自身が御言葉を聴き、受け取らなければなりません（拝聴し、拝受するのです）。

そして、この姿勢は神への祈りの姿勢と

同じです。祈りは神への語りかけですが、決して友達に語りかけるようなものではなく、平身低頭しての懇願です。そして、何を願うのかと言えば、神が聖書を与えられた目的一広く言えば宣教、長老の務めに則して言えば牧会一のために、自分がふさわしく調えられ、用いられることです。長老候補者は今から御言葉と祈りに熱心になりましょう。（千城台教会牧師）

特別寄稿

家庭における契約の子の教育について

ファンデアヴァット・ステファンとカリナ

「聞け、イスラエルよ。私たちの神、主は唯一の主である。心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くしてあなたの神、主を愛しなさい。今日私が命じるこれらの言葉を心に留めなさい。そして、あなたの子どもたちに繰り返し告げなさい。家に座しているときも、道を歩いているときも、寝ているときも、起きているときも唱えなさい。その言葉をしるしとして手に結び、記章として額に付け、また家の入り口の柱と町の門に書き記しなさい。」（申命記6章 4～9節）

私たちファンデアヴァット一家における契約の子の教育についていくつかのアイデアを分かち合いたいと思います。その背後に、南アフリカ・オランダ改革派教会の信仰の伝統も当然あります。2009年4月に当教会から派遣されて、始めて宣教師として徳島市に参りました。そして、我が家ではそちらで、ほぼ7年前からホームスクーリングを実際に始めました。それ以来、色々な挑戦を直面してきました。この度、その間経験してきたことについて共有したいと願っております。

ホームスクールは依然として議論の余地があり、日本ではまだあまり知られていません。ホームスクーリングは非常に私的な選択です。私たちはそれをすすめるしやうとしているわけではありません。（もし出来たとしても）。我々は皆がそうすべきだと

言うつもりもありません。我が家の状況は、日本では非常に特殊です。私たちは、ある哲学思想を持つ西洋的なところからやって来ました。こういう外国人が大胆な選択をするのは、ある意味では、ずっと簡単です。西洋で大勢の人がホームスクールをしているのは事実で、日本でもそれを選ぶ人が増えてきているように思います。ホームスクーリングは新しい概念ではありません。家庭での学習は、いつの時代でも行われてきました。

まず、次のことを強調すべきだと思います。ホームスクーリングのすべてが簡単で素晴らしいわけではありません。多くの試練があつて、多くの不安も勿論あります。保証はありません。私たち（ステファンとカリナ）は親として、これをやり遂げるために多くの時間と労力をかけなければなりません。時折、自分たちは十分にできているのか、別の方法で行った方がいいのか、正しい方法でやっているのか、などと思うことがあります。またホームスクーリングをすれば、確実に自分の子どもが親の用意した道を歩んでいくと言えるものでもありません。そのような保証はありません。クリスチャンの親として私たちは、主にある方法で契約の子どもたちを訓育することに全力を尽くしています。しかし最終的には子どもは自分で自由に選択をすることになります。私たちに言えるのはただ「神の恵

みによって」ということだけです。

そういうわけで、私たちがホームスクーリングをすることに決めた経緯について分かち合いますが、本当に個人的なレベルでの話になります。ホームスクーリングをさせていただけること自体が素晴らしい賜物だと感じています。私たちは、深く祈りつつ、多くの人と相談し、いろいろ調べてこう決めましたが、克服すべき試練も（時には毎日のように）あって、一生懸命努力しているのです。西洋でホームスクールが選ばれている理由はいくつもあります。宗教的な理由。実際的な理由；住んでいる場所が良い学校から遠く離れている；子どもに何らかの学習障害や身体障害がある；宣教地において；母国語でも教えたいと望んでいる；など。学業レベルの観点から一親が公立学校よりも優れた教育を提供できると感じている。

西洋でのホームスクーリングもまた人気が高まっています。現在、アメリカでは220万人、南アフリカでは5万から10万人のホームスクールの生徒がいます。公立学校と比較して、ホームスクールの子どもが学力的にどのような成績を取めているか示すことができますが、私たちがこれを選んだのは、単に学業レベルの観点からの理由によるものではありません。

私たちがホームスクーリングを選んだ理由は、子どもたちを英語だけでなくアフリカンス語、そして日本語も話せるようにしたいと思ったからです。いくつかの宣教師家庭がしていच्छるように、うちの4人の子どもを小学校の時から、あるいは

中学校からでも、インターナショナルスクールに入れる経済力が私たちにはありません。実は私たちは、子ども達を何年かは日本の学校に通わせようかどうしようか、長い時間をかけて話し合いました。そして実際、上の二人の子は日本の幼稚園に行きました。

ホームスクーリングを選んだ理由はいくつかありますが、決定的な理由の一つは教育のあり方です。言い換えれば、私たちがどのように教育を定義しているかです。教育へのアプローチは、古くは初期のギリシアから始まり、教父によって修正されました。20世紀まで、教育は真理、美、善を追求することでした。しかし、教育に対する現代のアプローチは、時代を超えて受け継がれてきた古典的なアプローチとは大きく異なります。古典的なアプローチは、全人教育を目指していて心、体、霊にまで及びます。教育の目標は、常に人をより高く、より良くすることでした。現代的なアプローチは、物質的なものだけに焦点を当てています。それは人生においてより重要なものがあることを否定します。そして人間を、社会や経済にとって最大の益となるように操作されるべき高度に発達した「動物」として見えています。

公立学校を批判することなく、ホームスクーリングの選択について話すのは難しいです。しかし、公立学校批判をするつもりはありません。私たち（ステファンとカリナ）も普通の公立学校に行き、そのことはとても良かったと思っています。振り返ってみると、確かに学問的なことは学校で学びました。けれども、我々が言いたい「教

育」というものは家で（家族によって、家庭の営みの中で）行われていました。家族との情熱的な議論を通して教えられました。あるいは一人の読書の時間を通して教えられました。そして、(キリスト者である)両親や親しい友人とこれらの考えについて話し合いました。申命記6章4～9節にあるように、「家に座しているときも、道を歩いているときも、寝ているときも、起きているときも唱えなさい」、こういうことが私たちの人生を何よりも変えました。こういうことが、自分の目標についての考え方、何が真実なのか、何が美しいのか、何が良いことなのか、ということについての考え方に影響しました。

公立学校へ通っていても、これは家庭で行えることだと思います。しかし、時間の制約の中で、テスト（試験）を行なうこととカリキュラムをこなすことに重点が置かれて、競争が過熱していつているために、その人全体を教育することがますます困難になってきています。だから我々が今までのホームスクールの経験について話するとき、本当に感謝の気持ちを感じます。私たちにとって、この選択を得させられたことは主の恵みです。

今の子どもたちが余暇の時間をとることは良くないことだというプレッシャーを受けているように思います。私たちが考える「余暇 (leisure)」とは、厳しく決められた学校のカリキュラム以外のことをしてよい「ゆるされた時間」を意味します。ヨーゼフ・ピーパー (Joseph Pieper、20世紀の有名なドイツの哲学者)によれば、「余暇は怠けることではない。体と魂の今のありさまを

受け入れる力を養う心の態度と魂の状態」なのです。

皆、身をもって感じているように、私たちの生活はどんどん時間に追われていつています。「学ぶ」ということをまだ十分に会得できていない子どもたちは、じっくり考えたり瞑想したりするという健全な習慣を学ぶべきなのに、それができないようにする方向へと引きずられていつてしまいます。それで、ほとんどの子が、「勉強がすべて」という世界に追いやられてしまいます。ピーパーによれば、それが現代のせわしなさや絶望を引き起こしました。「健全な哲学や真の宗教は、余暇の中でのみ生まれる。——神のご性質のことも含め、あらゆる事をじっくり考えるための余暇。余暇は今までもこれからいつも、すべての文化の基礎であり続ける。」

(ヨーゼフ・ピーパー)

授業やテスト、クラブ活動のプレッシャーはさておき、学ぶこと自体が「学校」内でなされる活動だけに押し込められてしまっているというのが問題です。そうではなくて、私たちの望みは、生きる上での特権として自発的になされるはずの「学び」に、一生追いまかれるということにならないようにする、ということではないでしょうか？ 一生、生きる主の御言葉がしるしとして手に結ばれ、記章として額に付けられるということではないのでしょうか？

ほかでもない自分の子どもたちによって、私という人格は形成されてきました。子どもたちは私の最も罪深い態度を暴きましたし、今も暴いてきます。私たちにとって教育の目的は、突き詰めると、神が私た

ちにそうなるようにと願っておられるより完全な人間になることを学ぶことです。教育は、私たち全員にとって、聖化のプロセスです。学ぶこと、赦しを求めること、謙虚になって神が与えてくださる真理とイエスの献身的な愛にある美しさを探すことです。聖霊が私たちの生活を治められることを許すなら、聖霊の実が私たちの生活の中に生まれるという良さもあります。

私たちのビジョンは、私たちの子どもたちがゆっくりと時間を過ごしつつ、アイデアやコンセプトについて熱心によく考えることです。そうすることで、人生とは何か、その目的は何か、という大きな問題について語ることができるようになります。それは神の栄光をあらわし、御名を賛美することにもつながります。ですから私たちの家では、神について、歴史について、そして文学について、さまざまな考え方や議論が出てきます。そして、それについて話しあったり、考えたり、論争したりすることに時間をさいています。私たちは教育の中心に主にある美、真理、善の三本柱が立っている雰囲気を作ろうとしています。私たちはこれらのことを味わえるように、意図的に時間を守っています。

この点で、私たち親は子どもとの関係を大切にしています。ホームスクーリングの最大の利点の一つは、多くの時間を一緒に過ごすことができることです。我々は子どもたちと一緒に過ごすのが大好きです。私たちは彼らと学び、なぜ？ とふしぎそうな顔をしたり、わかった！ と納得したりする瞬間を見ることが大好きです。悪い日もあります。涙が出ることもあります。ぐっ

たり疲れてしまうこともあります。

けれども、穏やかで愛情あふれる家庭のぬくもりは、家の外にどんな最高の場があったとしても、何にも代えがたいものです。穏やかで愛情あふれる家庭は、最適な学習をそこで行うためにも必要ですし、子どもたちの感情的安定のため、子どもたちがバランスのとれた大人に成長するためにも必要です。しかし(そういう家庭環境は)、子どもたちとあなたとの関係のためにより重要です。親が自分を大切にしてくれていること、家族との生活があなたの最も重要な優先事項の一つであるということが子どもたちにわかるために重要です。名ばかりの家族ではなく、満たされた豊かな家族生活が営まれていることが大切です。

クリスチャンであるなしに関わらず、どこの家庭でも、豊かで満たされた家族生活を願うのではないのでしょうか？ しかし、クリスチャンの家族はそれだけでよいのでしょうか？ 私たちの子どもたちを訓育するように神に命じられている務めについてはどうでしょうか？ 申命記6章で「今日わたしが命じるこれらの言葉を心に留め、子どもたちに繰り返し教え、家に座しているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせなさい」と命じられていることについてはどうでしょうか？

子どもたちを訓育するためには、一緒に過ごす時間が必要です。子どもたちに影響を与える時間。子どもたちと話をする時間。子どもたちとの関係を築く時間。イエス様はどのように弟子たちを教えましたか？

彼は弟子たちと一緒に歩き、一緒に食事をして、話を聞かせました。イエスさまは時間を費やして弟子たちと過ごされました。

どうすれば自分の子どもに教えることができますか？ 難しそうに聞こえるかもしれませんが、これに答えるのは簡単です。母親や父親より教えるのに適している人がいるでしょうか？ 自分の子どもをよく知っている親よりも(いい人がいますか)？ 誰が自分の子どもの最善を思っているのでしょうか？ 自分の子どもが直面している課題にどう対処すべきかについて絶えず祈っているのは誰ですか？ 私たちは教師ではないと言うこともできるでしょう。ソクラテスその人が言ったように「私は誰にも何も教えることはできない。私にできるのは、彼らに考えさせることだけだ」。私たちは子どもたちと一緒に学んでいます。答えが分からないときは、子どもと一緒に調べます。子どもたちは私たち親がすべてを知らないことを知っています。すべてを知っている人は誰もいません。でも、私たちは学ぶのが大好きです。子どもたちもそれを知っています。学びたいという気持ち、やれば出来るという信念があれば、たいいていの人は何んでも習得可能だと思います。

特に現代では、問題は、教育資源にアクセスできないということではなく、選択肢が多すぎるというところにあります。しかし、選択肢が多いということは、カリキュラムを自由に変更したり、ある科目で問題があったときに専門家の助けを求めることもできたりする、ということでもあります。私たちはまた、学びは燃え立たせるべき火であると本当に信じています。親としてす

べきことは、子ども達を情報で満たすことではありません。私たち親としての仕事は、(子どもたちの中に) 点いてほしいと願うこの火のために、最善の雰囲気と状況を作り出すことです。

我が家は数年前に、毎日子どもたちにもたらしたい最も重要なことをまとめました。それを「6つのルール」と呼んでいます。これが達成されると、十分な学びができたなと感じます。そうでない場合は、6週間後に学びを再評価します。

6つのルール：

1. 素晴らしい本を読む体験—一人の読書の時間、本について議論する時間にもたらされます。
2. 信仰に生きる体験—信仰についての本やクリスチャンの伝記を読むこと、聖書の学びや祈りによってもたらされます。
3. 外に出る体験—散歩や走り回ったりすることやスポーツ・クラブ活動など、毎日の外での時間によってもたらされます。
4. 人生を楽しむ体験—一緒にするお菓子作り、遠足、一緒に冒険をすることなどによってもたらされます。
5. 喜びと感謝をもって奉仕する体験—家でお客様を受け入れてもてなすこと、それぞれが家庭での責任を果たしてお互いを助けることをとおしてもたらされます。
6. 意義のある仕事をする体験—毎日の手伝い、個人的な学習、家の内外でのいつもとちがう仕事をするることによってもたらされます。

うちの子どもたちが私たちの選んだものとは別の人生を想像できるのかどうかわかりません。彼らは学校生活についての本を読んでいますから、他の子どもたちが何をしているかを知っているはずです。特定の科目を極端に嫌っている子もありますが、学びは私たちの家全体の自然な一部となっています。特に、子育ての基礎だけでなく日本語を学ぶのに未だに日々苦戦している母親（カリナ）や父親（ステファン）と一緒にですから（その姿を見て、「学ぶ」とはど

ういうことかを子どもたちに知ってほしいと思っています）。

不十分なところや、訂正した方がよいと思われるところ、課題などもたくさん与えられていますが、さらに主の真理、美、善を求めて、主に向かって、自らを改革しつつ、主の召しにお応えしてまいりたいと思います。感謝をもって。

（神戸改革派神学校教授）

信仰告白の証

私の信仰

田 好 基 生

私は2002年1月30日に生まれ、2014年4月20日のイースター記念礼拝にて信仰告白をしました。当時中学1年だった私が信仰告白へと導かれた理由として最も大きかった事が二つあります。一つ目は、私が受洗する約半年前のクリスマス記念礼拝で兄が信仰告白をしたことです。

私には年の近い兄と従兄弟がいます。兄はもちろん、従兄弟も同じくクリスチャンホームなので毎週教会で一緒に礼拝をしていました。私が小学校高学年の時に朝礼拝後の求道者会に3人で参加し始めました。当時江古田教会の牧師は風間義信先生で、毎週私たちの為に時間を割いて下さっていました。しかし求道者会を続けている中で、風間先生が仙台教会に異動することが決まってしまう、私の中で無牧の期間がいつまで続くのかという焦りと、ずっと学んできた風間先生より受洗したいという思いがありました。これが私が受洗するきっかけとなった二つ目の理由です。

クリスチャンホームで育った私は、平日に学校に行く事と同じ感覚で日曜日に教会に通っていた為、「まだ寝ていたいな」という事はよくありましたが、「教会に行きたくないな」「友達と遊びたいな」と思ったことはあまりありませんでした。しかしその反面、教会が日常の一環となってしまう、日曜日に教会に行く意味、礼拝の意味を真剣に考えてみた事はありませんでした。信仰告白についても「いずれするのだ

ろうな」と軽く思っていました。正直、求道者会も兄と従兄弟がしているから一緒にしようかな、と軽い気持ちで参加し始めました。信仰告白をする事は自分の中で遠い感覚でしたが、東部中会のバイブルキャンプで同世代の友達が「礼拝に対する姿勢と自分の信仰について悩んでいる」と言っているのを聞いて、私も少し考えてみよう、と思ったのを鮮明に覚えています。何も考えず、ただ礼拝に出席している自分が恥ずかしく思えたのと同時に、同世代の友達がここまで考えている事に驚いて、信仰告白をしたいという思いが自分の中で芽生えていくのが分かりました。もちろん求道者会で学んでいく中で、信仰告白をしたいという思いが強くなったという事もありますが、信仰告白をしたいと思い始めたのはキャンプがきっかけでした。

キャンプは初めて参加する場合や、自分の教会から一緒に行く子がない時、どうしても引き気味になり、行きたくないと思ってしまう事があると思います。しかし、「なぜ自分は教会に行っているのだろう」「何の為に生きているのだろう」等、疑問に感じたり、教会の人や友達に相談しにくい事があつたら、キャンプに参加してみても、スタッフの方や先生や同世代の友達に相談してみたらどうでしょうか。

私自身は悩み等があつてキャンプに参加したことはないですが、参加してみて仲の良い友達や、本当に尊敬できるスタッフに

出会うことができました。また、自分と近い年の子が何を感じているのかを知ることができる場所だと思います。私の尊敬しているスタッフの方はもう社会人になってしまい、中々会うことができませんが、私の中で信仰の友として、また人生、信仰における先輩として心の拠り所になっています。

私は信仰告白をする前は、受洗すれば何かが変わり、毎週礼拝の意味を考えて出席することができると思っていました。しかしそうではなく、そのようになる為に、自分で祈り求めていくものだと実感しました。また、自分が教会員としてどのような奉仕が出来るのか、という不安もありました。信仰告白をしてから約5年が経ちますが、いまだにその答えを見つけることができません。しかし、もう高校を卒業しようとしている今、自分が教会の中で何ができるのかを具体的に考え、祈り求めていきたいと思います。また、私は幼い頃から教会の沢山の方々に支えられて育ってきたので、私も同じように教会の子供たちを支え、助けていきたいです。このようにして信仰継承もされていくものだと思います。

私は高校卒業後、専門学校に通うので二年後には就職を控えています。まだ、どんな会社に入りたいか、具体的な就職先は決まっていますが、教会から離れる生活は

絶対に避けたいと思っています。先日の礼拝の説教で、浅野先生が「イエス様は、教会の心臓であり命である。」とおっしゃっていました。その命であるイエス様と交わる場所は教会だと思うので、これからも健康が許される限り、週の初めに教会に戻って、命を得て、派遣された場所で、自分がやるべきことをやる生活を送っていきたいです。この先、生きていく中で辛い事があったり、また神様に背き、道を外れてしまいそうになる事があるかもしれません。しかし、その都度祈りつつ、神様と私の関係を見つめなおし、教会で神様の言葉に耳を傾けていきたいです。これからも神様と教会に仕える僕として歩んでいきたいと思っています。

最後に私が幼い頃から大好きだった讃美歌を紹介して終わりたいと思います。

「両手いっぱい愛」

「心を高くあげよ」 讃美歌21、18番

両手いっぱい愛は、歌詞が三番までありますが、1番から全て繋がっていて、心に響く讃美歌だと思っています。神様がどれだけ私たちを愛して下さっているかを改めて感じる事ができるので、是非聞いてほしいと思います。（江古田教会会員）

聖書默想・説教展開例・分級展開例

4月5日 ヨハネによる福音書12章27～36節

【解説と黙想】

一番大切なこと：神と共に歩む

【教理の解説】

『子どもと親のカテキズム』の問1です。どのカテキズムもそうであるように、最初の問いは信仰の核心を教えると同時に、カテキズム全体の特色を映し出す内容になっています。この問1は、「私たちにとって一番大切なことは何ですか」と問うて、「神さまの子どもとして、神さまと共に歩むことです」と答えます。ウェストミンスター小教理問答が、「人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことです」と教えている内容を、「神さまと共に」という言葉で子ども向けに分かりやすく言い直していると言えます(問2を参照)。また、「歩む」という動きのある言葉と、それと関連して「道」という言葉が全体の構成を貫いていて、子どもたちが生き生きと歩んで成長していくイメージを与えています。

【テキストの解説】

「歩む」というカテキズムのキーワードに合わせて、「光のあるうちに歩きなさい」という言葉を含むヨハネによる福音書12章27～36節が選ばれています。エルサレムに入城されたイエスさまが、まもなく十字架にかけられることを群衆に予告された場面です。イエスさまと父なる神さまとの対話(27～29節)から明らかなとおり、イエスさまが十字架の死を遂げることは、神さまの栄光が現されることです。そのことが32

節では「上げられる」と言われており、それはまた、すべての人をご自分のもとへと引き寄せるため、つまり救いのためでした。イエスさまはその救いを「光」と呼ばれ、「光のあるうちに歩きなさい」と言われました。イエスさまを信じて、神さまと共に生きるようにとの招きです。

【黙想】

カテキズムは、子どもたちが「神さまと共に歩むこと」が一番大切なことと教えます。子どもたちが元気に歩いている姿を思い描くことができます。しかし、子どもたちだつて疲れて歩けなくなるときがあるでしょう。子どもだからこそすぐに立ち止まってうずくまってしまうこともあると思います。そのようなとき、まずイエスさまがご自分の道を歩んでくださったことを思い起こします。それも、イエスさまは私たちのところへ歩いてきてくださり、私たちを救い、さらに私たちを神の国へと導くために一緒に歩いてくださるのです。この恵みを知ることで、私たちもまた歩き出すことができるのです。

【子どもへのメッセージ】

神さまと共に歩むことのすばらしさを知ってほしいと思います。それが一番大切なことです。そして、それは、神さまにとっても一番大切で、うれしいことなのです。

(石原知弘)

《参照聖句》 創世記5章24節、6章9節、28章20節、申命記31章6節、ミカ書6章8節、ヨハネによる福音書14章6節、コロサイの信徒への手紙2章6節

《教理問答》 子どもと親のカテキズム 問2、18、39、42、56、69、83、ウェストミンスター小教理問答 問1、12、20、ハイデルベルク信仰問答 問1、6、53、74、120

4月5日 ヨハネによる福音書12章27～36節

【説教展開例】

一番大切なこと：神と共に歩む

◇----- 単元のねらい -----◇

カテキズムの第一問は、一番大切なことは「神さまと共に歩むこと」と教えています。神さまを信じて歩むことのすばらしさを伝えたいと思います。そのためにまず、神さまご自身が私たちと共にいることを願ってくださっており、イエスさまを私たちに与えてくださったということを覚えたいと思います。そして、「歩む」というイメージを大切に、子どもたちが神さまと共に生き生きと歩んでいけるような語りかけができればと思います。

「イエスさまの道を歩く」

毎日の生活の中で大切なことはたくさんあると思います。どんなことがあるでしょう。ごはんを食べること、よく寝ること、勉強すること、友だちと仲良く遊ぶこと。これらはどれも大切なことですが、聖書が私たちに教えている一番大切なことは、私たちが神さまの子どもとして、神さまと共に歩むことです。考えてみれば、ごはんも友だちも神さまが与えてくださったものです。神さまがおられなければ、私たちは楽しいことも何もできません。神さまを信じて、神さまと一緒に歩いていくことが一番大切なことなのです。

「歩む」と言いました。聖書では、神さまを信じて生きることを、「歩む」、「歩く」と言っています。今日の箇所35節には、「光のあるうちに歩きなさい」とあります。みんなは毎日どれくらい歩いているでしょうか。学校の行き帰り、家の中でも歩いていると思います。神さまを信じることは、そのように歩いていくことです。いつでもどこでも神さまと一緒になのです。そして、一歩ずつ一歩ずつ前へ進んでいくように、一歩ずつ一歩ずつ成長していくことができ

るのです。

でも、どうでしょうか。ときどき、歩けなくなることもないでしょうか。病気になったり、足が痛くなったりして、歩けなくなる時があります。そして、そういう体のことだけではなくて、心が痛くて、さびしかったり、苦しかったりして、前に歩けないように感じたりすることはないでしょうか。そういうときには、神さまを信じて歩くということも、難しく感じるのではないのでしょうか。

そのようなときには、イエスさまのことを思い出してほしいと思います。イエスさまは、立ち止まったり、うずくまったりしたりした私たちが、もう一度神さまと共に歩き出すことができるようになるために、私たちのところに来てくださったのです。

今日読んだ聖書の箇所は、イエスさまがもうすぐ十字架にかかって死なれるという場面です。イエスさまは27節で「心騒ぐ」と言われましたが、すぐに「わたしはまことにこの時のために来たのだ」とご自分が何のために世に来られたのかを確信されました。そして、32節で「わたしは地上から上

げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう」と言われました。「地上から上げられる」とは、十字架の死を意味していました。それで、「イエスは、御自分がどのような死を遂げるかを示そうとして、こう言われたのである」と書かれています。そして、その十字架は私たちを「引き寄せる」ため、つまり、救うための死でした。このとき周りにいた人たちはまだイエスさまの言葉を理解できませんでした。イエスさまははっきりと、みんなの救いのために自分は死ぬ、そのために来たと告げられたのでした。

ですから、こう考えることができると思います。私たちがイエスさまのところに歩いていく前に、イエスさまが私たちのところに歩いて来てくださったのです。自分はもう歩けないように思えるときでも、イエスさまが私のところに歩いて来て、助けてくださるのです。これが神さまの恵みです。

そして、イエスさまは、35節で「暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。暗闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのか分からない。光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい」と言われました。イエスさまは世の光として私たちの救いとなってくださいました。その光であるイエスさまを信じて、光の子として歩いていきなさいということです。みんなは夜の暗い道を歩いたことがあるでしょうか。光がなければ、目的地に向かってまっすぐに歩いていくことはできません。暗闇の中では、自分がどこにいて、どこに向かっているのかも分からないのです。毎日の生活でも、イエスさまを知らないと、歩いているようでも実はどこに向かっているか分からないのです。でも、世

の光であるイエスさまを知り、信じているなら、まっすぐに歩いていくことができるのです。

また、しっかりと歩いていくためには、「道」が必要です。道がなければ、歩いていくことはできません。イエスさまは、光であると同時に、道であるお方です。このあとで、イエスさまはこう言われました。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとへ行くことができない」（ヨハネ14章6節）。イエスさまを信じて歩むということは、イエスさまという道を歩いていくということです。イエスさまが私たちの道となってくださって、私たちを父なる神さまのところに連れて行ってくださるのです。これは、言い方を変えると、イエスさまを信じていれば、いつでもどこでも、必ず道があるということです。いいときばかりでなく、つらいときや苦しいとき、立ち止まってしまったようなときも、イエスさまを信じていれば、そこに道があるのです。そして、そこをまた歩いていけるのです。聖書では、イエスさまを信じる人たちのことを、「この道に従う者」（使徒9章2節）と呼んでいます。イエスさまを信じる人は、イエスさまという道を信じ、イエスさまという道を歩いていく人なのです。

今日から、『子どもと親のカテキズム』を学んでいきます。このカテキズムには、「神さまと共に歩む道」というもう一つの名前が付いています。そして、この後を見ていくと、「第一部 信じて歩む道」、「第二部 教会と共に歩む道」、「第三部 感謝しつつ歩む道」と、すべて「道」という言葉が出てきます。ここには、みんなに神さまと共に道を歩んで行ってほしい、そして、

一步一步前へ進んでいくように、一步一步成長して行ってほしいという願いが込められています。

そのために、神さまがまずイエスさまを与えてくださって、イエスさまが私たちのところに歩いて来てくださいました。その恵みを忘れないでいてください。そして、私たちにとって一番大切なことは、神さまにとっても一番大切なことだということを

知っておいてほしいと思います。実は神さまご自身が、私たちと一緒に歩いていきたい、それが一番大切なことだ、と思っておられるのです。神さまは、みんな一人ひとりのことを大切にしてくださっているからです。

このすばらしい神さまを信じて、神さまと共にこれからも歩いていきましょう。

(石原知弘)

《今週の暗唱聖句》

暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。

(ヨハネによる福音書 12章 35節)

4月5日 ヨハネによる福音書12章27～36節

【分級展開例A】

一番大切なこと：神と共に歩む

〈はじめに〉

まず「歩む」を幼稚科では、保育園・幼稚園に通うこと、食べたり飲んだりすること、遊ぶこと、誰かと話すこと、など毎日の生活をする（生きる）ことであると伝える。まだそのような認識を持つことが難しい幼年の場合は、「歩む」は、歩くことそのままに「神さまといっしょに歩く」として話をしてもよい。

〈分級でのお話のすすめ方の例〉

分級としては、ヨハネ12章35節と36節を中心に話す。

「暗闇」と「光」の対比で、幼少の子どもたちに状況がわかるように、夜と昼に置き換えてイメージを持たせる。

「光のあるうちに歩く」を説明する準備として、エレミヤ書13章16節などが有益な参照箇所の一つである。

「光のあるうちに歩く」ことは、道を見ながら歩くことができるが、「暗闇の中を歩く」ことは、道が見えないので、「自分がどこへ行くのか分からない」状態になる。「光の子」は、道がわかるように「光のあ

るうちに歩く」者であり、「光を信じる」者である。

「光」とは誰のことか、を子どもたちに問い、考える時間を与える。「光のあるうちに歩く」ことは、「光」が一緒であること。だから、「光」は、神であるイエスさまであり、イエスさまと一緒に居てくださることが、光の中を歩くことである。それは、すなわち光である神イエス・キリストを信じることである。

しつもん1

「光の子」はどこを歩きますか？

- ① 暗いやみの中
- ② 光のあるところ

しつもん2

わたしたちは「光の子」ですか？ 「光」はだれのことでしょうか？

しつもん3

あなたが「光のあるうちに歩く」とき、だれがいっしょにいてくださると思いますか？

4月5日 ヨハネによる福音書12章27～36節

【分級展開例B】

一番大切なこと：神と共に歩む

イエスさまが十字架におかかりになる時がいよいよ近づいて、弟子たちに真剣に話しになったことが今日の御言葉に記されています。イエスさまの十字架は、人々を救う業に失敗して殺されてしまったことを意味しません。周りの人たちはそう思ったに違いありません。なぜなら、十字架は犯罪人を処刑する方法だったからです。けれども、イエスさまの十字架こそ、罪人の罪を赦すために神さまが用意された救いの道でした。私たち罪人が、罪を赦されて、神の子として明るい光の中を生きることができるよう、イエスさまは十字架に上られます。自分が死ななければならないことを承知で、神さまの栄光のために十字架を背負って歩まれます。天からの声は、そのイエスさまのお姿に神の栄光が現れると証言します。

イエスさまは「光のあるうちに歩きなさい。……光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい」と呼びかけておられます。光のない暗闇を歩いたことがありますか？学校や塾の帰りに薄暗い夜道を行かねばならないことはあるかも知れませんが、通りには街灯がついていたり、住宅の灯りがありますから真っ暗ではありませんね。「手に触れるくらいの闇」という表現があります。自分の手が見えないぐらいの真っ暗闇です。道路どころか足元も見えませんが、怖くて一歩も踏み出すことができなくなります。

イエスさまはそんな暗闇に神さまが送っ

てくれた光です。悪いことばかりが続いて、人の心も信じることができなくて、毎日が真っ暗に思えるような時にも、イエスさまがそばにいて光でいてくれます。

では、イエスさまを十字架にかけた人々にはそれがわからなかったのでしょうか。残念ながらわからなかったのです。神さまを信じない人の心は、罪で覆われて光を通さなくなってしまっています。イエスさまが十字架で死ぬことは神さまのご計画であつたとはいえ、神さまを信じない人の心がイエスさまを十字架に送ったのです。だから、「光を信じなさい」とイエスさまは言われます。神さまを信じて、イエスさま救いの光であることを信じなくては、明るい光のもとで歩き続けることはできません。

しかし、そんな罪人の暗い心に、イエスさまの十字架が光を灯してくれます。イエスさまの十字架が果たされた時、神さまの救いが人の心に届きます。光の差し込まなかった暗闇に、イエスさまの愛が暖かな光を灯します。そんなふうに神さまの力で、人はイエスさまの光をいただいて、心から信じて歩むことができるようになります。そして、本当に信じている人は光の子です。神さまの光によって明るくされた人は皆、光の子になります。光の子は自分の心が明るいだけではありません。まわりを明るく照らすことができます。その人の内でイエスさまが明るく輝いているからです。

4月5日 ヨハネによる福音書12章27～36節

【分級展開例C】

一番大切なこと：神と共に歩む

1. 人の生きる目的は「神の栄光を表すこと」だとウェストミンスター小教理問答第1問は述べています。「神の栄光」とは何でしょうか。人はどのように「神の栄光」を表すことができるのでしょうか。

答えは、イエス・キリストです。神の子イエス・キリストこそが神の栄光であり、人となられたキリストにそれが表れています。ですから、イエス・キリストを信じて、その光に照らされて、キリストに従う道を歩む人に神の栄光は表れます。

2. 神またはキリストが「光」と表されるのは何故でしょう。旧約聖書に思い当たる箇所があれば挙げてみましょう。例えば、創世記1章3節、イザヤ書9章1節、60章1節、詩編119編105節、など。

また、ヨハネによる福音書の1章1節から14節を読んでみましょう。

ここで、キリスト＝言葉＝命＝光、というつながりが見えてきます。これがどのような意味をもつのか考えてみましょう。

3. イエス・キリストが光としてこの世界に來られたのは、世界が暗闇であったからです。この世の暗さとは一体どんな様子でしょうか。あなたはどのように感じていますか。また、聖書はどのように語っているでしょうか。上で参照したヨハネ福音書1章を参照してください。他にも思い当たる箇所があるでしょうか。

4. イエス・キリストが神の光として世に來られたのに、人々はイエス・キリストをそうとは信じないで十字架につけました。何故でしょうか。

5. では、罪人はどのようにしてキリストを光と信じることができるのでしょうか（答えは分級展開例Bを参照）。

6. キリストを信じて「光の子」とされた時、あなたはどのようにその光を放つことができると思いますか。「光の道を歩む」とはどういうことでしょうか。

4月～6月

【分級展開例D】

「せいしょめいもくづくし」をうたおう

聖書は全部で66巻の文書が集められてできています。馴染みあるものも、そうでないものもあるかもしれません。けれども聖書全体が神の言葉ですから、様々な聖書の箇所を読むのが大切です。また、聖書の文書の順番を覚えておくと、それぞれの歴史的位置付けや、内容について知るための手助けになります。聖書に親しむために、聖書の文書の書名を覚えましょう。

下の歌詞は、「鉄道唱歌」（汽笛一声新橋を）のメロディーに合わせて歌います。

楽譜は「ふくい子どもさんびか」（いのちのことば社）に掲載されていますので、参照ください。なお下記の歌詞は、新共同訳聖書の書名に合わせて、改変しています。

19 せいしょめいもくづくし

Books of the Bible
SEIMATSU KIMURA

Tetsudōshōka
UMEWAKA ŌNO

旧 { そ う, しゅ つ, レ ビ, み ん, し んめ い き,
イ ーザ ヤ, エ レ, あ い, エ ゼ, ダ ニ ル,
新 { マ ー タ イ, マ コ, ル カ, ヨ ハ ネ で ん,
ヤ ー コ ブ, ベ ー ト ロ, ヨ ハ ネ, ユ ダ,
ヨ ー シ ア, し し, ル ツ, サ ム, れ つ おう,
ホ ー セ ア, ヨ エ, ア モ, オ バ, ヨ ナ, ミ,
し と, ロ マ, コ リン ト, ガ ラ テ ヤ しよ,
ヨ ハ ネ の も く し ー, に じゅう し ち (27)
れ き だ い, エ ズ, ネ ヘ, エ ス テ ル しよ,
ナ ー ホ ム, ハ バ ク ク, セ フ, ハ ガ イ,
エ ー フェ ソ, フィ リ, コ ロ, テ サ ロ ニ ケ,
きゅう し ん りょう や く あ わ せ れ ば
ヨ ブ, し ー, し んげ ん, コ ヘ レ が か
セ カ リ ヤ, マ ラ キ ー, さ んじゅう く (39)
テ モ, テ ト, フィ レ モ ン, ヘ ー プ ル しよ
せ い しょ の か ー ず は ろ くじゅう ろ く (66)

きゅうやく	旧約聖書	しんやく	新約聖書
そう	創世記(そうせいき)	またい	マタイによる福音書(またいによるふくいんしよ)
しゅつ	出エジプト記(しゅつえじぷとぎ)	まこ	マルコによる福音書(まるとによるふくいんしよ)
れび	レビ記(れびき)	るか	ルカによる福音書(るかによるふくいんしよ)
みん	民数記(みんすうき)	よはねでん	ヨハネによる福音書(よはねによるふくいんしよ)
しんめいき	申命記(しんめいき)	しと	使徒言行録(しとげんこうろく)
よしゅあ	ヨシュア記(よしゅあき)	ろま	ローマの信徒への手紙(ろーまのしんとへのてがみ)
しし	士師記(ししき)	こりと	コリントの信徒への手紙(こりとのしんとへのてがみ)一、二
るつ	ルツ記(るつき)	がらてや	ガラテヤの信徒への手紙(がらてやのしんとへのてがみ)
さむ	サムエル記(さむえるき)上、下	えふえそ	エフェソの信徒への手紙(えふえそのしんとへのてがみ)
れつおう	列王記(れつおうき)上、下	ふいり	フィリピの信徒への手紙(ふいりぴのしんとへのてがみ)
れきだい	歴代誌(れきだいし)上、下	ころ	コロサイの信徒への手紙(ころさいのしんとへのてがみ)
えず	エズラ記(えずらき)	てさろにけ	テサロニケの信徒への手紙(てさろにけのしんとへのてがみ)一、二
ねへ	ネヘミヤ記(ねへみやき)	ても	テモテへの手紙(てもてへのてがみ)一、二
えすてるしよ	エステル記(えすてるき)	てと	テトスへの手紙(てとすへのてがみ)
よぶ	ヨブ記(よぶき)	ふいれもん	フィレモンへの手紙(ふいれもんへのてがみ)
し	詩編(しへん)	へぶるしよ	ヘブライ人への手紙(へぶらいじんへのてがみ)
しんげん	箴言(しんげん)		
コヘレ	コヘレの言葉(こへれのことば)		
がが	雅歌(がが)		
いざや	イザヤ書(いざやしよ)	やこぶ	ヤコブの手紙(やこぶのてがみ)
えれ	エレミヤ書(えれみやしよ)	べとろ	ペトロの手紙(べとろのてがみ)一、二
あい	哀歌(あいが)	よはね	ヨハネの手紙(よはねのてがみ)一、二、三
えぜ	エゼキエル書(えぜきえるしよ)	ゆだ	ユダの手紙(ゆだのてがみ)
だにる	ダニエル書(だにえるしよ)	よはねのもくし	ヨハネの黙示録(よはねのもくしろうく)
ほせあ	ホセア書(ほせあしよ)	にじゅうしち	27 卷
よえ	ヨエル書(よえるしよ)	きゅうしんりょうやく	旧新両約合わせれば聖書の数は66
あも	アモス書(あもすしよ)	あわせれば、せい	
おば	オバデヤ書(おばでやしよ)	しよのかずはろく	
よな	ヨナ書(よなしよ)	じゅうろく	
み	ミカ書(みかしよ)		
なほむ	ナホム書(なほむしよ)		
はばく	ハバク書(はばくしよ)		
ぜふあ	ゼファニヤ書(ぜふあにあしよ)		
はがい	ハガイ書(はがいしよ)		
ぜかりや	ゼカリヤ書(ぜかりやしよ)		
まらき	マラキ書(まらきしよ)		
さんじゅうく	39 卷		

4月12日 ヨハネによる福音書21章1節~19節(とくに15節~17節)【解説と黙想】

復活されたキリスト

キリストの復活は、贖罪の御業の核心的な部分である。キリストは私たちの罪を贖い、きよめるために十字架で死なれたのみならず、罪と死とサタンに打ち勝ってよみがえられた。復活の主イエスのみが救い主となられたので、信じる者を永遠の生命へと導かれる。

キリストの復活を記念して祝うイースターの礼拝では、救済論におけるキリストの復活の意義について語るのが相応しいと思われるが、これまで繰り返しなされていたであろうから、今年は、それを基として復活の主イエスの罪人を赦す大きな愛について大胆に語りたい。

主イエスはペトロに、「ヨハネの子シモン。わたしを愛しているか」という質問を3回なされた。そしてペトロも「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがお存じです」という答を3回している。でもなぜ主イエスは、同じ質問を3回もペトロになされたのだろうか。主イエスは、ペトロの気持ちをよく知っておられた。3度も主イエスを「知らない」と言っただけで主イエスを裏切るという大きな失敗をしてしまい、恥ずかしくて仕方がないペトロに対して、主イエスは他に何もお話されず、ただ「わたしを愛しているか」とだけ聞いてくださった。この言葉によって、ペトロはどれだけ助けられたことだろう。このとき、ペトロにとって主イエスは大変恐ろしい存在であったはずである。これからどんなお叱りを受けるのだろうか、どんな嚴重

注意を受けるのだろうか、いてもたってもいられない瞬間であったはずである。「これから叱られるぞ」と思って震えていたかもしれない。ところが意外にも、主イエスは他に何のお話もなさらず、ただ「わたしを愛しているか」とだけ尋ねられた。その瞬間、ペトロはどれだけ安堵したことだろう。「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがお存じです。」ペトロは、こんな自分でも「はい」と答えることができる唯一の質問をされたことが本当に嬉しかったはずである。主イエスは、ペトロがどのように答えるのかを知っておられるのに、また尋ねられた。「ヨハネの子シモン。わたしを愛しているか」。すべてを知っておられるのに、わざわざ聞いてくださる。「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがお存じです」。この答が返って来るのを知っておられるのに、またもう1回聞いてくださる。ペトロのために、わざわざ3回も聞いてくださる。主イエスが「わたしを愛しているか」と聞かれる度に、ペトロは熱い悔い改めの涙とともに、言葉に表現できない感謝の涙も流しながら、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがお存じです」と答えたことだろう。

主イエスから愛と罪の赦しを受けたペトロは、その後、どのような道を歩んだのだろうか。それは、殉教の死である。聖書の記録には残っていないが、ペトロは十字架にかけられたと言われている。ペトロ

は、殉教の死を遂げるとき、彼の頭には、ガリラヤ湖の岸辺で主イエスが語りかけてくださった、あの愛の励ましの言葉を思い出したことだろう。自分の信仰の力を過信していたペトロは、教会の指導者どころか、人の前で主イエスへの信仰を告白することすらできなかった。しかし、主イエスの自分に対する愛の大きさを悟ったとき、あの恐ろしい激痛の十字架も、むしろ感謝しな

がら受け入れることができたのだろう。「死をもって神に栄光を帰す」という殉教の死をも、喜んで受け入れることができたのだろう。

私たちも、ペトロのように「あなたは、わたしに従いなさい」と言われる主イエスに愚直に従う者になれるよう、切に祈る者でありたい。
(小澤寿輔)

《教理問答》 子どもと親のカテキズム 問32、38
ハイデルベルク信仰問答 問1、56

4月12日 ヨハネによる福音書21章1節～19節

【説教展開例】

復活されたキリスト

◇----- 単元のねらい -----◇

罪を赦す神の大きな愛に焦点を当てたい。罪の赦しは聖書の大きなテーマである。今回は、復活の主イエスのお姿から、神の大きくて深い愛について一緒に学びたい。

「わたしを愛しているか」

本日は、イエスさまの復活を記念するイースターです。イースターとは、私たちの救い主イエスさまが十字架で死なれて、3日目に死から甦られたことをお祝いする日ですね。アメリカではイースターの日だけにする特別な挨拶があります。一人が「主は甦られました」と言うと、もう一人が「主はまことに甦られました」と言って固い握手を交わします。それでは、皆さんと私と一緒にイースターの挨拶をしてみましょう。私が「主は甦られました」と言ったら、皆さんは「主はまことに甦られました」と大きな声で答えてくださいね（1回やる。次に、子ども同士でも1回やる）。ハレルヤ！

1. イエスさま7人の弟子に現れる

復活のイエスさまは、エルサレムで二度弟子たちにお姿を現されました。今日はその後のこととお話します。ペトロをはじめ7人の弟子たちが、自分の故郷であるガリラヤに戻って行き、いつか前のようにガリラヤ湖で漁をしていました。ある夜、彼らは小舟に乗り込んで夜通し漁をしました。ところが、その日は一匹も魚が捕れません。夜明け頃、彼らは疲れきって、お腹もすいて岸边に近づいて行きました。そ

の時です。イエスさまが岸边に立っておられました。しかし、弟子たちはそれがイエスさまであるとは分かりませんでした。イエスさまは彼らに大きな声で呼びかけました。「子たちよ。何か食べる物があるか」彼らは力なく答えました。「ありません」イエスさまは言われました。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすれば、とれるはずだ」彼らはその声に従ってすぐに網を降ろしました。するとどうでしょう。取れた魚があまりに多くて、網を引き上げることができませんでした。この声の主は誰だろうと思い、彼らは一斉に岸边にいるその人に目を向けました。朝もやの中に立つその人がイエスさまであると最初に分かったのはヨハネでした。彼はすぐさまペトロに「主だ」と告げました。それを聞いたペトロは「早くイエスさまに近づきたい」という思いのあまり、上着をまとって湖に飛び込み、イエスさまのおられる岸まで泳いで行きました。一方、他の弟子たちは小舟に乗ったまま、魚でいっぱい網を引いて陸地までやって来ました。

こうして弟子たちが陸地に上がると、そこには炭火が起こしてあり、火の上に魚とパンが載せてありました。イエスさまは、弟子たちのために暖かいパンと魚の食事を

用意して、「さあ、来て、朝の食事をしなさい」と彼らを招かれました。一晩中働き続け、寒さと疲れでヘトヘトになっているときに、暖かい焚き火のそばで、温かい朝食を取るのは、何と心地よい一時だったことでしょう。

2. イエスさまペトロに語りかけられる

彼らが食事を済ませたときのことです。イエスさまが、ペトロに対して「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか」と聞かれました。そのときのペトロの気持ちはどうだったでしょう。もうイエスさまに対して頭が上がらない思いでいっぱいだったはずです。

実は、ペトロは、イエスさまが十字架にかかれる前、自分のイエスさまを慕う心を過信して、自分は決してイエスさまから離れない、イエスさまのためなら死ねると言っていました。しかし、実際にイエスさまが兵に捕えられると、彼は恐ろしくなってイエスさまを3度も「知らない」と言って、イエスさまを裏切ってしまったのです。ペトロは自分の弱さと罪深さを嫌というほど感じて、反省していたに違いありません。

復活のイエスさまが他の弟子たちの前で「この人たち以上にわたしを愛しているか」と尋ねられたとき、ペトロは自信をもって「はい。他の弟子たち以上にあなたを愛しています」とは、とても言えませんでした。むしろ、遜って答えました。「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」

このことは、今の私たちにおいても同じです。私たちも、他の人と自分を比べて自分の方がイエスさまをちゃんと信じているとか、他の誰よりも自分が一番イエスさま

を愛しているなどと、自分を上だと思っ
てはいけません。他人と比べる必要はない
のです。それは自分の力を信じることに
なるからです。自分の力に頼るとすぐに
崩れます。信仰も神さまが与えてくだ
さるものなのです。ですから、自分の
信仰についても神さまに依り頼む子ど
もになりましょう。

3. イエスさまの赦しの愛は実に大きい

それにしても、イエスさまという方は本当に素晴らしい方だと思います。「あなたはなぜ私を知らないと言ったのか」というお叱りの言葉は一言もありませんでした。「お前はあれほど自信たっぷりだったのに、なんだ失敗してしまったのか」という皮肉の言葉もありませんでした。こんなとき一言くらい何か皮肉を言いたくなるのが人の心ではないでしょうか。けれども、そのようなことは一言も言わず、ただ「わたしを愛しているか」とだけ聞かれたのです。ペトロは、たとえ顔を上げられないような立場であっても、その質問だけには自信を持って「はい」と答えられたのです。そして「はい」と答えられる質問を3回もイエスさまは聞いてくださったのです。これがまさに、イエスさまが人の罪を赦して下さるやり方なのです。

イエスさまは今日も、これと同じ愛の言葉で私たちを赦してください。イエスさまは、ご自分の罪のためではなく、私たちの罪のために十字架で死んでくださいました。そのことによって、私たちに対する大きな愛を明らかにしてくださったのです。そして、ただ「わたしを愛しているか」とだけ聞いてくださるのです。私たちがイエスさまを救い主と信じられないとき、罪を犯してしまいイエスさまに顔見せできな

いときにでさえも、イエスさまの方から先に私たちを見つけてくださり、イエスさまの方から私たちに近づいて来てくださり、「わたしを愛しているか」とだけ聞いてくださるのです。

皆さんは、十字架で私たちの罪のために、身代わりとなって死んでくださったイエスさまを愛しているのでしょうか？ この質問に「はい」と答えられる人は、もう赦されているのです。その人の罪は一つ残らずきれいに赦され、もうイエスさまの記憶にも残っていません。過去にどんなに大きな罪を犯したとしても、何の関係ありません。僕たち私たちのイエスさまに対する愛の告白が本物であるならば、私たちの罪は何の記録にも残っていないのです。イエスさま

の十字架の贖いの力赦しの力とは、そういうものなのです。世界の、誰も、どんな権威も、自分自身でさえも、既にイエスさまから赦された私たちを、もう一度訴えたり、非難したりすることはできないのです。「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と告白することが出来る人は、既にイエスさまから完全に赦されているのです。まことにイエスさまの無限の愛は、私たちのどのような罪も、すべて完全に赦してくださいるのですね。

ぼくたち私たちも、ペトロのように、イエスさまとの愛の交わりによって心を満たしていただきながら、イエスさまにお従いし、喜ばれる人生を歩みたいと願います。

(小澤寿輔)

《今週の暗唱聖句》

「あなたは、わたしに従いなさい」(ヨハネによる福音書21章22節)

4月12日 イースター, ヨハネによる福音書 21章1節～19節【分級展開例A】

復活されたキリスト

〈もんだい〉

しつもん1

今日のお話で出てきたのは、次のうちどれ(だれ)でしょうか？

- ①シモン・ペトロ
- ②ディディモと呼ばれるトマス
- ③アンデレ
- ④イスカリオテのユダ
- ⑤羊
- ⑥山羊
- ⑦イエスさま
- ⑧洗礼者ヨハネ

しつもん2

ペトロたち七人にイエス様が声をかけたとき、何が起こりましたか？

①魚がとれた

②パンが増えた

③湖の上を歩いた

しつもん3

今日のお話で、次の言葉はだれが言った言葉でしょうか？

- ①「さあ、来て、朝の食事をしなさい」
- ②「子たちよ、何か食べるものがあるか」
- ③「主よ、あなたは何もかもご存知です。」
- ④「わたしの羊の世話をしなさい」
- ⑤「わたしは漁に行く」

それでは、「しつもん3」の①から⑤までを言った順に並べてみましょう。

4月12日 ヨハネによる福音書21章15節～17節

【分級展開例B】

復活されたキリスト

十字架で死んでお墓に入れられたイエスさまは、三日目に復活して弟子たちのところへ戻って来られました。それまでイエスさまのことを救い主だと心から信じる事が出来なかった弟子たちは、復活したイエスさまと会って本当に信じる事が出来ました。

特にペトロは心に深い後悔があったはずです。ペトロはイエスさまが十字架にかかる前、イエスさまを裏切ってしまったからです。本当は誰よりもイエスさまについて行きたかった弟子なのに、恐れて「知らない」と3度も言ってしまいました。イエスさまにもう一度会えたのは嬉しいはずですが、とても恥ずかしくてイエスさまの顔を見ることが出来ないとも思ったに違いありません。

けれども、イエスさまはそんなペトロの心もすべてご存知でした。ペトロの裏切りを予告していましたから。復活したイエスさまは、だから、ペトロに向かって3度、話しかけます。「私を愛しているか」。ペト

ロは以前のように元気に「はい」と答えることはできません。ただ、その気持ちはイエスさまがもうわかっているはずです。イエスさまはペトロを赦して、また弟子としてこれからも愛してくださることを、こうして伝えてくださいました。

イエスさまの十字架は、神さまに対して犯した私たちの罪が赦されたことを教えてくれます。そして、イエスさまが復活なされたことは、私たちがもう一度イエスさまと一緒に立ち上がることを意味します。イエスさまと一緒に毎日を生きて、道を歩んでいる人は、何度つまづいて転んでも、神さまがイエスさまと一緒に立ち上がらせてくれます。そして、たとえ死んでしまったとしても、終わりの日にはイエスさまと一緒に復活します。

これが「福音」です。神さまが私たちに知らせてくれた「良い知らせ」です。何よりこれを信じる事が大切です。信じてどこまでも歩いていく時に、イエスさまがいつも一緒にいることが本当にわかります。

4月12日 ヨハネによる福音書21章15節～17節

【分級展開例C】

復活されたキリスト

1. イースターはイエス・キリストの復活を記念する日です。お祭りが大事なのではなく、それを心から驚き、喜ぶことが大切です。それは私たちの新しい命の誕生を祝うことでもあります。

2. ガリラヤ湖でのペトロとの対話は感動的な場面です。復活の主イエスに会って顔を上げることのできないペトロの気持ちを想像してみましょう。友だちを裏切ったり、無視したり、傷つけたことがあるでしょうか。その当人と顔を合わせるようになった時、どんな思いがするのでしょうか。

3. ペトロを前にした主イエスの心の内も考えてみましょう。主イエスはペトロを恨んでいたでしょうか。ダメなやつだと蔑んだでしょうか。私たちならどうだったでしょうか。自分を見殺しにした相手を目の前にしたらなどんな風に思うのでしょうか。

「あなたは私を愛するか」とは、主イエスのどんな思いの表れでしょうか。あなたなら、何と答えますか。

4. 主の3度の問いかけにはどんな意味がありますか。赦されたペトロは、どのような思いで「主イエスの羊を飼う」ことができるでしょうか。

5. 今日の御言葉は大切な真理を教えてくれます。人は罪の失敗から立ち上がらせていただいた時に、本当の弟子にさせていただけということです。「自分は本当の弟子である」とのプライドは、一旦壊されなければなりません。私たちの信仰はどうでしょうか。私たちも主イエスを前にして「あなたをご存知です」と心を主に明け渡して、黙って主の言葉に従うことができるでしょうか。

4月19日 ルカによる福音書19章1～10節

【解説と黙想】

一番大切なこと：神の子とされて

【教理の解説】

『子どもと親のカテキズム』の最初の問答は、「私たちににとって一番大切なことは何ですか」と問うて、「神さまの子どもとして、神さまと共に歩むことです」と答えます。「神さまの子どもとして」という言葉は、子ども向けのカテキズムらしい表現であり、このあと全体にわたって繰り返し出てきます。「歩む」という言葉と共に大切なキーワードです。そして、この「子ども」という言葉には、年齢が低い子どもという意味だけではなく、「父なる神さまの子ども」という意味で、年齢に関係なくすべての信仰者が子どもであるという意味があります。ウェストミンスター小教理問答が問34で、救いの祝福として義認と聖化のあいだに挙げている「子とされること」の恵みです。『子どもと親のカテキズム』はこの恵みを一番大切なこととして第一の問答で取り上げるのです。

【テキストの解説】

イエスさまの救いの恵みが分かりやすく教えられているザアカイの物語が選ばれています。徴税人の頭で、お金をだまして取っていたザアカイが、イエスさまを見ようといちじく桑の木に登りましたが、イエスさまの方がザアカイを見つけて、「急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」(5節)と声をかけてください

ました。救いはイエスさまからの働きかけによるという恵みが教えられています。そして、すぐに木から降りて来てイエスさまを迎えたザアカイの姿には、救われた者の喜びがあらわれています。イエスさまは最後に、「この人もアブラハムの子なのだから」と言われました。神さまの恵みの契約に連なるアブラハムの子孫であり、救われて神さまの子どもとなるということです。ザアカイは神の子とされる恵みにあずかったのです。

【黙想】

子どもたちもよく知っているザアカイの話です。背の低いザアカイが木に登った姿には親しみのようなものも感じますが、ここには大人の世界があふれています。徴税人という仕事と不正な働き、悪口をつぶやく周りの人々。しかし、そうした中にあるからこそ、イエスさまを見ようと思ったザアカイ、そしてイエスさまに見出されたザアカイの姿が子どものように輝いて見えます。ザアカイは、一番大切なことを手にすることができたのです。

【子どもへのメッセージ】

神さまの子どもとされることのすばらしさを知ってほしいと思います。それが一番大切なことです。そして、それは、神さまにとっても一番大切に、うれしいことなのです。(石原知弘)

【参照聖句】 ガラテヤの信徒への手紙3章26節、4章5～7節、エフェソの信徒への手紙1章4、5節、17節、5章8節、ヨハネの手紙一3章1～3節

【教理問答】 子どもと親のカテキズム 問3、4、13、16、17、27、36、37、39、42、43、44、52、56、86、87、89、92、93、95、96、ウェストミンスター小教理問答 問1、32、34、36、100、ハイデルベルク信仰問答 問1、26、27、28、33

4月19日 ルカによる福音書19章1～10節

【説教展開例】

一番大切なこと：神の子とされて

◇..... 単元のねらい◇

「神さまと共に歩むこと」を一番大切なこととして教えるカテキズムの第一問は、そこに「神さまの子どもとして」という言葉を加えています。ウェストミンスター小教理問答では義認と聖化と並ぶ救いの恵みの一つである神の子とされることを、一番大切なこととしてカテキズムは強調しています。子どもたちが、他でもない神さまの子どもであることとその恵みのすばらしさを伝え、だからこそ喜んで神さまと共に歩んで行けるということを教えたいと思います。そして、それは、教える側の大人もまた神さまの子どもとされている喜びの中にいることによって、いっそうよく届けられるでしょう。

「神さまの子どもとされたザアカイ」

みんなは独りでいる時間があるでしょうか。独りでいるのはさびしいものです。誰か一緒にいてくれたらなと思います。でも、誰でもいいというわけではないでしょう。怒ったり、悪口を言うてくる人と一緒にいるのは、独りでいるよりもつらいでしょう。それなら独りでいた方がいいと思います。大事なのは、どういう人が一緒にいてくれるかです。

カテキズムの第一問で、私たちにとって一番大切なことは、神さまと共に歩むことだと学びました。でも、少し考えてみてください。神さまと共にいることは、本当にうれしいことでしょうか。例えば、神さまが怖い方だったらどうでしょうか。私たちには罪という悪い心と行いがあり、神さまは罪をお嫌いになります。そうだとしたら、神さまは罪人である私たちの横で、怒っておられるのではないのでしょうか。そのような神さまと一緒にいるのは、つらいことではないのでしょうか。

でも、神さまは怖い方ではありません。怒っておられる方ではありません。なぜなら、神さまは、私たちをご自分の子どもとしてくださり、私たちを愛して、守ってくださるからです。ですから、一番大切なことは、私たちが「神さまの子どもとして」、神さまと共に歩んでいくことなのです。

聖書には、神さまがそのように罪人を愛してくださって、ご自分の子どもとしてくださったお話がたくさん出てきます。今日のザアカイの話もその一つです。

エリコの町に、ザアカイという人がいました。徴税人というみんなからお金を集める仕事をしていました。ところが、決められた金額よりもたくさんお金をだまし取ったりすることがあったようで、町の人たちからはとても嫌われていたようです。だから、いつも独りぼっちだったようです。

そのエリコの町へ、イエスさまがやって来られました。みんなイエスさまを見ようと集まってきましたが、ザアカイもイエスさまを見たいと思いました。ところが、背の低かったザアカイはみんなの後ろでよく見えなかったため、先回りして木に登り、そこからイエスさまを見ようとしました。

やがて、イエスさまがそこを通りかかりました。ザアカイのところからどれぐらいイエスさまが見えたか分かりませんが、なんとイエスさまの方からはザアカイのことがよく見えたようです。イエスさまは木の下に来ると、ザアカイに言いました。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」(5節)。ザアカイはびっくりしたかもしれませんが、急いで降りて来て、イエスさまを自分の家

に迎えました。

このお話は、イエスさまの恵みと優しさにあふれています。イエスさまは、ザアカイがどういう人か、知っていたと思います。ずるいことをしてお金をたくさん取っていたことも知っていたと思います。でも、そのことを話してザアカイを怒るのではなく、ザアカイの家に泊まりたい、ザアカイと一緒にいたいと言ってくださったのです。ザアカイは、うれしかったと思います。

ところが、そんなイエスさまとザアカイを見て、周りの人は言いました。「あの人は罪深い男のところに行って宿をとった」。ザアカイのことを嫌っていた人たちが、イエスさまに対しても悪口を言ったのです。

しかし、この後、ザアカイは8節で、「わたしは財産の半分を貧しい人に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します」と言いました。ザアカイは、イエスさまの優しさにふれて、自分が悪いことをしてきたことを心から悔い改めたのです。

イエスさまは9節で、「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから」と言われました。アブラハムの子とは、神さまが救いの契約を結ばれたアブラハムの子孫ということであり、神さまご自身の子どもであるということです。ザアカイは、イエスさまと出会って、神さまの子どもとされたのです。ザアカイにとって、神さまと一緒にいてくださることは、恐いことではなく、とてもうれしいことになったのです。

みんなにも、イエスさまは語りかけてくださっています。「おいで、あなたと一緒にいたい」と。だから、急いでイエスさまのところに行って、イエスさまを信じてほしいと思います。そして、神さまの子どもとされて、毎日喜んで歩いてほしいと思います。私たちににとって一番大切なことは、神さまにとっても一番大切なことで

す。神さまご自身が、みんなのことを子どもにしたい、みんなのお父さんになりたいと思っておられるのです。それほど神さまは、みんな一人ひとりのことを大切にしてくださっているのです。

そして、神さまの子どもは、大人になっても、神さまの子どもです。小さいから子どもなのではなくて、神さまがお父さんだから、神さまの子どもです。だから、大人になっても、おじいちゃんやおばあちゃんになっても、神さまの子どもです。いつまでも、神さまの子どもとして歩いてほしいと思います。今日の箇所に出てきたのは、みんな大人でした。そして、大人の世界には、徴税人の不正であったり、誰かの悪口であったり、そういう悪いことがたくさんあります。でも、だからこそ、そういう大人の世界の中でも、私たちはいつまでも神さまの子どもでいたいと思います。ザアカイは、木に登ったりして、子どもみたいなところがありましたが、木登りができなくても大丈夫です。イエスさまが大好きで、イエスさまが来てくださるのを喜ぶのが神さまの子どもなのです。

『子どもと親のカテキズム』には、このあと何回も「神さまの子ども」という言葉が出てきます。見つけながら読んでみてください。その神さまの子どもというのは、ザアカイのことであり、みんな一人ひとりのことなのです。

そして、これから大人になっても、このカテキズムを読み続けてほしいと思います。大人になっても、そこに出てくる神さまの子どもとは自分のことです。そして、いつか、聖書のことを教えてもらう神さまの子どもから、聖書のことを教えてあげる神さまの子どもになってほしいと思います。教会学校の生徒から教会学校の先生になってくれたらうれしいと思います。神さまの子どもとして、神さまと共に歩む道は、これからもずっと続いていくのです。

(石原知弘)

《今週の暗唱聖句》

あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。

(ガラテヤの信徒への手紙3章26節)

4月19日 ルカによる福音書19章1～10節

【分級展開例A】

かみさまの子どもとされる

〈はじめに〉

「子どもと親のカテキズム」の間1の答の前半『神さまの子どもとして』を、分かり易くするために用いるルカ福音書の“徴税人ザアカイ”の話である。したがって、「エリコ」の町の人々から「罪深い男」として見下されていた「徴税人の頭」ザアカイを、まず主イエスが「見」いだし、その男の「家に泊まり」、それに対してザアカイは素直に「喜んでイエスを迎えた」。そして、またザアカイの悔い改めゆえに、「救い」そのものである主がザアカイへの「救い」を宣言され、ザアカイを「アブラハムの子」と呼んで真の神の子と認められたのである。【A（幼稚科）】の教師は、ザアカイ物語と「神さまの子どもとされる」こととの整合性をつかんでおかなければならない。

〈もんだい〉

しつもん1

イエスさまを見ようとしたザアカイは、どうしましたか？

- ① 人々を押しつけて前に行った
- ② いちじく桑の木に登った
- ③ ドローンを飛ばした

しつもん2

イチジク桑の木の上にいるザアカイを見上げたイエスさまは、何と言いましたか？

(正解はふたつ)

- ① ずっとそこにいなさい
- ② 急いで降りて来なさい
- ③ エリコにホテルはありますか
- ④ あなたの家に泊まりたい

4月19日 ルカによる福音書19章1～10節

【分級展開例B】

一番大切なこと：神の子とされて

一番大切なことは何か、この問いは、二番目に大切なことを考えることを許さないほどに圧倒的な問いです。これがなければ、二番も三番はもとよりすべてが空しくなり、意味がなくなってしまう、そのような絶対的な問いです。もとより、ここで問うのは、私たち人間の側のことです。しかし、実は、それは神にとっても一番だということでもあります。神にとって一番大切なこと、それが私たちを神の子とすること、そのようにしてご自身とともに歩む者とすること、歩むことなのです。そのために神は遂に、御子を人として与え、私どもと共に歩むための救いの御業を成し遂げ、そればかりか永遠に歩む祝福を与えて下さったのです。なんという恵み、何と言う光栄でしょうか。私たちの幸いもまたそこにあります。神と私たちにとっての第一のことが一つになる、そのすばらしい愛の交わり、救いの道、神の恵みの筋道を学び体得することがカテキズム教育です。

1. ザアカイさんってどんな人ですか？
徴税人の頭。不正な仕事で大金持ち。孤独な人。
2. イエスさまは、何を一番にしておられたのでしょうか？
イエスさまは、ザアカイの友達になることを第一にしています。
3. どうしてイエスさまはザアカイのことを知っていたのですか？
イエスさまは神さまですから、生まれる前からザアカイのことを知っていました。
4. どうしてイエスさまはザアカイの家に泊まりたかったのですか？
ザアカイが本当は神さまの子どもであることを気づかせるため。ザアカイの友達になりたかったから。
5. どうしてザアカイは、急いで降りて来て、イエスさまを家に招き入れたのですか？
イエスさまが自分に関心を持っていることにびっくりして感動したから。
6. どうしてザアカイの家に救いが訪れたのですか？
イエスさまを自分の家に喜んで迎え入れたから。このイエスを主、救い主として信じたから。
7. あなたは神さまの子どもですか？
イエスさまを信じれば、イエスさまの十字架のおかげで、罪が赦されて、神さまの子どもです。
8. あなたは、神さまの子どもになりたいですか？
はい。神さまが一番それを願っておられるなら、わたしもそれを一番にしたいです。

4月19日 ルカによる福音書19章1～10節

【分級展開例C】

一番大切なこと：神の子とされて

1. ザアカイさんってどんな人ですか？

徴税人の頭。不正な仕事で大金持ち。いじわるをする人（弱い者いじめ、必要以上のお金をとりあげる）であり、いじわるされる人（人垣をつくってイエスさまを見えなくさせられる）。神を信じていない人であり、むしろ信じている人を軽蔑する人。宗教生活を誇る偽善的な生き方より、世の中は「お金が一番大切！」であると割り切って生きていた人。その意味では、一本筋を通すタイプの人。

2. お金が一番のザアカイさんとまわりの人たちは仲良しでしたか？

仲良しなのは、徴税人仲間だけ。お金が一番の人は、人と仲良くできなくなる。神を一番にしたザアカイは、神の子どもたちの家族に加えられる。

3. イエスさまは、何を一番にしておられたのでしょうか？

イエスさまは、ザアカイの友達になることを第一にしています。いっしょに生きて行く友達、いっしょに歩いて行く仲間です。その為に、人に悪口を言われても平気です。

4. どうしてイエスさまはザアカイの家に泊まりたかったのですか？

ザアカイが本当は神さまの子どもであることを気づかせるため。神さまから離れて、孤独なザアカイがかわいそうに思ったから。ザアカイの友達になりたかったから。

5. どうしてザアカイは、急いで降りて来て、イエスさまを家に招き入れたのですか？

罪人だと言われる人の家に泊まる人は、宗教の掟を破ると思われていたのに、それほどまでして、自分に関心を持ってくださり、愛してくださることに感動したから。

6. どうしてザアカイの家に救いが訪れたのですか？

イエスさまを自分の家に喜んで迎え入れたから。このイエスを主、救い主として信じたから。
財産を処分しようとしたからではなく、それは、罪を赦された喜びの結果。

7. あなたは神さまの子どもですか？

イエスさまを信じれば、イエスさまの十字架のおかげで、罪が赦されて、神さまの子どもです。

8. あなたは、神さまの子どもになりたいですか？

はい。神さまが一番それを願っておられるなら、わたしもそれを一番にしたいです。

4月26日 ヨハネによる福音書4章7節～26節

【解説と黙想】

信じて歩む道：神を知る喜びに生きる

テキストの解説

「サマリア」 パレスチナ中部に位置し、北部のガリラヤと南部のユダを分断する。サマリア人は、バビロン捕囚時に捕囚されずに取り残された民が周辺民族と混血した形成された民と言われる。モーセ五書のみを受け入れる「サマリア教団」を形成しており、ユダヤの人々とは対立関係にあった（9節、ルカ10：30～36など参照）。

「サマリアの女」 通常、人々が井戸で水を汲むのは、早朝や夕刻（創24：20）で、「正午ごろ（6節）」に水を汲みに来たこの女性は、周囲との距離をとりたいたと考えていた。もしくは取らざるを得なかったと考えられる。

「五人の夫」 夫と死別した際など、別の男性と結婚するのは禁じられておらず、むしろ親族が寡婦を娶る制度もあった。その上で、五人もの男性と別れざるを得なかったことが女性が周囲と距離を置かなければならない理由であったかもしれない。

「ヤコブ」 旧約聖書の族長の一人、イスラエルの祖。創世記にはヤコブが井戸を掘ったエピソードはないが、現在でもこの地域には「ヤコブの井戸」と呼ばれる古い井戸が存在し、人々の生活を支えている。サマリアとユダ共通の権威であり、サマリア人はこの井戸の存在を自分たちと族長と

のより強い結びつきを示すものと受け止めている。

「この山」 ゲルジム山のこと。モーセによって祝福が置かれた（申命記11：29）。サマリア人は、エルサレム神殿の権威を否定し、ゲリジム山での礼拝を主張した。

女性の問いは、サマリア教団とユダヤ教の間の正当性を問うものであると同時に、キリスト教も含めて、信仰の正当性の基盤を問いかけている。イエスは、礼拝の場所ではなく、霊とまことにおいて献げる礼拝こそが信仰者を支える唯一の基盤であることを示す。

カテキズムの解説

問2は、問3とともに、第一部のまとめとなっている。問2は今週と次週に分けて、今週は前半を扱う。前半のうち、「栄光をあらわし」「喜び」はウェストミンスター小教理問答問1における「人の主な目的」の内容である。

「知る」こととその裏返しとしての「教える」ことは、カテキズムだけでなく、聖書自体において信仰を支える基盤とされる（下記参照）。単なる知識にとどまらない、まことの意味での神知識が、信仰者を生かし「神と人を愛する」人本来の歩みに押し出すのである。（長田詠喜）

《参照聖句》 カテキズム参照聖書箇所その他、申命記6章6～9節、詩編1編、ローマ10章14節
 《教理問答》 子どもと親のカテキズム 問6、ウェストミンスター小教理問答 問1、ハイデルベルク信仰問答 問2

4月26日 ヨハネによる福音書4章7節～26節

【説教展開例】

信じて歩む道：神を知る喜びに生きる

◇----- 単元のねらい -----◇

人生の中心的基盤として、信仰生活の柱として、礼拝の核として、「神さまと出会い、神さまを知る」ことの大切さ、神さまを知ることが、私たちの生活を動かすことを知る。

「礼拝でお会いする方」

①サマリアの女性

イエスさまはエルサレムからガリラヤに戻る途中で、サマリアの地に立ち寄りしました。サマリアの人たちはイエスさまたちユダヤの人とは仲が悪く、道であっても挨拶もしない、言葉も交わさない人たちでした。ユダヤの人たちはエルサレムで神さまを礼拝していましたが、サマリアの人たちは自分たちの住んでいる地域にあるゲリジム山というところで礼拝をしておりました。お互い自分たちの方が正しいと考えていたのです。

サマリアを避けて通るのは大変でしたが、できなかったわけではありません。イエスさまはあえてサマリアを通る道を選んだようです。

ちょうど、シカルという町に差し掛かった時にお昼の時間になりました。弟子たちはみなでお昼を探しに行きます。イエスさまは井戸の近くで休んでおりました。そこに一人の女性が水を汲みにやってまいります。今のように、キッチンで蛇口をひねれば水が出てくる時代ではありません。みんな毎日井戸に行って水を汲まなければならない。普通は朝や夕方涼しい時間に水を汲みに来るのですが、この女性はわざわざお昼の暑い時間に水を汲みに来ていま

す。あまり周りの人と顔を合わせたくなかったようです。イエスさまがこの女性に「五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない」とおっしゃっています。どんな事情があったのかわかりませんが、陰口を叩かれたり、後ろ指を指されたりすることがあったのでしょう。ユダヤの人々から差別されるサマリアの人々の中で、さらにまた差別される立場だったわけです。

②イエスさまの目的

そんなわけですから、イエスさまがサマリアの女性に声をかけた時に、彼女はとても驚くのです。しかも話をしているといつの間にか、イエスさまが女性に水を求める話が、女性がイエスさまから水をもらう話になってきます。自分が与える立場のはずなのに、この人は自分に何をどのように与えるというのか、女性の中に知りたい気持ちが起こってきます。イエスさまの「永遠の命に至る水」を与える宣言を聞いて、女性は自分の目の前にいる人物が特別な人物であることを知ります。さらに初めて会ったはずのイエスさまが自分の身の上を知っておられることが判ると、彼女は自分の目の前にいる人物が何か特別な人であると知るのでした。

そこで、彼女は質問をします。それは、どこで礼拝すべきかという質問でした。何かまた突然全く関係ない話になっているようです。けれどもこれは彼女にとってとても大切なことでした。礼拝の場所は彼女が属するサマリアの人々とイエスさまたちユダヤの人々との間の最も重要な対立点でした。サマリアの人たちはゲリジム山で礼拝を献げるのが正しいと教えている。一方ユダヤの人々はエルサレム神殿で礼拝することだけが正しい礼拝だと考えている。どんな神さまをどんな風に信じるのが正しいのか。それは、自分の生き方を決める時に一番大事なことなのです。

③神さまを知る

サマリアの女性の質問に対して、イエスさまの答えは、とても大事なことを教えてくださるものです。大切なのはどこでどんなやり方で礼拝をするかということではないのです。一番大切なのは私たちが神さまを礼拝する時に「霊と真理をもって」礼拝しているかということです。ちょっと難しい言いかたかもしれませんが。分かりやすく言うとこれは、私たちが礼拝の時に誰と会っているかをちゃんと知っているかが大切だということです。

私たちも、今礼拝をしています。礼拝で私たちは誰と会うのでしょうか。お友達と会っています。先生や教会の人達とも会います。それもとても楽しいことです。でも、一番楽しいこと、一番大切なことは、

礼拝で神さまとお会いするということです。神さまは目に見えないお方ですから、目で見ても耳で聞いて手で触っても神さまとお会いするわけではありません。でも、聖書の中で神さまは私たちにいろいろなことを教えてくださいます。聖書のお話を聞いてみると、神さまが私たちにいろいろなことを教えてくださいます。礼拝では何が大切か、神さまを信じるには何が大切か、神さまとはどんなお方で、私たちはどんなものなのか、そんなことを何でも全部教えてください。この神さまを礼拝の中で出会うのであれば、それはどんな場所でも、誰と一緒にあっても、本当の礼拝なのです。

サマリアの女性もイエスさまと出会って、サマリアの人であろうとユダヤの人であろうと、本当に心から神さまを知って、心から神さまを礼拝することができることを知りました。相手を責めたり、仲間はズレにせずに、仲が悪かった人達とも一緒に礼拝ができることを知りました。それは、この女性自身、サマリアの町の仲間たちともう一度一緒に仲良く過ごすことができることを教えるものでした。そして実際に、このあとこの女性はシカル町の他の人達と一緒にイエスさまの教えを受けることになるのです。

神さまのことを知るというのはこんな風に私たちに一番大事なことを教えてくださいますし、私たちの毎日を変えてくださるのです。礼拝で、聖書で神さまと出会い、神さまを知っていきましょう。(長田詠喜)

《今週の暗唱聖句》

まことの礼拝をする者たちが、霊と真実をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。

(ヨハネによる福音書4章23節)

4月26日 ヨハネによる福音書4章7節～26節

【分級展開例A】

神さまを知り、神さまの栄光をたたえる

〈はじめに〉

“イエスとサマリアの女”の対話によって、「神を知る」に至る経緯がわかる。イエスという方を「救い主キリスト」と知るまでのサマリアの女の心の動きを、伝える。「神さまの栄光をあらわす」ことは、20節から24節の間に十ある「(神さまを)礼拝する」という言葉で言い換えて話すこともできる。

〈もんだい〉

サマリアの女は、イエスさまと話をしているうちに、イエスさまがキリスト(メシア=救い主)だと、だんだんと気付きました。

サマリアの女は、次のように語りました。

- ①「ユダヤ人のあなた」
- ②「あなたはヤコブよりも偉いのですか」

③「主よ、その水をください」

④「メシアが来ることは知っています」

⑤「……」

イエスさまは、次のように語られました。

⑥「水を飲ませてください」

⑦「あなたに生きた水を与えたいだろう」

⑧「与える水を飲む者は決して渇かない」

⑨「わたしを信じなさい」

⑩「それは、このわたしである」

⑥→①→⑦→②→⑧→③→⑨→④→⑩→

⑤の順番に並べて読んでみましょう。

(前もって、ひらがなで書いた短冊①～⑩をつくっておきましょう。)

⑤は、聖書にはありません。サマリアの女が言った言葉は何だったと思いますか？自由にサマリアの女になって答えてみましょう。

4月26日 ヨハネによる福音書4章7節～26節

【分級展開例B】

信じて歩む道：神を知る喜びに生きる

キリスト教の信仰は、「知る」ことが本質的な意味を持っている。「知る」ことは、ただ知識を蓄えることではなく、「聞く」―「受け入れる」―「告げる」という一連の動きを指す。また信仰について知ることは単に知的な作業ではなく、霊に語りかけ、聞く者の感情を動かし、神との関係と人との関係を和解へと導き、全人的な回復を与える。この若いと回復の喜びを知ることが、私たちをまことの礼拝へと促す。

1. イエス様はどこからどこへ行こうとして、どこの町にいましたか？
2. イエス様が出会った女の人は、どんな人でしたか？
3. イエス様は女の人に、何を頼みましたか？
4. 女の人は、イエス様の頼みを聞いてどう思ったのでしょうか？
5. 女の人はイエス様に何を質問しましたか？
6. 「まことの礼拝」とはどんなものですか？
7. あなたは、どんな礼拝をしたいですか？

4月26日 ヨハネによる福音書4章7節～26節

【分級展開例C】

信じて歩む道：神を知る喜びに生きる

1. ユダヤ人たちとサマリア人はどんな関係でしたでしょうか？
2. サマリアの女の方は、最初イエス様にどんな印象を持ったでしょうか？
3. 話をするうちに、イエス様に対する印象はどんな風に変化したでしょうか？
4. 最終的に、サマリアの女の方は、イエス様をどんなお方だと思ったのでしょうか？
5. サマリアの女の方はどうして、礼拝の場所についてイエス様に質問したのでしょうか？
6. イエス様は、本当の礼拝はどんな礼拝であると教えているのでしょうか？
7. 本当の礼拝をささげるために、私たちはどうすれば良いと思いますか？

5月3日 ヨハネによる福音書4章31～42節

【解説と黙想】

「信じて歩む道：神と人に仕えて生きる」

テキストの解説

31～38節

「あなたがたの知らない食べ物」とは、見えない霊的な食べ物のことで、主イエスはそれが「わたしをお遣わしになった方(父なる御神)の御心を行い、その業を成し遂げることである」と語っておられる。父なる神様と主イエスの御心は一つである。主がそうであられたように、私たちも、神の言葉を実践し、御心に従って生きる時に、初めて、真の意味で生きる。「成し遂げる」は、十字架上の言葉である『成し遂げられた』(ヨハネ19:30)と類語であり、主イエスを「お遣わしになった方の御心」とは、究極的には罪を取り除く贖いの小羊として、十字架に御自身を献げることであった。

35節以下は伝道に関する展望。通常、種蒔きから刈り入れまでは、4ヶ月待たなくてはならなかった。35節は、種は蒔かれたが、御言葉が働き、4ヶ月を待たずに、実が実り、刈り入れを待っているのである。種蒔きと刈り入れが続くのは、神様の時代における夢であった(アモス書9:13)。刈り入れとは、終末的裁きではなく、救いへと、入れられるということと解釈できる。36節の「刈り入れる者」とは、魂を導き、救いに入れる、主御自身、または神の働き人達のことであろう。

ここで、「種を蒔く人も刈る人も、共に喜ぶ」ということは、御言葉の種蒔きをする人も、魂の刈り入れをする人も共に、魂が神の下に獲得されることを喜ぶことを言っている。

37、38節は、古典的には、主イエスが伝道を開始され、弟子達はその労苦の実りにあずかっていると理解されている。また、主イエスの十字架によって、種が蒔かれ、その刈り入れを教会が引き受けることが想定されている。

別の見解として、ここで主によって開始されたサマリア伝道が、使徒8章5節でフィリポによるサマリア伝道がなされたことへと繋がるという解釈がある。この場合、御言葉の種は、長い時間と、多くの人達の労苦を経るが、やがて実り、刈り入れに至るという意味が導き出される。

39～42節

「とどまる」はヨハネによる福音書では44回使用され、主イエスが誰であるかという、キリスト論的問いと結びついている。主が二日間、滞在され(とどまれ)、主イエスから御言葉を聞いた結果、主イエスが「世の救い主」であるという告白が導き出される。これは、キリスト論的称号の中でも、最もスケールの大きい告白である。「言葉を聞いて信じた」は、しるしによる表面的信仰と対比される。証という間接的導きから、主イエスから直接、御言葉を聞くということによって信仰が生まれていくのである。

子どもへのメッセージ

私たちの証や教会への誘いが用いられ、聖書から直接主イエスの御言葉を聞くことを通して、信仰の告白へと導かれる。そして、御言葉の種は必ず実る。主イエスの御心なので、御言葉の種を蒔き、魂を導くき、刈り入れる働きに励もう。(袴田清子)

《参照聖句》 詩編126編5、6節、アモス書9章13節、

マタイによる福音書28章18～20節

《教理問答》 子どもと親のカテキズム 問44

5月3日 ヨハネによる福音書4章31節～42節

【説教展開例】

「信じて歩む道：神と人に仕えて生きる」

◇..... 単元のねらい◇

「人生の目的は、神を喜び、神に仕えて歩むこと。あるがままの姿で主に仕えよう」

「主は私たちを用いて、人を救いに導かれる」

イエスさまは、ガリラヤに戻られる途中で、どうしてもサマリアを通らなくてはなりませんでした。そこには、昔昔に、ヤコブが掘った井戸がありました。イエスさまは疲れて、井戸のそばに座っておられました。弟子たちは町に食べ物を買に行っていました。ちょうど太陽が高々とのぼっている正午頃、サマリアの女性が水をくむためにやって来ました。普通は朝、水をくみに来るのに、この女性は他の女性たちに出会いたく無かったので、真っ昼間、暑い中水をくみに来たのです。

イエスさまは、この女性に「水を飲ませて下さい」とお願いしました。イエスさまはくむ物を何も持っておられなかったのです。しかし、この女性は、とても驚きました。と言うのは、ユダヤ人とサマリア人は仲良く無かったからです。その上、イエスさまのようにラビと呼ばれる先生たちは、女の人と話すことをしないかったからです。

イエスさまは、この女の人に、御自身が「生きた水を与える」御方であること、またイエスさまが与える水を飲む人は、「決して渴かない」、それどころか、イエスさまの与える水は「その人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」と真理の御言葉を教えてくださいました。そして、女

の人の罪も指摘されました。実は、6人も夫がいて、しかも6人目とは同棲中だと、イエスさまは言い当てられたのです。イエスさまには何もかもお見通しだったのです。

女の人は、罪を言い当てられて、心を指されますが、イエスさまを預言者だと考え始めます。そして、サマリア人とユダヤ人は礼拝する場所が違うけど、どこで礼拝したら良いのですか？ と尋ねます。神さまを礼拝する場所についての質問をしたのですね。すると、イエスさまは言われました、礼拝する場所が問題なのではなく、「神さまを礼拝する人は、霊と真理によって礼拝しなければならない」と。

女の人はイエスさまに言います。「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来ることは知っています」。すると、「それは、あなたと話をしているこのわたしである」と、目の前におられるイエスさまが、はっきりと言われたのです。女の人は、びっくりしました。

このイエスさまがメシアだと聞いた女の人は、水をくむために持って来ていた水瓶を、井戸の傍らに置いたまま、町にすっ飛んで行ったのです。「さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて言い当てた人がいます。もしかしたら、この方が

メシアかも知れません」。自分がイエスさまと出会い、お話をして、聞いた御言葉、体験したことを、町の人たちにそのまま証し、実際に来て確かめるように誘いました。女性の身の上を知っていた町の人たちは、この女性の言うことは本当だと感じました。自分のことを悪く言う人たちのいるところに、自分から飛び込んで行くことは、絶対にしないことだからです。この女の人、イエスさまが救い主だと分かったのです。だから、町の人たちの所に飛び込んで来て、確かめるように言ったのです。町の人たちはこの女性の言葉を信じました。

ちょうどその頃、食べ物を手に入れた弟子たちは、イエスさまのところに帰ってきました。「先生、食事をどうぞ」。するとイエスさまは、「わたしにはあなたがたの知らない食べ物がある」と言われたのです。この食べ物は、イエスさまの霊的な食べ物のことでした。

イエスさまの食べ物とは、父なる神さまの「御心を行い、その業を成し遂げること」でした。そして、その最も大変で、偉大な業は、私たちの罪のために、イエスさまが御自身を献げて、十字架にお掛かりになったことです。イエスさまは、御自身の十字架の死とそこからの復活を通して、私たちの罪が赦されるようにしてくださいました。そして、イエスさまを信じて救われる人が、一人でも多く起こされるということが、イエスさまの霊的な食べ物なのですね。

イエスさまは弟子たちに言われました。「あなたがたは『刈り入れまで、まだ4ヶ月もある』と言っている。しかし、畑を見なさい。色付いて刈り入れを待っている」。サマリアの女の人、イエスさまの御言葉

を聞いて、直ぐに信じて、救われました。それまで罪の生活の中に生きていた女の方は、イエスさまを信じて、永遠の命を与えられたのです。

種蒔きは大変な仕事です。一人で大きな種の袋を担いで、種を蒔いて行くのです。同じように、御言葉の種を蒔くことは、時として、一人で涙と共になす仕事です。

しかし、イエスさまが御言葉の種を蒔かれると、直ぐに刈り入れが来たように、聖霊なる神さまが働かれると、御言葉は直ぐに実りを与えられることもあります。刈り入れは時期が大切です。ほおっておくと、実が腐ってしまうこともあります。だから、刈り入れる人は、よく見て遅れてはならないのです。「あなたがたは『刈り入れまで、まだ4ヶ月もある』と言っている。しかし、畑を見なさい。色付いて刈り入れを待っている」。ちゃんと鎌を入れるなら、素晴らしい刈り入れが待っています。

しかし、イエスさまは、ずっと後になってから刈り入れの時がくる場合もあることを御存じです。蒔いたことも忘れていた御言葉が、思いもしないところで、育ち、実って、刈り入れる時になっていることもしばしば起こります。「あなたがたが自分の労苦しなかったものを刈り入れるために、わたしはあなたがたを遣わした。他の人が苦勞し、あなたがたはその労苦の実りにあずかる」ことが起こるのです。

町の人たちは、この女の人の、ありのままの証を通して、イエスさまのところに導かれました。イエスさまのことを知れば、もっと話が聞きたい、もっと知りたいと思うものなのです。それで、町の人たちは、自分たちのところにとどまってくださいよ

うに頼みました。イエスさまは、2日間もそこに泊まってくださり、御言葉を語ってくださいました。イエスさまのお話を十分聞くことが大切なのですね。

私たちはどのようにして、イエスさまのお話を聞けるのでしょうか。それは、聖書を通してです。そして、聖書を解き明かしてくださる説教を通してです。

イエスさまから直接御言葉を聞いた人たちは、もう、女の人が話してくれたことによつてではなく、自分でイエスさまから御言葉を聞いて、分かったと言いました。イエスさまが、「本当に世の救い主である」と分かったのです。

イエスさまは、この女の人をお用いになつたように、私たちも用いてくださいます。イエスさまからお話を直接聞くことが出来れば、最も正しく、素晴らしい分りかたで、イエスさまが救い主であると分かるようになります。

皆さんも、イエスさまの食べ物、イエスさまが本当に喜ばれる、人を救いに導く働きのために、自分が知っているイエスさまのことを、そのままお友だちにお話しし、教会に誘ってください。イエスさまのところに誘つて来てください。そして、蒔く人も、刈り入れる人も、共に喜ぶようにされたいですね。 (袴田清子)

《今週の暗唱聖句》

御言葉を宣べ伝えなさい。折りが良くても悪くても励みなさい。

(テモテへの手紙二 4章 2節)

5月3日 ヨハネによる福音書4章31節～42節

【分級展開例A】

「信じて歩む道：神と人に仕えて生きる」

〈展開例〉

イエス様について他の人に話し、伝えることは、クリスチャンに与えられた最も大きな祝福であり、喜びであることを伝えることを目指す。

・伝言ゲーム

通常の伝言ゲームよりも少人数で、年少者が楽しめる伝言ゲームをし、『言葉』をじょうずに伝える」ことを経験する。

①先生が、子どもに短い聖句を教える。

（暗唱聖句、二テモテ4：2など）

②もう一人の大人のところまで行って、覚えた聖句を伝える。

③伝えられた大人は、必ずお礼を言う。覚えていない、間違えて伝えても指摘しない。

CS 教師がいない場合は、教会内の他の大人の方に事前をお願いしておくの良い

④子どもは先生のところに戻って、報告する。先生は伝えてくれたお礼を言う。

5月3日 ヨハネによる福音書4章31節～42節

【分級展開例B】

「信じて歩む道：神と人に仕えて生きる」

1. イエス様はサマリアを通りました。そこにあった井戸は誰が掘りましたか。
2. イエス様と出会った女性は どうしておどろいたのでしょうか。
3. イエス様は水をくむ桶をもっていないのに「生きた水」を与えることができるのでしょうか。
4. サマリアの女の人は自分の罪をあてられてどきとしたでしょうね。そこでイエス様のことをどんな人だと思ったのでしょうか。
5. サマリアの女の人は「メシアが来られることを知っています」と言いました。そして自分が話しているのがその方だとイエス様から教えられてからどうしたのでしょうか。
6. サマリアの女の人と普段は話さない町の人が どうして、イエス様のところまで行ってみようとおもったのでしょうか。
7. イエス様は弟子たちに「あなたがたは『刈り入れまで4か月もある』言っている」ではないかといわれます。そして畑を見なさいといわれます。イエス様は本当に畑の話をしているのでしょうか。
8. イエス様の時代の種まきはどんなだったのでしょうか。「一人が種を蒔き、別の人が刈り入れる」ということわざをイエス様は何のたとえで語られたのでしょうか。
9. サマリアの女の人のありのままの話が町の人をイエス様のところへ導きました。でも町の人にはサマリアの女の人の話は必要がなくなりました。どうしてでしょうか。

5月3日 ヨハネによる福音書4章31節～42節

【分級展開例C】

「信じて歩む道：神と人に仕えて生きる」

1. イエス様はサマリアを通りました。そこにあった井戸は昔、族長のイサクが掘ったと伝えられている井戸です。サマリア人とユダヤ人は当時、仲が悪く交際をしませんでした。それなのにどうしてイエス様はサマリアの女性に話しかけたのでしょうか。
2. イエス様は旅に疲れている様子ですし、水をくむ桶をもっていないのにどんな風に「生きた水」を与えることができるのでしょうか。
3. サマリアの女の人は自分の罪をあてられてどきとしたでしょうね。皆さんも聖書を読んでいて自分の悪い姿をそこで見つけたりしてどきとしたことはありますか。教会学校の話で自分の毎日の生活を反省させられたことはあるでしょうか。
4. サマリアの女の人は「メシアが来られることを知っています」と言いました。そして自分が話しているのがその方だとイエス様から教えられてから、町に向かって走りだしました。イエス様のことを伝えたかったからです。何度も結婚をしていたのである程度の年齢の女性です。走るのはきつかったかもしれません。それでも町に急いだのです。イエス様や教会のことをお友達に話したことはありますか。
5. さて、サマリアの女の人と普段は話さない町の人とはびっくりした。これは何かあったと思ってイエス様の所に一緒にいきました。
6. イエス様は弟子たちに「あなたがたは『刈り入れまで4か月もある』言っている」ではないかといわれます。そして畑を見なさいといわれます。イエス様は本当に畑の話をしているのでしょうか。イエス様の時代の種まきはどんなだったのでしょうか。「一人が種を蒔き、別の人刈り入れる」ということわざをイエス様は何のたとえで語られたのでしょうか。
7. サマリアの女の人のありのままの話が町の人をイエス様のところへ導きました。でも町の人にはサマリアの女の人の話はもう必要がなくなりました。イエス様と直接出会ったからです。皆さんを教会に導いてくれたのは誰でしょうか。両親、お友達、先輩。そのような人が皆さんにとっての今日の話のサマリアの女性ではないでしょうか。そして今度は皆さんが町に走っていく番です！

5月10日 ルカによる福音書24章28～43節

【解説と黙想】

救われた歩み：イエスさまを信じる

子どもと親のカテキズムは、問2において、神さまと共に歩むとは、「まことの神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜び、神さまと人に仕えて歩むこと」と教える。カテキズムは次に、問3において、そのような神と共にある歩みを私たちが歩むために、先ず必要なことを教えている。

問3は「神さまと共に歩むために、罪人である私たちに必要なことは何ですか」と問うが、この問いは、すでに人間が創造された状態から墮落し、罪と悲慘に陥った現実を踏まえている(問19～25参照)。つまり、私たちは罪人であり、神と共に歩めなくなっている現実が示されているのである。神の子どもとして神と共に歩むように造られた私たち人間にとって(問17)、最も悲慘なことは、神との交わりを失い、「神が共にいないこと」である。子どもたちがイエス・キリストにある救いを学ぶ前に、このことを先ず知らせたい。

カテキズムは次に、答えにおいて、そのような罪人である私たちが、神と共に歩むようになるために必要なことを簡単に教えている。それは「イエス・キリストを信じ、救われて、神さまの子どもとされること」である。これは問20～41の「信じて歩む道」の概説である。すなわち、カテキズムは「信じて歩む」場合の「信仰内容」の「救い」について予備的に示しているのである。今回は前半の「イエス・キリストを信じ、救われて」という部分について扱いたい。

聖書には、罪人である私たちはイエス・

キリストの御名を信じることで救われることが示されている。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます」(使徒16:31)。それは、「キリストによる救いの御業」(特に十字架と復活)のみが、私たちを罪と悲慘の状態から救うことができるからである。私たちはただ「イエスさまを信じること」によって、その救いに与ることができるのである。

それでは、「イエスさまを信じる」とはどういうことか。ハイデルベルク信仰問答問21は「(まことの信仰とは) 神が御言葉において、私たちに啓示されたすべてを、わたしが真実であると確信する、その確かな認識のことだけでなく、福音を通して聖霊がわたしのうちに起こしてくださる、心からの信頼のことでもあります」と語る。このように、イエス・キリストを信じるとは、①啓示された御言葉の知識、特にキリストについての知識を確信すること、②キリストに心から信頼することである。

神はイエス・キリストを信じる信仰によって、私たちをキリストに結び合わせてくださる。私たちはそのキリストに結ばれることによって、キリストから救いの恵みを頂くのである(問35)。もちろん、そこには聖霊なる神の働きがあるのだが、今回はシンプルに私たちがイエス・キリストを信じ、信頼することで、救いの恵みを頂けることを語りたい。私たちがイエスさまに信頼し、イエスさまと結ばれるとき、私たちは再び神との交わりを回復する。神さまと共に歩む道が再スタートするのである。

(佐野直史)

《参照聖句》 ヨハネ1章12節、使徒4章12節、16章31節

《教理問答》 ハイデルベルク信仰問答 問21、子どもと親のカテキズム 問35

5月10日 ルカによる福音書24章28～43節

【説教展開例】

救われた歩み：イエスさまを信じる

◇----- 単元のねらい -----◇

子どもたちが、①人は生まれながらに罪人であり、神と共に歩めなくなっていることを知ること、②しかし、イエス・キリストの救いの御業によって、救いが与えられており、その主イエスの御名を信じるなら、その救いに与ることができることを知ること、③さらには、その救いの主を信じ、信頼するように促すこと。イエスさまを信じるだけで救われる幸いを覚えたい。

「イエスさまと手をつなごう！」

先週までは、神さまと共に歩むとは、どういうことなのかを学びました。何だったか覚えているかな？ それは、「まことの神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜び、神さまと人に仕えて歩むこと」（問2）でした。今日はその続きです。今日のカテキズムの問いでは、そのように私たちが神さまと一緒に歩むために、先ず必要なことを教えています。

問3 神さまと共に歩むために、罪人である私たちに必要なことは何ですか
 答 イエス・キリストを信じ、救われて、神さまの子どもとされることです。

「罪人である私たち」と書かれています。罪人とは罪を犯した人のことです。みんなは罪って知っていますか？ 罪とは、「神さまの言葉に背くこと」（問14）です。聖書を通して、神さまは私たちに、神さまを大切にすること、また隣人（家族や友達）を大切にしていることを教えています。それは私たちが幸せに生きるためです。だけど、私たちはその神さまの言葉を全部守ることができているかな？ きっと難しいと

思います。先生もできていません。神さまを大切にできなかったり、友達を傷つけてしまうことがあります。罪とは、①神さまを大切しないこと、②隣人（家族や友達）を大切にしないことなのです。私たちはこの罪というものをみんなが持っています。そう、私たちは罪人なのです。

私たちの内にある罪は、私たちと神さまとの関係を悪くします。罪によって、私たちは神さまの言葉に背き、神さまから離れようとします。また、ちょっと恐い話をするけど、罪人である私たちは神さまの怒りの下にあり、ほろびの死に定められています（問21）。それは、私たちが神さまを大切にしなかったり、神さまが大切にしておられる隣人（家族や友だち）を傷つけるからです。このように、私たちの内にある罪は、私たちと神さまとの間を引き裂くのです。つまり、私たちに罪があると、私たちは神さまと共に歩めなくなってしまうのです！ 私たちは神さまの子どもとして神さまと共に歩むように造られました（問17）。そんな私たち人にとって、最も悲しいことは、神とのつながりがなくなって、神さまと一緒にいないことです。私たちの内にあ

る罪にはそういう恐ろしい力があるので
す。

しかし、憐れみ深い神さまは私たちをそ
のような罪から救うために独り子イエスさ
まを送ってくださいました。イエスさまは
十字架において、私たちのすべての罪を背
負い、私たちの代わりに死んでくださった
のです。イエスさまの十字架の死によって、
私たちの罪の償いがなされました。そのこ
とによって、私たちの罪は赦され、私たち
が再び神さまと共に歩む道が開かれたので
す。

私たちは自分の力で罪と死から自分自身
を救うことはできません。しかし、私たち
はイエスさまの救いのお働きによって、救
いの道が与えられています。聖書に書かれ
るように、私たちはイエスさまのお名前を
信じることによって、イエスさまが獲得さ
れた救いの恵みをいただくことができるの
です。「主イエスを信じなさい。そうすれば、
あなたも家族も救われます」（使徒16：
31）、と書かれている通りです。私たちは
ただイエスさまを信じるだけで罪と死から
の救いが与えられているのです！

ところで、「イエスさまを信じる」とは
どういうことでしょうか？ イエスさまの
何を信じればいいのでしょうか？ イエス
さまを信じるとは、2つの意味があります。
一つは、イエスさまが私たちの罪のために
十字架にかかってくださったという事実を
確かに信じることです。だけど、それだけ
ではありません。イエスさまを信じるとは、
私たちがイエスさまの十字架を知識として
信じるだけではなく、その救い主であるイ
エスさまに心から信頼することでもありま

す。イエスさまの救いの恵みを信じて、「イ
エスさまだけが私を助けてくださる御方だ
ある」とイエスさまに信頼することが、「イ
エスさまを信じる」ということなのです。

みんなは「つながれ!! イエスさま」（『ブ
レイズワールド』78番参照）という賛美の
歌を知っていますか？ そこでは次のよう
に歌われています。

小さな僕たちは何もできないけれど
イエスさまがいつしよなら力がわいてく
るよ
ほらね
つながれ!! イエスさまに
どんなときも離れないで
いつだって忘れない
イエスさまと手をつなごう

この賛美の歌にあるように、小さな私た
ちには何の力もありません。大人の先生た
ちも、同じです。私たち人は自分の力で罪
と死から自分自身を救うことはできませ
ん。だけれども、イエスさまと一緒にいて
くだされば、私たちに力が湧いてきます。
私たちがイエスさまと手をつないで、イエ
スさまと結ばれたら、そのイエスさまから
私たちに力が与えられるのです！ イエス
さまが十字架の死と復活のお働きによって
獲得されたすべての救いの恵みが、イエス
さまから私たちに与えられるのです。

この歌の中で考えるならば、イエスさま
を信じるとは、「イエスさまと手をつなぐ
こと」と言うことができるでしょう。イエ
スさまはいつも弱い私たちを助けようと手
を差し伸べておられます。そのイエスさま
の手を取って、イエスさまに依り頼むこと、

これが「イエスさまを信じる」ということなのです。

私たちがイエスさまを救い主と信じ、信頼して、イエスさまと手をつなぐとき、神さまの救いの恵みとたくさんの祝福が私たちに与えられます。そして何よりも、大きな恵みは、私たちが再び神さまと共に歩むことができるようになることです。私たちがイエスさまと手をつなぐとき、イエスさまと共にある私たちの新しい歩みが始まります。そしてまた、イエスさまの十字架によって、罪赦された私たちは父なる神さま

と再び歩みを共にすることが許されるのです。

私たちは一人ぼっちで罪の問題に悩むことがあるかもしれません。神さまを大切にできない自分、人を大切にできない自分に悩むことがあるかもしれません。しかし、そのような時に、イエスさまは私たちに手を差し伸べておられます。神さまが共におられること、イエスさまが共におられること、これほど心強く、喜ばしいことはありません！ 私たちはイエスさまを信じて、信頼して、イエスさまと手をつなぎたいと思います。 (佐野直史)

《今週の暗唱聖句》

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。

(使徒言行録16章31節)

5月10日 ルカによる福音書24章28～43節

【分級展開例A】

救われた歩み：イエスさまを信じる

〈展開例〉

「イエスさまを信じるわたし」の絵を描こう。

準備するもの

画用紙、鉛筆、色鉛筆、クレヨンなど、お手本となるイエスさまのイラスト

イエスさまと自分が一緒にいるところを絵を描いてみよう。

「母の日」を覚えて、お母さんの顔を一緒に描くのも良いです。

イエスさまの姿は、一般的なイラストなどを見せてそれを参考にすると良い。ただ

し、イエスさまの印象をあまりにも限定してしまったり、明らかに誤ったイメージのものは避けるようにする。

イエスさまの姿を描くことは偶像礼拝の可能性をも含むことを十分に理解し、その上でなお、「共にいる」ことの表現としてふさわしいと判断できる場合に行うようにする。教師会での検討や、必要であれば牧師や長老に事前に相談し、判断を仰いでおく間違いのないでしょう。

絵を描くときに、机や子ども達自身が汚れないように画材は工夫しましょう。特に油性のものは思わぬところに付いて落ちない可能性がありますので注意しましょう。

5月10日 ルカによる福音書24章28～43節

【分級展開例B】

救われた歩み：イエスさまを信じる

1. 使徒言行録16章16～34節を読みましょう。パウロとシラスは女奴隷の占いをさせる悪霊を追い出しました。すると女奴隷の主人たちはパウロたちに怒りました。どうしてでしょう。そしてパウロたちをどうしたのでしょうか。
2. パウロたちは牢屋の奥で、真夜中に何をしていたかな。どうしてそんなことをしていたのでしょうか。
3. その夜、大地震が起こってパウロたちの牢屋はこわれてしまいました。でも牢屋にいた囚人たちは誰も脱走しませんでした。不思議ですね。どうしてでしょうか。瓦礫にうまった？ 暗すぎた？ それとも？
4. 牢屋の看守さんは剣をぬいて自殺をしようとしてしました。恐ろしいですね。囚人を逃がしたら自分の命を捨てることで責任をとらないといけない厳しい決まりがあったのです。でもパウロさんが「自害してはいけない。わたしたちは皆ここにいる」といいました。ほっとしますね。
5. パウロさんたちの前に看守さんはふるえながらひれ伏して「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか」といいました。するとパウロはどう答えましたか？その聖書の言葉を皆で声をだして読んでみよう。
6. 看守さんにパウロは「主の言葉」、聖書の話伝えました。そして看守さんはパウロたちの傷を洗ってあげて、自分は罪を洗ってもらいました。そう洗礼をうけたのです。その時、一緒に洗礼を受けたのは誰かな？
7. そして看守さんと家族はイエス様を信じるようになったことを家族と一緒にお祝いの食事をしました。まだ真夜中です。真夜中の地震のすぐあとのパーティーです。神様は大地震などの災害も恵み変えることができます。家族にとって心にずっと残る真夜中の食事会だったでしょうね。

5月10日 ルカによる福音書24章28～43節

【分級展開例C】

救われた歩み：イエスさまを信じる

1. 使徒言行録16章16～34節を読みましょう。パウロとシラスは女奴隷の占いをさせる悪霊を追い出しました。すると女奴隷の主人たちはパウロたちに怒りました。どうしてでしょう。そしてパウロたちをどうしたのでしょうか。みんなは教会に行っていること、クリスチャンだからからかわれることがありましたか。
2. パウロたちは牢屋の奥で、真夜中に讃美歌を歌っていました。地下牢の一番奥の部屋です。きっと汚いし暗いはずですが。それでも神様に讃美歌を歌いました。どうしてそんなことができたのでしょうか。目の前の現実はとても大変です。でも神様に支えられて二人は勇気をもらったはずですが。
3. その夜、大地震が起こってパウロたちの牢屋はこわれてしまいました。でも牢屋にいた囚人たちは誰も脱走しませんでした。不思議ですね。どうしてでしょう。きっとパウロたちの讃美歌と大地震が関係していると囚人は思った。それにパウロたちの信じる神様の働きが関係していると思ったのではないのでしょうか。
4. 牢屋の看守さんは剣をぬいて自殺をしようとしてしました。恐ろしいですね。みんなもこれで人生終わりだとか、「死にそう」と思うようなピンチの時がありましたか。看守は囚人を逃がしたら自分の命を捨てることで責任をとらないといけないう決まりがあったのです。でもパウロさんが「自害してはいけない。わたしたちは皆ここにいる」といいました。ほっとしますね。
5. パウロさんたちの前に看守さんはふるえながらひれ伏して「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか」といいました。するとパウロはどう答えましたか？その聖書の言葉を皆で声をだして読んでみよう。看守さんにパウロは「主の言葉」、聖書の話伝えました。そして看守さんはパウロたちの傷を洗ってあげて、自分は罪を洗ってもらいました。そう洗礼をうけたのです。その時、一緒に洗礼を受けたのは家族でした。みんなは家族と教会に来ることができるならすごい恵みです。家族の救いのために一緒に教会学校で祈りましょう。
6. そして看守さんと家族はイエス様を信じるようになったことを家族と一緒にお祝いの食事をしました。まだ真夜中です。真夜中の地震のすぐあとのパーティーです。神様は大地震などの災害も恵み変えることができます。家族にとって心にずっと残る真夜中の食事会だったでしょうね。

5月17日 ルカによる福音書15章11節～24節

【解説と黙想】

救われた歩み：神の子とされた喜び

子どもと親のカテキズムの解説

子どもと親のカテキズムの最初の5問はカテキズム全体の構成を示しており、問1は神の子どもとして歩むことが最も大切なことだと教えます。続く問2は神と共に歩むことは、神の栄光をあらわし、神と人に仕えることであると教え、問3は神と共に歩むために、罪人である私たちが必要であることは何であるかを教えます。つまり、問3は問1と結びついています。

問3の前半部分は先週、取り扱われ、まず、罪人である私たちはイエス・キリストを信じて救われる必要があることを教えます。救いの根拠は十字架の死と復活です。本日は問3の後半部分、神と共に歩むために、私たちに必要なことは「神の子どもとされる」ということです。イエス・キリストの罪の贖いは私たちが神の子どもとされるための必要条件です。私たちが罪赦される目的は、神との本来の関係に回復されるということです。本来の関係とは父と子の関係ということです。私たちが罪赦され、神の子とされ、神の子どもとして、喜んで応答することは私たちの人生の中心です。

神の子とされることは様々な特権が与えられることを約束しています。そこには地上での生涯の守り、支えがあることは言うまでもありません。さらに、永遠の命という相続財産が与えられています。神の子どもとして歩むということは私たちが生き生

きと生活することであることを意味しているのです。

聖書箇所解説

ルカによる福音書15章11～24節は有名な放蕩息子の譬えです。15章全体が「失われたもの」という一つのテーマで語られています。弟息子は父のもとから離れてしまいました。父親は息子が戻ってきたとき、「この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ」（24節）と言いました。つまり、神のもとから離れているということは「いなくなっている」状態であり、「死んでいる」状態であるということです。人間は本来とどまるべき、神のもとから離れている存在です。主イエスは私たちが神のもとに戻るために十字架につけられました。主イエスのおかげで私たちと神との間の溝は埋まり、私たちは神のもとへ帰ることができるのです。神は私たちが御自身のもとへ戻られることを本当に喜んでおられます。それは本当の親子の関係が修復することを意味しているからです。神は主イエスを通して、私たちを迎えてくださり、私たちが御自身の子どもになることを心から喜んでくださっています。私たちが神のもとへ帰り、神の子どもとされることは、神にとって大きな喜びであるということをこのテキストから教えられたいと願っています。（高内信嗣）

《参照聖句》 ヨハネ1：12、ローマ8：17

《教理問答》 子どもと親のカテキズム 問1、ウェストミンスター小教理問答問33、34

5月17日 ルカによる福音書15章11節～24節

【説教展開例】

救われた歩み：神の子とされた喜び

◇----- 単元のねらい -----◇

神の子とされ、神の子として歩むことこそ人生のすべて。神の子の自覚を深めよう。

「神さまの子どもは幸せなんだ！」

みなさん、人生一度は好き放題生きてみたいと思ったことはありませんか。僕は小さい時、いつも思っていました。親に何も注意されずに、ずっとゲームをし続けたいなあ。好きなお菓子をずっと食べ続けたいなあ。100万円いま手元にあったら、おもちゃ屋さんやゲームさんにいって自分の好きなものを満足いくまで買って遊びたいなあ。もしこんなことができたなら幸せですね。今日読んだ聖書の箇所は「放蕩息子」という物語です。「放蕩」って言葉は難しいですね。これは好き放題、やりたい放題するっていう意味です。さっき言ったように100万円でやりたい放題、買い物をして遊びまくるということです。

この物語に登場する弟息子はお父さんから財産を分けてもらい、お父さんのいるところから遠く離れて好き放題の生活をしたのです。そのような好き放題の生活をしたものですから、すぐにお金が無くなってしまいました。その時、弟息子くんがいる場所は、果物も野菜もとれない飢饉になりました。お金もなく、それに加え飢饉になってしまいましたから、本当に困ってしまいました。弟息子くんはやっとの思いで、豚のお世話をする仕事に就くことができました。彼は豚が食べる餌でさえ食べたいと思うほどひどい状況でしたが、彼にご飯をあげるものはいませんでした。そんなひどい思いをしているとき、ふと思うのです。「お父さんのところにいた時は、多くの雇

い人さんがいて、ありあまるほど、いっぱいパンがあったのに……お父さんのところに帰ろう。そしてこう言おう。『お父さん、僕は天の神さまに対しても、お父さんに対しても、罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください』。

こうして彼はお父さんのもとへ帰っていったのです。するとまだ、遠く離れていたところからお父さんは、それが息子だと分かったのです。おそらく、お父さんはずっと息子の帰りを待ち、毎日、遠くから息子が帰ってこないか眺めていたのでしょう。すぐに息子を見つけ、お父さんの方から走り寄ってきて、彼を抱きしめました。お父さんはすぐに召使いたちに言います。「一番いい服を持ってきて、息子に着せなさい。手に指輪をはめて、足に靴を履かせなさい。そして子牛を連れてきて焼いて、盛大にパーティーをしようじゃないか。息子は死んでいたのに生き返ったようなものだ！いなくなっていたのにみつかったのだ！さあお祝いしよう!!」。

弟息子は息子としてではなく、お父さんのもとでひとりの働き人として働くことを覚悟していました。けれども、お父さんは息子が帰ってきたことを喜び、息子に良い服や靴を着せ、盛大なパーティーを開いたのです。

さて、この物語、私たちと関係のないお話ではありません。実はこれは私たちのこ

とを言っているのです。お父さんとは神さまのことです。そして弟息子は私たちのことです。お父さんは息子のことを「いなくなった」と言いましたね。私たちは神さまのもとからいなくなった存在です。弟息子はボロボロになったとき、「お父さんのもとでは有り余るほどのパンがある」と思いましたね。自分が今まで生活ができていたのは全部、お父さんがいたからなんだと彼は思ったのです。そうです。私たちは神さまがいなければ、決して生きることのできない弱い罪人です。神さまのもとから離れ、好き勝手に生きている弱い罪人です。神さまのもとから離れてしまうということは、神さまの目から見て「いなくなった」状態なのです。

本日の物語は、そのようないなくなった私たちを受け止めてくださる神さまが教えられています。この物語のお父さんの姿こそ、神さまの本心です。神さまはわたしたちがどんなに罪を犯して、神さまから離れてしまっても、私たちが神さまのもとに帰ることをずっと待っておられます。そして私たちが神さまのもとへ戻っていくときに、神さまは心から私たちを迎え入れてくださるのです。息子がお父さんのもとに帰ってきたとき、お父さんはものすごく喜びましたね。神さまにとって、私たちが神さまのもとに戻ってくることは、計り知れない喜びなのです。

実は、神さまと私たちとの間に大きな溝があります。私たちは罪というものをもっているのです。神さまを嫌い、自ら神さまへ溝を作るのです。ですが、神さまはその溝を埋めるためにイエスさまというお方を十字架につけたのです。だからこそ、私たち

が神さまのもとから離れても、神さまはイエスさまのうえに私たちを赦してくださいます。私たちは神さまのもとへ帰ることができ、神さまはそのことを心から喜んでくださいます。

イエスさまによって罪赦され、私たちが神さまのもとへ帰るということは、私たちが神さまの子どもとされるということなのです。神さまの子どもであるということは本当に幸せなことです。神さまはいつも私たちを守り、支えてくれています。この世でどんなに嫌なことがあっても神さま、イエスさまが慰めてくださいます。そして私たちはやがて死にますが、それは悲しいことではありません。私たちは神さまの家族ですから、神さまのもとへずっといることが約束されているのです。放蕩息子が帰ってきて、神さまがパーティーを開いてくださったように、私たちも天で神さまと喜びながら、一緒にお祝いすることができるのです。また神さまの子どもですから、神さまからあらゆる良いことや祝福を受けることが約束されています。神さまの子どもであるということは本当に幸せです。私たちの人生はまだまだ長いですね。長い人生だからこそ、私たちは神さまのもとへ帰っていきたい。神さまの子どもとして生きていきたいと思います。神さまは私たちを喜んで神さまの子どもとしてくださいます。どんなに辛いことがあっても神さまの子どもだから、神さまがいつも一緒にいて、支えていてくださいます。神さまは今日もあなたを受け止めて、喜んでくれていますよ。今日も私たちは神さまの子どもとして神さまからいっぱい幸せを受け取りたいと思います。(高内信嗣)

《今週の暗唱聖句》

父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。

(ルカによる福音書15章20節)

5月17日 ルカによる福音書15章11節～24節

【分級展開例A】

救われた歩み：神の子とされた喜び

〈展開例〉

放蕩息子の話は、物語としてもとてもわかりやすく、イメージを広げやすいお話です。まず子どもたちに物語そのものを語り、子どもたちが覚えるほどに身近に感じられるようにすることができればそれだけで十分です。語られた言葉の中で、子ども達がそれぞれイメージを広げることができるように話しましょう。

具体的なイメージを広げるために手助けが必要であれば、以下のような道具を使ってみましょう。

・放蕩息子の衣装を着よう

父の家に帰還した放蕩息子は、父からその身分を表す衣を与えられ、祝福を確かめます。

神の子としての「衣装」を身につけることの喜びを経験しよう。

準備するもの：

シーツなど大きな布、ビーチサンダル、色紙など

息子の「服」は大きな布を体に巻いて衣装とします。絵画などで見かけるローマ風の衣装は「トーガ」と言います。「トーガ、シーツ、巻き方」などで検索すると、簡単なやり方を紹介したホームページもあります。簡単に想像するよりはずっと大きな布を使います。

「履物」はサンダルなどで代用すれば良いでしょう。

「指輪」は色紙やモールなどで作ると良いでしょう。子ども用のおもちゃのアクセサリーでも良いですが、紛失や誤飲などの事故に注意しましょう。

簡単な説明をしながら、衣装、履物、指輪と順番にはめていくと良いでしょう。

5月17日 ルカによる福音書15章11節～24節

【分級展開例B】

救われた歩み：神の子とされた喜び

1. 放蕩息子の話を聞いたことがありますか。放蕩という言葉の意味は「好きなことを好きなだけすること」です。みんなが好きなだけやってみたいこと何かありますか。Switch し放題！ YouTube 見放題とか？
2. イエス様のたとえ話では弟息子が旅にでて行きます。お父さんの家から出て行って好きなことをしていただけしました。最後にもっていった何がなくなりましたか。
3. そして弟息子の住んでいた土地は飢饉になりました。そして弟息子はどんな仕事をしましたか。それはイスラエルの人たちが嫌っている動物を飼う仕事でした。そして腹ペコになって何を食べたいと思ったのですか。
4. そんな時、急に思い出すことがありました。弟息子はお父さんの家を思い出したのです。とぼとぼと家に帰ろうと道を歩いていました。そしてずっと歩き続けて、やっと地平線の向こうにお父さんの住む家が見えてきました。どんな弟息子はどんな気持ちだったでしょうね。
5. 家がやっと見えたかと思うと、家の方から点のようなものがこちらに向かってきます。だんだん点ではなく棒のよう。棒ではない。それはお父さんでした！こちらにお父さんは服の裾をまくり上げて走ってきます。
6. 弟息子は考えてきた言い訳をお父さんに言います。でも息子が言い切らないうちにお父さんは口にします「一番いい服を持ってきて！ 手には指輪、それからサンダルもってこなくっちゃね」。そしてお家で盛大なパーティーが始まりました。いなくなっていた息子が帰って来たからです。
7. さてこの話の「お父さん」、そして「弟息子」はだれのことだったのでしょうか。家から離れてしまうことは何を意味していましたか。お父さんの方から走りよってくれたように、神様のほうから私たちに近づいてくださいました。それは私たちの罪のためにイエス様を十字架に付けてくださるという方法です。だから私たちは弟息子がお父さんの家に帰ったように、神さまと一緒に生きるのです。そう私たちはイエス様によって「神の子」とされました。

5月17日 ルカによる福音書15章11節～24節

【分級展開例C】

救われた歩み：神の子とされた喜び

1. 放蕩息子の話を聞いたことがありますね。放蕩という言葉の意味は「好きなことを好きなだけすること」です。みんなが好きなだけやってみたいこと何かありますか。
2. イエス様のたとえ話では弟息子が旅にでて行きます。お父さんの家から出て行って好きなことをしてただけしました。最後にもっていったお金もなくなり友達も消えていきました。似た経験をしたことはありますか。お友達から無視されたり。いじめられたり。自分が調子のいいときは友達でも、なんか人気がなくなると急にみんなどっかにいって一人ぼっちになるみたいな経験です。
3. そして弟息子の住んでいた土地は飢饉になり、弟息子は豚を飼う仕事をしました。イスラエルでは豚は汚れた動物、その餌で腹ペコを何とかしたいと思うほど落ちぶれました。「死にて〜」と言いたいくらい。もう何をしても駄目ということです。かなり辛いですね。
4. そんな時、息子は急に思い出すことがありました。お父さんの家を思い出したのです。あまりにひどいことをしたので息子の資格はないのでお手伝いの一人にしてもらおうと考えて、とぼとぼと家に向けて歩いていました。そしてずっと歩いてやっと地平線の向こうにお父さんの住む家が見えてきました。どんな弟息子はどんな気持ちだったでしょう。
5. 家がやっと見えたかと思うと、家の方から点のようなものがこちらに向かってきます。だんだん点ではなく棒のよう。棒ではない。それはお父さんでした！ こちらにお父さんは服の裾をまくり上げて走ってきます。
6. 弟息子は考えてきた言い訳をお父さんに言います。でも息子が言い切らないうちにお父さんは口にします「一番いい服を持ってきて！ 手には指輪、それからサンダルもってこなくっちゃね」。そしてお家で盛大なパーティーが始まりました。いなくなっていた息子が帰って来たからです。
7. さてこの話の「お父さん」、そして「弟息子」はだれのことだったのでしょうか。家から離れてしまうことは何を意味していましたか。お父さんは神様、息子は私、家は神様と共に生きる事。僕たちは罪によって神様の前に顔を上げられません。でもお父さんの方から走りよってくれたように、神様のほうから私たちに近づいてくださいました。それは私たちの罪のためにイエス様を十字架に付けてくださるという方法です。イエス様の十字架によって私たちはいるべき場所に帰ることができる。そしてもう一度息子と呼んでもらえるのです。だから私たちは弟息子がお父さんの家に帰ったように、神さまと一緒に生きるのです。そう私たちはイエス様によって「神の子」とされたのです。

5月24日 使徒言行録2章41～47節

【解説と黙想】

「教会に共に歩む道・呼び出され生きる」

0. キリストの教会の誕生

五旬祭（ペンテコステ）の日（使徒2:1）、一つの家に集る弟子たちは、主イエスが約束されていた聖霊を受けると、「神の偉大な業」（同2:12）について語り始めた。私たちはそこにキリストの教会の誕生を見る。そこで始められた新しい生活とはどのようなものであったのか。今日の箇所に着目的にまとめられている。

1. 使徒の教え

教会生活の基はキリストの福音にあった。昇天された主イエスから、人びとは直接、福音を聞くことはできなくなったが、その教えは弟子たちの心に刻まれ、聖霊において思い起こさせられ（ヨハネ14:16）、説教されることにおいてキリストの福音に与ることができた。

2. 相互の交わり

教会生活の基は共に生きることにあった。人びとはひとつの場所に集り、主と共にあることを喜び、またそれぞれが共にあることを喜んだ。持ち物を分け合い、労苦を分け合った。共に食事をし、神から与えられたものに対する感謝を共有した。神への愛と隣人への愛は一体的である。人びとは神への賛美のもとに、一つとなり同じ道を歩んだ。

3. パンを裂くこと

教会生活の基は主イエスの命を味わうことにあった。主イエスは最後の晩餐の席で、「パンを取り、感謝の祈りを唱えて、それを裂」かれた（ルカ22:19）。復活の主がパンを裂かれた時、その眼が開かれた弟子たちがいた（同24:30, 31）。パンが裂かれ、

そのパンを食することは、主イエスを記念することであり、十字架の赦しと復活の恵みを想起することであり、自身が主イエスの弟子であることを確認することであった。パンが裂かれるたびに、人びとは主イエスに新しく出会い、神と結ばれた「新しい契約」（同22:20）を味わった。

4. 祈ること

教会生活の基は祈ることにあつた。祈りは主イエスの御名を通して神にささげられるものである。ゆえに祈りは神との交わりである。祈りは主イエスの御名のもとに自身とその罪を顧みる時である。ゆえに祈りは神の御前における自身との交わりである。祈りは隣人の平和を神に願う時である。ゆえに祈りは神の御手の中における隣人との交わりである。

人びとは神に祈ること、互いに祈り合うことに熱心であった。

5. 一つとなって

上記四つの行為において、最初期キリスト教会の姿が要約的に記されている。それらの行為は礼拝として集約されるものであろう。彼らは礼拝をささげること熱心であった。礼拝が教会生活の基であった。人びとは礼拝へと招かれ、また隣人を招いた。場所は各自の「家」（使徒2:46）であった。そこに聖と俗の区別はない。日ごとに、「週の初めの日ごとに（日曜日）」（同20:7）、人びとは主イエスに出会うため、互いに会うため、一つとなった。礼拝から新たな歩みを始め、また礼拝へと帰っていった。それがキリスト者のリズムとなった。

（柏木貴志）

《参照聖句》 イザヤ書14章13, 14節、ゼファニヤ書3章9節、使徒言行録2章1～13節
 《教理問答》 ウェストミンスター小教理問答 問88、ハイデルベルク信仰問答 問65, 66

5月24日 使徒言行録2章41～47節

【説教展開例】

「教会に共に歩む道・呼び出され生きる」

◇----- 単元のねらい -----◇

使徒言行録に記された最初期キリスト教会の姿は、教会の基が何であることを要約的に描き記している。その教会の営みへと、聖霊は2000年に渡り、神の民を招き続けてこられた。私たちもまた招かれた者たちであり、招く者たちである。私たちは聖霊が導く営みの中を生きていく。この時代の中で共にひとつの場所へと呼び集められ、共に主を見上げることの尊さを改めて考えたい。共にひとつの時、ひとつの場に置かれている意味を味わいたい。教会の中には多様な人が招かれる。すべての事柄に神の招きを見たい。

「そうだ、あの人に、アイニイコウ」

1. はじめに

今日、みんなで読んだ聖書には、今から約2000年前！（もう随分と昔のことですね）、教会の人たちがどういう生活をしていたのか、ということが記されていました。

来週、「ペンテコステ」という“教会のお誕生日”をお祝いしますけれど、イエスさまが十字架に架かれて、復活されて、天に昇られたあと、聖霊に導かれたお弟子さんたちは、どういう生活をしていたのか、今日はそのことをみんなで、考えてみたいと思うんですね。

2. 最初期キリスト教会の生活

聖書には、お弟子さんたちがどういう生活をしていたと書かれていましたか？——彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった（42節）。

そうですね、ありがとうございます。四つのことが言われていました。

まず、「使徒の教え」。「使徒」というのは、イエスさまのお弟子さんたちのことです。特に12使徒というペトロさんやヨハネさ

ん、ヤコブ、アンデレさんたちのことですね。この人たちはずっとイエスさまと一緒にいて、ずっとイエスさまから大切な教えを聞いてきた人たちです。イエスさまは、私たちが神さまのことを知るために必要なことは全部、お弟子さんたちに伝えておられました。なので、お弟子さんたちは「ペンテコステ」の後、イエスさまが私たちの救い主です！ イエスさまはこう言われていました！——ということをいろんな人たちにお話していきました。今、先生が説教をしてくれるように、イエスさまのことをみんなに教えていったんです。それが「使徒の教え」です。

次に、「相互の交わり」ってなんでしょう。——仲良くすること！ お喋りをする事！

そうですね、それも大切な「交わり」です。聖書にはお弟子さんたちが「一つ」となったということが何度も記されていますから、みんなで集まってたくさんお喋りをしたんでしょうね。楽しいことや辛いことや、みんなで相談し合ったりしたんだと思

います。食べ物がないと困った人がいたら、おすそ分けをしたり、嬉しいことがあるとみんなで一緒にお祝いしたり、同じ時間をみんなで過ごしたんですね。

ではその次の「パンを裂くこと」というのはどうでしょう。みんな、朝ご飯は何を食べたかな。パン派？ ご飯派？ パン派の人はどうやって食べたかな。

——かぶりついて！ ちぎって！

昔の人はね、みんなで一緒にパンを食べる時に、一人のひとが一つのパンをちぎって、はい、あなたに、次はあなたに、と配ったんです。イエスさまがそうされていましたよね。5000人もの人たちにパンを配られた時（ルカ9章）や最後の晩餐の時（同22章）に、復活された時（同24章）にイエスさまはお祈りをされながら、パンをちぎられた、裂かれていました。

お弟子さんたちが「パンを裂いた」というのはね、そのイエスさまがくださったことを思いだすためだったんです。イエスさまがみんなのために十字架に架かってくださった、みんなのために復活してくださった、そのイエスさまが私たちに生きるためのパンを、命を与えてくださるということを、みんなで確認したんだね。イエスさまの命に生かされているということを味わったんです。

そして、最後、「祈ること」。これは分かるよね。お弟子さんたちはみんなで一つになってお祈りをしました。イエスさまが教えてくださった「主の祈り」や、ありがとうということ、ごめんなさいということ、何でもイエスさまの御名前ですべて祈ったんですよね。

こういう生活を、今から2000年前の教会の人たちはしていました。

3. 私たちの教会の生活

でも、どうだろう。みんなも同じことをやっていない？ どこでやっているだろう？

——教会でやってる！

そうですね。みんな、牧師や、日曜学校の先生たちから聖書のお話を聞くね。イエスさまのことを教えてもらうよね。みんな、「使徒の教え」を聞いているんです。

「相互の交わり」だってしていますよ。時々、ケンカもするけれど、一緒にイエスさまを礼拝して、一緒にお勉強して、一緒にゲームをして、そうやって、みんな一緒に大人になっていくんです。そのうちに、「わたしはこういう仕事をしたい」、「オレ、牧師になるわ」、「私たち、結婚します」ということを言い合うようになります。教会のお友だちは一生の友達です。

それから、「パンを裂くこと」だって、礼拝のなかで、牧師がパンを裂いているのを見たことがあるでしょ。

——聖餐式！

そうです、そうです。大人たちがパンを食べて、ぶどう酒？ ぶどうジュースも一緒に飲んでいるでしょ。あれはお腹が空いているからじゃないんですよ。イエスさまを味わっているんです。イエスさまの祝福を頂いているんです。みんなも、その意味が分かったら、一緒に聖餐式をしましょう！

そして、みんな、お祈りをしている？ ふだんはムズカシイという人も、教会にきたらお祈りをするよね。自分でしなくても、牧師先生が、長老さんがお祈りしているのを聞くよね。しっかりと聞くこともお祈りをするんです。

こうやって考えてくると、2000年前の人

たちがやっていた同じことを、みんなもやっているんですね。教会で、特に礼拝で。

もう昔から、イエスさまを信じた人たちは、日曜日になると、みんなで教会に集って、一緒にイエスさまのお話を聞いて、聖餐式をして、お祈りをしたんです。し続けたんです。

もちろん、普段の日には一人でお祈りするんだけど、日曜日になると、みんなと一緒に、イエスさまに会いに行きたくなるんです。一人で聖書を読むよりも、みんなでお話を聞いた方がよく分かったりしますし。それに、みんなの顔を見るのが嬉しいですね。

みんな一人ひとり違う顔をしています。違う考え方をしています。いろいろな祈り方があります。だから、みんなと一緒にい

ることで、一人では気付かなかったイエスさまのことが分かったりします。新しいお祈りの言葉を教えられたりします。それはうれしいことです。

4. おわりに

だから、日曜日になると、「そうだ、あのの人に、会いに行こう（アイニイコウ）」と思って、イエスさまに、みんなに会うために、教会に行くんですね。すると、イエスさまの「愛に憩う（アイニイコウ）」ことができるんですよ。みんなの「愛に憩う」ことができるんですよ。教会はそういう場所ですね。そういう場所として、イエスさまは教会を守り続けてくださっています。

今日も、みんなで、イエスさまの祝福をたくさんいただきましょう。（柏木貴志）

《今週の暗唱聖句》

彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。

（使徒言行録2章42節）

5月24日 使徒言行録2章41～47節

【分級展開例A】

「教会に共に歩む道・呼び出され生きる」

〈展開例〉

聖霊降臨日を挟んで、教会について告白するカテキズム問4を扱います。詳細は各週の解説に委ねますが、大きな枠でいうと、今週は神様が私たちを集めてくださること、次週は聖霊なる神様が私たちに注がれ満ちてくださること、次々週は神様が私たちを世界に送り出されることを扱います。一連の事柄を繋がったこととして学ぶために、3回連続の工作をします。

準備するもの：

大きめの紙、画用紙、塗り絵のための道具（色鉛筆、クレヨンなど）、何度もはがせるテープなど

大きめの紙にマジックなどで大きく教会の形の枠を書いておく。

子どもが小さかったり、分級の時間が限られている場合、事前に画用紙に子どもの形を描いておく。個別の特徴を掴んでイラストにできれば一番良いが、簡単に「男の子」「女の子」程度の区別でも良い。

・1週目

「教会に呼ばれる」

- ・教会の絵は壁などに貼っておく。
- ・自分の姿を画用紙に描く。もしくは、事前に書かれたものから、自分の絵を決める。

- ・各自で自分の姿に色を塗り、教会の絵に貼る。教会の外から中に入ろうとしているところ、教会の中にいるところなど。

・2週目（ペンテコステ）

- ・教会の中が聖霊に満たされ、鮮やかにされる。絵の教会をみんなで色塗りし、折り紙で花などを作って教会の内側に飾る。
- ・子どもたちの姿は改めて教会の中に貼り、みんなが輪になるように配置する。

・3週目

- ・教会から外の世界に送り出されていく。鮮やかさが教会の中から外へと広がっていく。
- ・教会の外を塗り、色々な景色を描きましょう。
- ・草や花、建物や他の人々。風景など
- ・直接描くだけでなく、描いた小さい紙を貼ったり、色紙などで作ったものを貼ったりすると、複数の子どもが同時に作業ができます。
- ・子ども達の姿は教会の中だけでなく、外側へと貼っていく。特に新しく描いた人やものと向き合うように貼る。
- ・そこで相手に何を話すか、何を働きかけるのか話題にすると良いでしょう。

5月24日 使徒言行録2章41～47節

【分級展開例B】

「教会に共に歩む道・呼び出され生きる」

1. 教会は今からどれくらい前にスタートしたのかな。そう教会の誕生日のことを記念して今も私たちの教会でお祝いをしています。そのお祝いの日はいつでしょうか？
2. 最初の教会ではどんなことをしていたのだろう。今日の聖書箇所から見つけてみよう。
3. 「使徒の教え」とはなんでしょうか。それはイエス様とずっと一緒だった弟子たちの心に刻まれた教えです。誰がそのことを思い出させてくれるのでしょうか。ヨハネによる福音書14章16節と26節を読んでみましょう。
4. 「相互の交わり」とは何でしょうか。仲良くすること、お話をすること。教会に集まって皆は嬉しかったこと、苦しかったことを一緒に話し合ったでしょう。そして食べ物や生活に困っている人がいれば分け合って暮らしたのです。
5. 「パンを裂くこと」とは何でしょうか。それは聖餐式のことです。ルカによる福音書22章14～23節を読んでみよう。イエス様の十字架による罪の赦しと復活の恵みを弟子たちは覚えたのです。
6. 「祈ること」よく分かる言葉ですね。祈ることもイエス様が教えてくださいました。どんな祈りでしたか。僕たちの普段の祈りはどんなことを祈っていますか。
7. 「一つになること」とは何でしょうか。それはこれまでの4つのことが行われることです。私たちは礼拝で一つとされます。人々は復活のキリストに出会うために、礼拝で一つになり、イエス様によって一つにされました。

5月24日 使徒言行録2章41～47節

【分級展開例C】

「教会に共に歩む道・呼び出され生きる」

1. 教会は今からどれくらい前にスタートしましたか。そう教会の誕生日のことをペンテコステと言って記念して今も私たちの教会でお祝いをしています。教会の2000年の歴史を両手で現わしてみよう。指が10本だから一本当たり200年、僕たちの教会は指何本にあたるのかな？ そう一本にもならないくらい。だから今日の教会の始まりの話には親しみを感じませんか。
2. 最初の教会ではどんなことをしていたのだろう。今日の聖書箇所から見つけてみよう。
3. 「使徒の教え」「相互の交わり」「パンを裂くこと」「祈ること」とはなんでしょうか。そしてこの4つで一体何をあらわしていますか。
4. 「一つになること」とは何でしょうか。それはこれまでの4つのことが行われることです。私たちは礼拝で一つとされます。人々は復活のキリストに出会うために、礼拝で一つになり、イエス様によって一つにされました。礼拝で一つにされるってでもどういうことか考えてみよう。
5. 神様は私たちを呼び出して集めてくださいました。神様の子どもとして生きるとき、教会生活がとても大切です。私たちはどうして一人で礼拝することは良くないのでしょうか。
6. 「使徒の教え」は聖書の御言葉、「パンを裂くこと」は聖餐式、そして祈ること。これらをまとめて何と呼んでいるのでしょうか。『子どもと親のカテキズム』問47-55問を参考に考えてください。
7. そのように神様は「恵みの手段」を与えて私たちを祝福してくださるのです。昔から神様が与えてくださる方法は変わらないですね。その祝福がいちばんはつきりと豊かに現れるのは何だろう。礼拝ですね。神様が恵みを差し出してくださっています。皆で一緒にイエス様に会いに行こう！

5月31日 使徒言行録2章1～42節

【解説と黙想】

キリスト教会の誕生

弟子たちは主イエスが十字架で処刑されるという弟子たちが悲しみに暮れていた。その時、主イエスが死から復活されて、弟子たちの目の前に現れた。そして40日間、主イエスは弟子たちと共に過ごされ、昇天された。

昇天後、主イエスが約束された聖霊が降るまでの10日間、弟子たちはどのような思いであつたろうか。弟子たちは集まり、祈りつつ、主イエスが言われた「聖霊」なるものが降るのを待っていた。

弟子にとって天から降る聖霊をどのようにイメージしていたのだろうか。たとえば弟子たちの想像がどのようなものであつたとしても、実際に降った聖霊は想像を超えたものであつたであろう。ルカが記した聖霊は「激しい風が吹いて来るような音」であり「炎のような舌」であつた。その聖霊は弟子たちに他国の言葉を語らせた。その光景を見ていた者にとってそれは酒に酔っている者たちの姿と映った。しかし彼らには発せられている言葉が自分たちの故郷の言葉であり、神の偉大な業を語っていることがわかった。

弟子の一人であるペトロは立ち上がり、聖霊に促されて、語りだした。それはキリスト教徒がする最初の説教であつた。その中でペトロは次のことを語った。①今起き

ていることが預言者ヨエルの預言したこと、②ナザレ人イエスこそが神から遣わされた方であり、イエスはそれを奇跡と業とするしによって証明したこと、③あなたがたはそのイエスを十字架につけて殺してしまったこと、④しかし、これは神さまのご計画であり、神さまはイエスを復活させられたこと、⑤神さまはこのイエスを、主とし、また救い主となさつたこと。

それまでひっそり身を隠していた弟子たちは聖霊の力を受けて大胆に福音を語りはじめたのである。そしてペトロの説教を聞いて受け入れた者三千人ほどがその日に洗礼を受けた。何という偉大な聖霊の力であろうか。そればかりか彼らは使徒の教えを聞き、交わりを深め、熱心に祈った。こうしてキリスト教会は誕生した。

教会は人間の力によってできたのではない。ただ御霊なる神の力、その背後にある三位一体なる神さまの御力によって誕生したのである。この後、教会は地の果てにまで福音を宣べ伝えるのであるが、それは、けっして人間の力によってなされるのではなく、聖霊によってなされるのである。教会はこの世にあって、この世のものではない。教会は神さまのものである。

(坂部 勇)

《参照箇所》 ルカによる福音書24章47～49節

《教理問答》 子どもと親のカテキズム 問35、42、44、46、47

5月31日 使徒言行録2章1～42節

【説教展開例】

キリスト教会の誕生

◇----- 単元のねらい -----◇

教会は人間の力によってできたものではなく、聖霊の力によって、神さまによってつくられたこと、また、教会に集っている者たちは同じ信仰を持っている、つまり同じ聖霊を受けて、同じ神さまを信じている者たちである。また、その信仰の一致の現れとして、共に、礼拝し、交わり、聖餐に与り、祈ることが出来る。さらにその同じ聖霊が2020年に生きる私たちにも働き、同じ信仰を持っていることを伝えたい。

「教会はどうしてできたのでしょうか」

みなさんが、今いる所はどこですか。教会ですね。この教会はどうしてできたか知っていますか。もちろん、教会の建物は大工さんたちが木を切ったり、釘を打ったりして造ってくれました。今聞いているのは教会の建物ではなくて、教会にどうやって大人や子どもが集まってきたのかということです。もう一つ質問をします。教会にはいろんな人たちが集まってきているけど、この人たちみんなが持っている同じものとはなんなのでしょうか。わかる人はいるかな。今からするお話の中にその答えがありますから、よく聞いていてくださいね。後でみんなに質問するからね。

世界で最初に教会ができたのは今から約二千年前のエルサレムでした。イエスさまはわたしが父なる神さまのところへ戻った後、天から聖霊があなたたちに降り、力をいただきますとお弟子さんたちに約束されて、父なる神さまの所へ戻って行かれました。

それからしばらくすると、イエスさまのお約束の通りに天から聖霊が降りました。それはどんなふうだったのでしょうか。そ

れはまるで台風の時に吹くようなとても強い風のようにでした。その風の音がお弟子さんたちのいた家の中に響き渡りました。すると、炎のような舌ペロがいくつも分かれて現れ、お弟子さんたち一人一人の上にとまりました。そうしたら、なんとお弟子さんたちは今まで話したことのないような外国の言葉で話し始めました。「シャローム（こんにちは）」（ヘブライ語）じゃなくて「サラーム（こんにちは）」（アラビア語）なんて言ったのかな。

これを聞いたお弟子さんたちの周りにいる人たちは、「この人たちは朝からお酒を飲んで酔っ払っているのだ」と思いました。またこの中には外国の人もいたから、自分たちの国の言葉を知るはずがないお弟子さんたちが自分たちの言葉を話しているのを聞いて驚いてしまいました。

その時に、お弟子さんの一人ペトロが立ち上がってその人たちに向かって、話し始めました。ペトロは次のことを熱心に伝えました。①今起きていることが旧約時代の預言者ヨエルが預言したことが本当の事として起こったということ。②イエスさまこ

そが神さまから遣わされた方であり、イエスさまはそのことを、病気を治したり、人から悪霊を取り除いたり、嵐をしずめたり、食べ物を増やしたりという奇跡とるしによって証明したこと。③あなたがたによってイエスさまは十字架につけて殺されてしまったこと。④しかし、これは神さまのご計画であり、神さまはイエスさまを復活させられたこと。⑤神さまはこのイエスさまを、主とし、また救い主となさったこと。そして、あなたたちも罪を悔い改めて、このイエスさまを信じて、洗礼を受け、罪から救われなさい。そうすれば、私たちと同じように聖霊を受けます。このようにペトロは力強く証したのです。

ペトロのこの言葉を聞いて受け入れた人たちは洗礼を受けました。その日だけでなんと3000人もの人が洗礼を受けて、ペトロたちの仲間となりました。この聖霊降臨の出来事をペンテコステと言います。

そして、お弟子さんたちと新しく加わった人たちは共にイエスさまの教えをよく聞きました。また、みんなで仲良くいろんな事を話したり、聖餐式をしたり、それから一緒に熱心にお祈りをしました。これが最初の教会です。ですから、教会は人がつくったものではありません。教会は聖霊が降ってできました。聖霊は三位一体の神さま(父、子、聖霊)のおひとりの神さまで。つまり、教会は神さまによってつくられた

のです。

そして、教会に集まってきた人たち全員が同じく持っていたものとは神さまを信じること、つまり信仰です。ペトロのお話を聞いて洗礼を受けた人たちの中にはいろんな国の人がありました。男の人も女の人も大人も子どもいました。でもみんな同じ神さまを信じる信仰を持っていました。だからみんな一緒になって交わりをしたり、祈ったり、神さまの教えを聞いたりすることが出来たのです。

これは今から約二千年前のエルサレムだけに起こったことではありません。今日、今、ここでも、みんなにも起こっていることです。みんなの中にもいろんな人がいます。でも、こうして、一緒に教会に集まって、神さまの教えを聞いたり、賛美したり、お祈りをしています。それはみんなが神さまを信じる信仰を持っているからです。みんなにもペトロさんや洗礼を受けた三千人と同じ信仰があるからです。目には見えなけれど、今ここにも、ペトロさんたちに降ったのと同じ聖霊が働いているからです。なんて神さまは素晴らしい方なのでしょう。

質問の答えはこれでわかったよね。教会は神さまによってできました。みんなが持っている同じものとは神さまを信じる信仰です。(坂部 勇)

《今週の暗唱聖句》

ペトロは彼らに言った「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます」。

(使徒言行録2章38節)

5月31日 使徒言行録2章1～42節

【分級展開例A】

キリスト教会の誕生

〈展開例〉

・色々な国の言葉で挨拶をしてみよう。

正確な発音でなくて構いません。色々な国の言葉の挨拶をしてみましょう。

教会に、多国語を話せる方がいたら、教えてもらうのも良いでしょう。

例

「おはよう」(日本語)、「グッド・モーニング」(英語)、「ボンジュール」(フランス語)、「グーテン・モルゲン」(ドイツ語)、「ブエノス・ディアス」(スペイン語)、「フーテ・

モールヘン」(オランダ語)、「ドーブロエ・ウートロ」(ロシア語)、「カリメーラ」(ギリシャ語)、「シャローム」(ヘブライ語)、「サバアーアルカイルヤ」(アラビア語)、「ナマステー」(ヒンディー語)、「マガンダン・ウマガ」(タガログ語)、「アロハ・カカヒアカ」(ハワイ語)、「ザオ、シャンハオ」(中国語)、「アンニョン・ハセヨ」(韓国語)など

(参照：世界のあいさつ <http://www.ryucom.ne.jp/users/jr6tpd/language.htm>)

5月31日 使徒言行録2章1～4 2節

【分級展開例B】

キリスト教会の誕生

1. 五旬祭の日にどんなことがおこりましたか（2章1～4節）
2. あらゆる国からエルサレムに帰ってきた信仰深いユダヤ人はこのことをどのように受け止めましたか。（2章5～13節）
3. ペトロが説教を始めました（2:14～21）。これは預言の言葉の実現だと言っていますね。ヨエル書3章1～5節の言葉を読みましょう（2章5～13節）。このときペトロは集まった人たちになぜこのように説明したのでしょうか。
4. ペトロはイエス様の十字架と復活が起こったことをどのように説明していますか（2:22～28）。ペトロは詩編を引用して（詩編16:8～11）説明しています。ペトロは何が実現したと言いたいのでしょうか。
5. ペトロの説教が続きます（2:29～36）。イエス様は復活され、昇天して、聖霊を注いでくださいました。皆がそのことを目撃していると教えるのです（33節）。目撃した人はそのままでよいのでしょうか。
6. イエス様の死についてすべての人には責任があります。「どうしたらよいのか」（37節）という人々の声は自分の罪を認める言葉です。ペトロによって悔い改めと洗礼へのまねきが語られました。その日3000人が教会の仲間に加えられたのです。

5月31日 使徒言行録2章1～42節

【分級展開例C】

キリスト教会の誕生

1. 五旬祭の日に弟子たちが集まっている家に聖霊が降りました。具体的に与えられたしるしは何でしょうか。(2章1～13節)。またその時にしるしが与えられて語りだしたのは、一人だけではありませんでした。これはわたしたちひとり一人にも神さまのことを伝えていくことが任されていることを意味しているのではないのでしょうか。
2. ペトロが説教を始めました(2:14～36)。これは預言の言葉の実現だと言っていますね。ヨエル書3章1～5節の言葉を読みましょう(2章5～13節)。このペトロの説教は少し長いですが、とても大切です。この説教はキリスト教会のはじめての説教だからです。説教のポイントは三つでできています。「地上を歩まれたイエス様」、「死人からの復活」、「昇天」です。それぞれどこにあたるのか確認をしてみましょう。
3. ペトロの説教で特に大切なのは33節です。皆でその個所を読みましょう。「それで、イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いでくださいました。あなたがたは、今このことを見聞きしているのです。」イエス様が聖霊を与えてくださるのです。
4. ペンテコステの日、ペトロの説教の後に洗礼を受けた人はなんと3千人でした。とてもたくさんで私たちの教会とはだいぶ違うように思えます。でも聖霊の神様は私たちの教会にも昔と同じように働いてくださいます。1コリント12章3節を読みましょう。聖霊が働かれると、どのようなことがおこるのでしょうか。それは今もおこっているはずですよ。
5. 私たちはペンテコステの時と同じように教会の礼拝で「イエスは主である」と告白しています。だから教会の一番大切なことは同じことをしているのです。ですから教会学校に集まるお友達が多くても、逆に少なくても小さい教会学校にも同じように神様は祝福を与えてくださっています。最後に聖書を読みましょう(マタイ18章19、20節)。

6月7日 ルカによる福音書10章38節～42節

【解説と黙想】

「教会と共に歩む道・派遣されて生きる」

この箇所は固定観念をもって見られてしまいうきりがある。マルタとマリアが対比され、奉仕よりも学びの方が大切であることが言われている。しかし、主イエスが言われた「必要なことはただ一つだけ」とは、本当にそういうことなのだろうか。主イエスの言葉をそれほど単純な訓戒として聞き流してよいのだろうか。

マルタは村にお入りになった主イエスを、すかさず家に招き入れた。そして主イエスをもてなすためにせわしく立ち働いていた。その姿はせっかちで感情的な人に映る。読者は、主イエスとその姿勢を指摘しているかのように思ってしまう。しかしマルタが主イエスにもてなそうとしたことはごく当たり前のことである。主イエスは旅行の途中で彼女たちの家に立ち寄った。サンダルで歩いてきたため、足は汚れており、疲れが出ていただろう。その主をもてなそうとするのは当然のこと。マルタは主を喜ばせたい一心で奉仕に専念した。

しかし、マルタは自分が一生懸命にもてなしの準備をしている中、マリアがなんの手伝いもしないことに心を騒がせ、あろうことか主イエスに八つ当たりをしてしまう。マルタは「多くのことに思い悩み、心を乱している」状態だった。マルタの心は今、バラバラでパニックになっている。主イエスはそんな彼女に「必要なことはただ一つだけ」と言われる。主イエスはマルタの奉仕がお気に召さなかったわけではない。むしろ、彼女の熱心な奉仕を喜ばれたことだろう。しかし、主は熱心さの裏側で相手を見ず、自分ばかりを見てしまうマル

タの心を見出しておられる。マルタは善意や親切心から自分の思いを相手に押し付けてしまっている。しかし主が願われたのは、主に喜んでいただくために、主の声を聞くことだった。

主イエスはその点マリアの姿勢を評価している。ただこれは単純に奉仕か学びかと比較されるべきものではない。読者はここで、マリアの人物像を、家事よりも学びを、手伝うことよりも話を聞くことを好んでいる夢見がちな少女のように捉えてしまうことがある。しかし主イエスは「マリアは良い方を選んだ」という点を評価している。マリアは、ただボーっと主の言葉に釘付けになっていたわけではない。家事の手伝いをするよりも、学ぶことそれ自体よりも、主の言葉に聞くことを選んだ。主が本当に喜ばれる奉仕が何かを知るため、自分の善意や親切心に従うのではなく、主に直接聞こうとした。それは自分の心ではなく、主の御心を第一とする選択であった。教会の中で主に喜ばれる生き方をしようとする時、そこで最も大事なものは、自分の善意や親切心に従うことではなく、主の御心を尋ね求めること。

この箇所を読む時、読者は自分や他人を、マルタ的な人、マリア的な人と評価しようとする。しかし私たちは皆、「多くのことに思い悩み、心を乱し」、さらには主イエスに八つ当たりをしてしまうマルタなのかもしれない。しかし、主が求められるのは、主の本当に喜ばれる奉仕が何かを尋ね求めて、主の言葉に耳を傾けることである。

(三川共基)

《参照聖句》 サムエル記上3章10節、ルカによる福音書1章38節

《教理問答》 ウェストミンスター小教理問答 問90、ハイデルベルク信仰問答 問96

6月7日 ルカによる福音書10章38～42節

【説教展開例】

「教会と共に歩む道・派遣されて生きる」

◇----- 単元のねらい -----◇

自分の思いよりも主の声を聞くことを選び、自分の願いよりも主の願っておられる奉仕に向かう。

「必要なことはただひとつだけ」

イエスさまは旅の途中でとある村に立ち寄りました。足は疲れ、砂ぼこりで汚れ、お腹も空いていたことでしょう。そこへマルタという女性が近寄り、自分のお家へイエスさまをご招待しました。マルタはイエスさまをおもてなしするためとても張り切っています。掃除をしたり、ごちそうを作ったり、家の中をあちらへ行ったり、こちらへ行ったりしています。そのせわしい中で、イエスさまは腰をおろしてお話を始められました。すると、マルタの妹マリアがすぐそばに座ってお話に耳を傾けています。

マルタはその様子を見てカンカンになってしまいました。そしてその文句をイエスさまにぶつけたのです！「イエスさま、なぜマリアにも手伝いをさせないのですか？ 私はこんなに一生懸命やっているのに」と。するとイエスさまはマルタを落ち着かせて言いました。「マルタ、私のために一生懸命お世話をしてくれてありがとう。私はとてもうれしいよ。でも、私のために何かしてくれるならば、本当に必要なことはただひとつだけなんだよ。マリアはそのひとつを選んでいるのだよ。だからあまり悪く言わないでくれ」。

イエスさまはマルタが一生懸命お世話してくれたことをとても喜んでいます。でも、一生懸命になるあまり、一番大切なことに目が向いていないことを教えられました。マルタは疲れてお腹の空いているイエスさまを喜ばせたい思いで、熱心にお世話をしていました。でもそのお世話は、イエスさまがマルタにお願いしたことではありませんでした。マルタが自分で考えて、自分の思いで、イエスさまにはこれとこれが必要だろうと決めたことだったのです。そして、あれもこれもと考えるうちに、心がいっぱいいっぱいになりパニックになっていました。イエスさまのお言葉は、その慌てふためいているマルタの心を優しく落ち着かせるものとなりました。そして、イエスさまが今何を願っておられるのかに目が向けられます。

それではイエスさまが一番喜ばれることとは、一体何でしょうか。ここでイエスさまは「必要なことはただひとつだけ」と言われます。皆さんはその「ひとつ」が何か分かりますか？ 礼拝ですか？ 聖書を読むことですか？ お祈りですか？ 献金ですか？ その答えはマリアの姿から分かります。マリアはイエスさまが家に入ってこられたその時から、すぐそばでイエスさま

のお話に聞き入っていました。じゃあ、イエスさまのお話を聞くことがただひとつの必要なことなのでしょうか。ちょっと惜しいです。

ここでマリアはただのほほんとイエスさまの言葉を聞いていたのではありません。お姉さんのマルタは怒るだろうと思いながらも、イエスさまの言葉を聞く方を「選んだ」のです。それは、イエスさまが今一番願われることを聞きたかったからです。きっとマリアもイエスさまのお世話をしたかったでしょう。でも、自分で良かれと思っ

てするのはなく、イエスさまは一番何をしてほしいのか、直接聞きたかったのです。だから、イエスさまのすぐそばでお話を聞く方を「選んだ」のです。イエスさまの喜ばれることをしたいと思う時、良い奉仕をしたいと思う時、ただがむしやにあれもこれもするのではありません。イエスさま

の声に耳を傾ける方を選ぶこと、これがただひとつ必要なことです。イエスさまの声を聞けば、イエスさまの喜ばれること、良い奉仕が何なのかわかるようになります。私たちは教会の中でいろいろな奉仕やお手伝いをします。みんなイエスさまのために一生懸命です。でも、ときどき、一生懸命であることが気持ちよく、ついついイエスさまのことを忘れてしまうことがあります。でもそんな私たちにイエスさまは「必要なことはただひとつだけ」と教えてくださいます。あれもこれもしなければならぬとあわてる必要はありません。まずはイエスさまの声をよく聞きましょう。イエスさまの言葉を聞く方を選びましょう。イエスさまの言葉を聞いていれば、イエスさまが一番喜ばれることは何かちゃんと分かります。(三川共基)

《今週の暗唱聖句》

主は来てそこに立たれ、これまでと同じように、サムエルを呼ばれた。「サムエルよ」サムエルは答えた。「どうぞお話しください。僕は聞いております」

(サムエル記上 3章10節)

6月7日 ルカによる福音書10章38～42節

【分級展開例A】

かみさまによろこばれる働き

〈お話のポイント〉

マルタは、主イエスの福音を受け入れたので、「イエスを家に迎え入れた」。「喜んでイエスを（家に）迎えた」（ルカ19：6）あのザアカイ〈4月19日参照〉に、イエスは「今日、救いがこの家を訪れた」（ルカ19：9）と祝福して言われたように、マルタとマリアの家にも救いが訪れた。そして、マルタは主イエスへの「いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていた」。

しかし、イエスがこの家でされることは、福音を語ることだった。だから、イエスへの第一のもてなしは、語られることを聞くこと。マルタの考える“イエス様を喜ばせたい、最高のおもてなしを”、ということも間違ったことではなく必要なこと。しかし、今語られる主イエスが一番望むことは、ごちそうでも、あたたかい風呂でもなく、聞いてくれることだ。「必要なことはただ一つ」とある通り、語られる主イエスの「その話に聞き入る」ことだ。その点をおさえ、教会での奉仕、伝道、証に生きること（子どもと親のカテキズム：問4後半）に言及して教える。

〈分級で用いる「しつもん」の例〉

しつもん1

教会でみなさんがすすんでできることは、どんなことがありますか（今、あるいは将来的に）？

予想されるこたえ：礼拝のうけつけ、教会のおそうじ、オルガンばんそう、教会でのみんなの食事のようい、など。

しつもん2

教会でできることはたくさんありますが、今日のお話で、マルタとマリアの家で、イエスさまが一番してほしかったことは何だったと思いますか？

① おもてなし

② イエスさまのお話を聞く

しつもん3

お話を聞いてほしいと願っておられる聖書の神さまのために、教会のそとで、イエスさまを信じるわたしたちは、何ができるのでしょうか？

6月7日 ルカによる福音書10章38～42節

【分級展開例B】

「教会と共に歩む道・派遣されて生きる」

教会は、主のみもとに呼び集められると同時に主から派遣されて生きる共同体です。教会と共に歩むとは、その召集と派遣のいのちのリズムに乗って歩む道です。

主イエスは、72人の弟子達を神の国の福音の伝道へと派遣されました。派遣された彼らは、自ら伝道の主の御名の権威に圧倒され、偉大な力を行使できたことを喜びました。そのとき主イエスは、むしろ福音に与かったこと、つまり天に自分の名が記されたことをこそ喜ぶようにと戒められます。同時に、主イエスは小さな者たちを御国の奉仕に派遣し、その実りを得させてくださった御父を心から賛美しました。

そのとき、律法学者たちはまなじりを決し主イエスに議論を挑みます。主は、善きサマリア人のたとえをもって、御言葉を実践することこそ神の掟にかなうことであることを示されました。

この文脈の中で、主イエスは、マルタとマリアの物語を通して、教会と共に生きる一つの具体例を示されました。それは、教会に仕え、そのようにして世界の隅々で神に仕えて歩むことです。

1. マルタとマリアはどのような人でしょうか。
姉妹。姉がマルタ。二人ともイエスさまが大好き。主の役に立ちたいと家を解放していた。
2. マリアとマルタの家の中でイエスさまは何をしていましたか。
家の中で大勢の弟子たちに聖書のお話し、福音を説教していました。
3. マリアとマルタは家の中で何をしていましたか。
マリアは説教するイエスさまのお話しに耳を傾け、マルタは食事等の準備をしていた。
4. マルタはなぜ、カンカンに怒ってしまったのですか。
イエスさまがマリアに手伝うように注意してくださらなかったから。
5. あなただったら、このとき、マルタのようにしますか、マリアのようにしますか？
6. イエスさまは、なぜ、マルタを叱られたのでしょうか。
イエスさまはここで説教をしておられます。説教者は、聴いてくれることこそ願っています。
7. イエスさまは、マルタのことが嫌いなのでしょうか？
大好きだからこそ、叱って下さったのです。
8. 人が生きる時、教会生活をする時、これがなければ何も始まらないというほど必要なことは何？
御言葉に聴くこと、つまり、神からの恵み、力を受けることです。

6月7日 ルカによる福音書10章38～42節

【分級展開例C】

「教会と共に歩む道・派遣されて生きる」

グレードB、序文参照のこと。

1. マルタとマリアはどのような人でしょうか。
2. マリアとマルタの家の中でイエスさまは何をしていましたか。
3. マリアとマルタは家の中で何をしていましたか。
4. マルタはなぜ、カンカンに怒ってしまったのですか。
 - ・マルタもマリアもイエスさまと弟子たちを自分の家にお招きしている。イエスさまの救いに与かっている。主のお働きに自分たちも奉仕できる幸いと喜びにあふれている。自分の家に大勢の人たちが集うとき、客人をもてなすことは、人間としても、聖書の教えに生きるものとしても当然すぎる事である。猫の手も借りたいそのときに、妹は何もしない。妹に対する怒りが根本にある。
 - ・同時に、深刻なのは、イエスさまがそのようなマリアに手伝うように注意してくださらなかったから。そこに妹と自分とイエスさまとの関係を省みると、イエスさまはマリアを「ひいき」なさるのではとの思い煩いも生じたのではないか。
 - ・自分に対するイエスさまの愛を見失うとき、このようなありえないふるまいをしてしまうのではないか。マルタはこの集会の下支えをしようとしたにもかかわらず、実際にはぶち壊してしまう。
 - ・マルタはイエスさまに甘えられる関係にあるのではないか。マルタは、あまりに純粹。感情の爆発を隠さない。神の家族だから。受容される中で、マルタも変えられて行くであろう。
5. あなただったら、このとき、マルタのようにしますか、マリアのようにしますか？
6. イエスさまは、なぜ、マルタを叱られたのでしょうか。

主イエスは、ここで神の国の教えを説教している。説教を聴くことこそ、この時の主イエスに対する最善の対応（もてなし）ではないか。しかも、それによってマリアもマルタも、ふさわしい奉仕者として整えられる。受ける奉仕なくして、施す奉仕は成り立たない。
7. 教会（信仰）生活にとって、必要なことは「一つだけ」なのではないでしょうか？

いいえ。食事の奉仕も、とても重要で不可欠な奉仕です。ただし、教会生活はイエスさまのみ心が最初であり最後、イエスさまがすべてのすべてです。今、主イエスがなさっておられること、そのこと一つに焦点を合わせることにこそ主イエスとの生きた関係です。今ここで！ の究極の判断をふさわしく、つまり「ただ一つ」と選択できる事こそ大人の信仰者であろう。

6月14日 ルカによる福音書15章25節～32節

【解説と黙想】

「感謝しつつ歩む道・愛に生きる」

主イエスは三つのたとえを通して、「父なる神の愛」という、共通した主題を教えている。「放蕩息子」のたとえには、二人の息子の姿を通して、「神から離れる罪」が現れているが、自分の罪に苦しむ息子の姿と、息子たちに示される父の愛が教えられている。

たとえの後半部は、父親と兄息子の会話に焦点があてられる。いつもの仕事から父の家に帰った兄息子は、心から軽蔑する弟息子の帰郷を祝う、宴会の物音を聞く。兄息子は、「あなたのあの息子(30節)」と言って、弟息子を心から軽蔑し、父の喜びの宴に加わることを頑なに拒み、喜びの交わりの外で、帰郷した弟息子のことを喜ぶことが出来ずにいる。父親はその兄息子を放っておくことはせず、宴会の席を中座して、自ら兄息子を宥めて迎えに行く。宴会の主催者が中座することは、宴会の礼儀に反することである。それでも父親は、喜びを分かち合おうと、憤る兄息子を宥めようとする。しかし兄息子は、父親の愛の導きに感謝するどころか、愛を無視した不平不満を父親に突きつける。

兄息子は、父と共に生きているゆえに、父の持つ全ての物を持っている。既に父の祝福、守りの中にいる最も大きな恵みにあった。それにも関わらず、兄息子もまた、父からの愛と恵みを拒み、不平と不満の中に生きていた。父からの愛と恵みを拒む点において、兄息子もまた、父と共に生きる喜びから離れていたのである。父親は兄息

子に注がれている愛と恵みに気付かせ、愛に生きる道へと導こうとしている。父なる神の愛は、喜びの宴に加わろうとしない、兄息子のような人々にも、注がれ続けているのである。

兄息子の態度には、罪人が主なる神のもとに帰ることを喜ぶことの出来ない、ファリサイ派の人々の姿が表されている。ウェストミンスター問5は、主なる神がただお一人であり、そのお方が生きた、真実の神であることを教える。しかし歴史を通して、イスラエルの民は、ただ一人の、この生きる真実の神を知りながら、他にはいない、父なる神を拒み、罪を重ね続けてきた。それにも関わらず、愛である神は、ご自分の民を諦めることはされない。たとえ愛を拒み続ける民であっても、ご自分の独り子を与えるほどに、世を愛されたのである(ヨハネによる福音書3章16節)。

私たちの教会生活の中でも、すれ違いと互いに受け入れられない試みを経験することある。ひとたび愛の一致が試みられるとき、私たちはキリストの愛を知りながらも、受け入れあうことが困難なことがある。

しかし父なる神は、私たちに愛を注ぎ続けておられる。父なる神は、御言葉を通して、わたしたちに注がれている愛と恵みに気付かせようとされる。私たちの生活全てを通して、感謝しつつ、愛に生きる道へ導こうと、私たちに問いかけている。「私の愛する者が、私の元に帰ってきたのだ。喜ぶのは当然ではないか」と。(長谷部真)

《参照聖句》 申命記6章4節、詩編34編18,19節、ローマの信徒への手紙6章13節

《教理問答》 ウェストミンスター小教理問答 問5、ハイデルベルク信仰問答 問86

6月14日 ルカによる福音書 15章25節～37節

【説教展開例】

「感謝しつつ歩む道・愛に生きる」

◇----- 単元のねらい -----◇

主イエスが語られた、「放蕩息子」のたとえ話に登場する兄息子は、父の恵みの中にいるにも関わらず、父を軽蔑して離れていった弟息子が帰って来ると、喜ぶことが出来ずにいた。神と隣人を愛する、人間本来の喜びの姿からかけ離れた姿が、「放蕩息子」の兄には示されている。私たちもまた、既に神の恵みの内にいるにも関わらず、感謝するどころか、父なる神のもとにありながら、感謝することなく、愛に欠けた関係に陥ることがある。しかし、兄息子を優しく宥める父親のように、父なる神は、愛と感謝に欠けた私たちに対して、愛に生きる道へと招いていることを知る。

「愛の内に生きる喜びへと導かれている」

皆さんは、親しい人と喧嘩をしたことはありますか？「あの人は赦せない、受け入れることは出来ない」と感じたことはありますか？ 学校のお友達や、お父さんお母さん、兄弟で喧嘩をすると、「口も聞きたくない！」「あいつが謝るのが先だ！」「同じ空気を吸うのもイヤだ！」「一緒にいたくない！」「絶交だ！」と思って、相手を赦せない気持ち、拒む気持ちで心が満たされてしまうことがあります。赦せない気持ちで心がいっぱいになってしまうと、私たちは目の前にある喜びでさえも、受け入れられないことがあります。

今日の聖書の御言葉で、イエスさまは「放蕩息子」のたとえ話をされました。このお話には、「一緒にいたくない！」と弟を拒む兄息子が登場します。お父さんの財産の分け前を無礼な形で受け取った弟息子は、自分の思い通りにするために、父親の家を出て行ってしまいました。しかし財産を好き勝手に使い果たして、困り果てた弟息子は、悔い改めて使用人にしてもらおうと、父親の元に戻ります。しかし父親は弟息子を迎え入れ、喜びの宴会が開かれ、家中が喜びに満たされます。

しかし、その宴会を喜ばない人が登場します。兄息子です。兄息子は、弟息子が家を離れてからも、父親の言いつけを守って、厳しい仕事であっても父親のために、家のために真面目に働いていました。しかし兄息子が畑仕事から帰ると、宴会の音が聞こえてきます。聞けば、あの弟息子が帰ってきたことを喜ぶ宴会ではありませんか。兄息子は怒ります。「僕は、あんなやつのために開かれた宴会なんか行きたくない！顔も見たくない！」兄息子は父親の喜びの宴に加わりたくしません。

このことを聞いた父親は、宴会を抜け出して、兄息子のもとへ向かいました。宴会の途中で主催者が抜け出すのは、非常識なことでした。父親は兄息子を放っておくことも出来ました。それでも父親は失礼を承知で、兄息子のもとへ向かったのは、兄息子も一緒に喜んでほしかったからです。しかし、弟息子に対する怒りと恨み辛みは、父親にぶつけられます。兄息子は「わたしは真面目にお父さんのために働いてきましたが、宴会のために子山羊すらくれたことはありません。なのに、あなたの財産を食いつぶして帰ってきたあなたのあの息子のために、肥えた子牛で宴会をするなんて！

(29,30節)」。父親に向かって怒りと恨みをぶつけます。兄息子は、「あなたのあの息子」と言って、弟と自分の関係を拒絶します。兄息子の心は、弟と父親からの愛を拒絶する思いに満たされていました。

兄息子は、父親と一緒に暮らしていました。そして父親の言いつけを守って、真面目に生きていました。しかし兄息子の心は、満たされていませんでした。全てを与え、愛を注ぎ続けてくれる生きた父親と一緒に生きる喜びで満たされたのではなく、真面目に働いて、生きるために心を空洞にしていました。満たされない兄息子の心は、父親が弟息子の帰郷の祝宴を楽しむ姿を見て、父親から与えられる愛への感謝ではない、怒りや恨み、拒絶の思いに満たされます。この兄息子の姿は、ファリサイ派の人たちに似ていますね。わたしたちは、自分の力で真面目に生きようと、努力して心を無にすることがあります。しかし自分の力で心を整えようとすると、別の思いが入る隙間になることがあります。

わたしたちは、たとえ親しい友だち同士であっても、教会の中であっても、時には思いがすれ違い、喧嘩や仲違いをして、「一緒にいたくない!」「同じ場所にいたくない!」と、相手を赦すことが出来ず、拒んでしまうことがあります。そんな時、私たちの心は、この兄息子と同じように、愛とは真逆の思いに満たされます。

しかし、弟息子と、弟息子を受愛する父親を受け入れることが出来ない兄息子に対して、父親は怒って叱りつけることはしませんでした。父親は兄息子に優しく宥めます。「わたしの子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つ

かったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか (31,32節)」。イエスキリストの父とは、この兄息子への問いかけで終わっています。父親は、愛を拒絶する兄息子を諦めて関係を絶つことはしません。むしろ、弟との関係を取り戻し、共に喜ぶ交わりへと導こうとしているのです。これがただ一人の生ける父なる神さまの愛です。

歴史を通して、救われて神の民となったイスラエルの民はただ一人の、生きる真実の神を知りながら、父なる神さまの愛を拒み、罪を重ね続けてきました。それにも関わらず、愛である神は、ご自分の民を諦めることはなさいませんでした。たとえ愛を拒み続ける民であっても、ご自分の独り子であるイエスキリストをわたしたちに与えるほどに、愛されたのです (ヨハネによる福音書 3 章16節)。

神さまがわたしたちにどれだけ愛と恵みを注ぎ続けてくださっているのかを知るとき、わたしたちの心は喜びで満たされます。わたしたちは、たとえ身近な人であっても、親しい人であっても、小さなことですれ違い、喧嘩をして、お互いに受け入れあうことが難しくなることがあります。しかしそれは、私たちが神さまから注がれた愛でないもので心が満たされているサインです。

相手を受け入れられない思いになったとき、祈ってみてください。それは、父なる神さまが注いで下さる愛に気づく機会です。父なる神さまはいつも問いかけておられます。「わたしの愛する者が、私のもとに帰ってきたのだ。喜ぶのは当然ではないか」。神さまが注ぎ続けてくださっている愛に、与え続けてくださっている恵みに感謝しながら、愛のうちに歩いていきましょう。(長谷部真)

《今週の暗唱聖句》

「子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか」 (ルカによる福音書 15 章 31、32 節)

6月14日 ルカによる福音書 15章25節～37節

【分級展開例A】

愛のころとは

〈お話のポイント〉

“善いサマリア人”のたとえの話の中で、子どもと親のカテキズム問5との関わりで、A（幼稚科）の子どもたちに知ってほしいことは、愛するという気持ちがどういうものか、ということである。気の毒な人、可哀そうな人に、どこまで手を差し伸べて助けるという実践をすべきか、できるか、ということではなく、「その人を見て憐れに思」うか、ということが大切な点である。子どもたちに愛の心が芽生えるように、また育まれるように、わずかな心の動きも見逃すことなく、褒めること、矯めること、励ますことを意識的に言葉にして伝えたい。

〈分級で用いるしつもの例〉

しつもん1

あなたは、大切にしているもの（おもちゃ、えほん、ぬいぐるみ、大切なひとからもらったもの、など）を失くしてしまったら、どんな気持ちになりますか？

しつもん2

飼っていたペットが死んで、おともだちはとても悲しんでいるとしたら、それはどんな悲しみでしょうか？ 悲しんでいるともだちを、あなたはどう思いますか？

しつもん3

イエスさまは、わたしたちを救うために、十字架にかかって死なれました。どんなお気持ちで十字架にかかれたでしょう？ そんなイエスさまを、あなたはどう思いますか？

6月14日 ルカによる福音書 15章25節～37節

【分級展開例B】

「感謝しつつ歩む道・愛に生きる」

放蕩息子のたとえは、弟の物語と兄の物語とが結び合わされて一つの強烈なたとえを構成します。弟ばかりか兄もまた父との関係において失われていたのです。兄こそは、主イエスが招かれ共に食事をしていた徴税人や罪人たちを見下し、主イエスを非難したファリサイ派や律法学者たちのことです。主イエスは、弟はもとより兄をも憐れまれます。そして兄も弟も共にご自身の食卓につき、祝うようにと招いて下さいます。このような愛に生きる交わりを築くことこそ、感謝に生きる生の究極の目標です。

1. 弟は、お父さんに対してどんなことをしましたか？

自分が一番、したかった、楽しいことを行います。ところが、ぼろぼろになってしまいました。そこで、お父さんの家でいのちをつながせてもらおうと試みます。

2. そんな弟に対して、お父さんはどうしましたか？

憐れに思っつけかけより、大喜びの中で大宴会を催します。生きて帰って来ただけで嬉しいのです。そればかりか、自分のした悪い事を自覚した弟のために改めてお金を使います。

3. 兄は、お父さんに対してどんなことをしましたか。

いつものように畑で働く、まじめな兄です。何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もないと言うほどです。

4. そんなすばらしい兄なのに、どうしてお父さんのすることにカンカンに怒っているの？

本当は、もともとお父さんとの関係がよくなかったのです。それは、自分に注がれている愛を疑う心があったからです。そのために弟ともよい関係になれなかったと思われます。

5. そんな兄に対して、お父さんはどうしましたか？

祝宴の責任者なのに、家の外に飛び出て、兄を説得します。父は、弟だけではなく兄のこともかわいくてしかたがないのです。父と子との愛の関係が成り立つとき、兄弟どうしの関係も成り立ちます。

6. 兄はこの後、どうなったと思いますか？ あなたが兄だったら、どうしますか？

この問いの中で、子どもたちの心に聖霊が働かれるようにと……。

7. 神さまは、なぜ、感謝することを求めておられるのですか？

神は、私たちが健康な信仰の歩み続けるために、常に、神がわたしに何をして下さったのかに目を注がせるように、こうして、感謝せざるを得ないようにと導かれます。

6月14日 ルカによる福音書 15章25節～37節

【分級展開例C】

「感謝しつつ歩む道・愛に生きる」

1. 弟は、お父さんに対してどんなことをしましたか？
 生きているお父さんに「遺産」を求めます。つまり、弟は父を心の中で殺しました。ただちに、自分が一番したかったことを行います。ところがかえって、自分のぼろぼろな姿をさらけ出すことになります。お父さんと共に生きる生活こそ、本当の人間らしい生き方だったことに気づきます。
2. そんな弟に対して、お父さんはどうしましたか？
 かわいそうとの激しい感情が溢れかけよります。息子が生きていたこと、戻ってきたことを大喜びし、したことのなかった大宴会を催します。なんの小言も言わず、嬉しさを爆発させ、放蕩の限りを尽くした弟のためになお金を用いる無尽蔵な憐み、赦し、恵みを施してしまう、それが父なる神なのです。
3. 兄は、お父さんに対してどんなことをしましたか。
 いつものように真面目に畑で働いています。お父さんにずっと仕えています。言いつけに背いたことは一度もない（ただし、言葉どおりに受け止めることはできないと思います。言い付けを守るとは、本来、親心を喜び、感謝し、うれし涙の中で守ることなのですから。）と言うほどです。
4. そんなすばらしい兄なのに、どうしてお父さんのすることにカンカンに怒っているの？
 おそらく兄は、弟とまたお父さんとも関係がよくなかったと思われます。弟のために開かれた宴会事件で表面に現れてしまいました。まじめな自分のことを、本当なら弟以上に可愛がってくれるのが当たり前だと思っていたのでしょう。それが正反対であつたと思い違いして、遂に切れてしまったのです。
5. そんな兄に対して、お父さんはどうしましたか？
 祝宴の責任者なのに家の外に飛び出て、家に入るようにと兄を説得します。父は、お兄さんのこともかわいくてしかたがない。父と和解させ、弟を兄弟として受け入れるようにと心を砕かれるのです。
6. このお兄さんは、その後、どうしたと思いますか。それはなぜですか。あなたがお兄さんだったら？
 - ・怒ったまま。 → いよいよ、反発を募らせて、とうとう父親を殺してしまう。
 歴史においてなされた現実。十字架のイエスの予表。
 - ・家の中に入って行く。 → 自分の心の底にため込んでいた思いを父にぶつけることができ、お父さんの気持ちも分かった、つまり心と心が真に通い合えたから。そうじゃないと、このお話しはまとまらないと思うから。 父の心を知り、自分の心を打ち明けるために、お祈りすることが不可欠！

6月21日 マルコによる福音書1章35～39節

【解説と黙想】

感謝しつつ歩む道・祈りに生きる

○祈る主イエス

祈られる前、主イエスは人々のただ中で汚れた霊に取り憑かれた男を癒やし、多くの病人をいやすというめざましい働きをなされていました。その働きを休み、わざわざ人里から離れて祈られました。主イエスは地上のご生涯を歩まれているとき、しばしばこのような行動をなされました。その時間にも奇跡の業をなして宣教したほうが、より多くの人々を導くことができそうに感じてしまいます。それでも主イエスは、人々から離れて祈ることを必要とされました。この行動は、一見すると非効率です。それでもしばしば手を休めて神に祈ることが、救われた者の歩みには必要なのです。

○祈りとはなにか

祈りは、しばしば「神との対話」として説明されます。神はわたしたちを御自身との対話である祈りへと招かれます。神はわたしたちの祈るすべての言葉を聞いてくださいます。これは驚くべき恵みです。それと共に、祈りが対話である以上、祈る者から神への一方通行では成り立ちません。双方向の営みであるべきです。カルヴァンは祈りを、御父の内にあると教えられたものを請い求めることとして説明しています(キリスト教綱要3篇20章1節)。ですから祈りでは、自分の思いを神に申し述べるだけでなく、わたしたちの父である神がわたしたちに何を与えようとしておられるかを聞く姿勢が大切です。

神はわたしたちが願う前から、わたした

ちに必要なものをご存知です(マタイ6章8節)。ですから、祈りはわたしたちの願いを神に知ってもらうためにするものではありません。祈りの目的は、神との対話をとおして、わたしたちが実際の歩みの中で神からどのような恵みを与えられているを知り、感謝するためなのです。まず御言葉に聞き、そこで約束されている恵みを祈りによって請い求める。この繰り返しによってわたしたちの心は、神への感謝に導かれるのです。

○祈りが求められていることの意味

子どもと親のカテキズムの問5では、神がわたしたちに求めておられることが教えられています。それは身を粉にして働き、神に貢献することではありません。目の前の成果ばかりを求めて神に祈ることに無頓着であるならば、わたしたちはすぐに神の内にある恵みを忘れてしまいます。請い求めることなく与えられた恵みは、神から与えられた恵みではなく自分で勝ち取った当然の成果であるかのように誤解してしまうからです。だからこそ、神の子どもとされたわたしたちは、神の子どもらしく父なる神の内にある恵みを請い求め続けることが大切です。このことを、しばしば働きの手を休み、人里離れたところで祈っておられる神の御子主イエスの御姿から教えられます。祈りつつ歩むことによって、わたしたちは神への感謝とともに人生を歩むことが許されるのです。(三輪 誠)

《参照聖句》 マタイ7章7～12節、一テサロニケ5章16～18節

《教理問答》 ハイデルベルク信仰問答 問116～119

6月21日 マルコによる福音書1章35～39節

【説教展開例】

感謝しつつ歩む道・祈りに生きる

◇----- 単元のねらい -----◇

神さまに祈ることの大切さと恵みを知り、祈りをとおして日々父なる神さまから与えられている恵みに感謝することへと導かれる。

「祈りによって恵みを知る」

神さまがわたしたちに求めておられることはなんでしょうか。神さまのために自分のやりたいことを我慢して、一生懸命神さまにお仕えすることでしょうか。そうではありません。子どもと親のカテキズムの問5によれば、神さまがわたしたちに求めておられることは、祈りつつ歩むことだと教えられています。

神さまの御子であられるイエスさまも、祈りつつ歩まれました。今日見ているマルコによる福音書1章35節以下でも、イエスさまが祈られたことが記されています。ここでイエスさまは、人里離れたところへ出て行って祈っておられました。祈られる前、イエスさまは悪霊を追い出したり、人々を癒したりして、神さまのために一生懸命働いておられました。それはみんなが喜ぶ素晴らしい御業でした。その御業を休めて、わざわざ人々のいないところに行って、イエスさまは祈られたのです。それほどまでに祈ることは、大切なのです。どうしてこんなにも祈ることが大切なのでしょうか。なぜ神さまは、わたしたちに祈ることを求めておられるのでしょうか。考えてみましょう。

そもそも「祈り」とは何でしょうか。それは神さまとお話することです。神さまは、わたしたちとお話したいと望んでおられるのです。みんなが誰かとお話したいと思うときは、どんなときでしょうか。ど

んなときにお父さんやお母さん、お友だちとお話するでしょうか。それは自分の思っていることや考えていることを、相手に知ってほしいときです。相手に自分の思いを知って欲しくないならば、わざわざお話しする必要なんてないですよ。みんなが神さまにお祈りしたいと思うときがあるならば、それはきっと神さまに聞いてほしいことがあるときでしょう。

わたしたちは、毎日生活する中でいろんなことを経験します。おもしろいことも、つまらないことも、うれしいことも、うれしくないことも起こります。特に苦しいときや、かなえてほしいことがあるとき、神さまに聞いてほしいと思うのではありませんか。そんなときにわたしたちは、神さまにお祈りしたいと思うでしょう。神さまは、ぜひお祈りしてねと、わたしたちを招いてくださっています。そしてわたしたちの祈りの言葉を、神さまはすべて聞いてくださっています。神さまは、わたしたちのことを誰よりも知っていてくださるのです。

ここでみんなには、お祈りが神さまとお話することだということを、もう一度心に留めてほしいのです。もしわたしたちがお友だちとお話するときに、相手ばかり話していて自分の話を友だちが全然聞いてくれなかったらどうでしょう。それでは、そのお友だちとお話したことになりませんね。お互いに思っていることを話して、

お互いに相手の話を聞く。これができてはじめて「お話しした」ということができます。

神さまにお祈りするときも同じなのです。お祈りは神さまとお話することですから、わたしたちが思っていることを神さまに「お願いします、お願いします」と伝えるだけでは十分ではないのです。わたしたちも、神さまがどんなことをわたしたちに願われているのだらうと、神さまのお話を聞くことが大切なのです。神さまは、ご自身がどれほどわたしたちを愛しているか、わたしたちにわかって欲しいのです。だから神さまはみんながお祈りすることを望まれていますし、みんながお祈りすることを心待ちにしておられるのです。

神さまは、ただわたしたちがお祈りするのを待たれているだけではありません。まず神さまのほうから、聖書の御言葉をとおしてわたしたちに語りかけてくださっています。そこには、神さまがイエスさまを与えてくださったほどにわたしたちを愛しておられることや、神さまがわたしたちに必要なすべてのものを、恵みとして与えようとされていることが示されています。ここに示されている恵みを神さまの子どもであるわたしたちが祈り求めるとき、わたしたちの父である神さまは喜んでその恵みを与えてくださるのです。

ところで神さまは、なんでもご存知のお方です。ですから、実はわたしたちが祈り求める前から、わたしたちの必要なものをすべて分かっておられます。ならばわたしたちは、わざわざ神さまに祈る必要はないのでしょうか。そうではありません。わたしたちの必要をすべて分かっておられる神さまは、わたしたちが祈り求める言葉を聞いてから恵みを与えられることをお望みにされます。それは、わたしたちが神様か

ら与えられた恵みに感謝することができるようにするためなのです。

もしわたしたちが何もしなくても何不自由なく必要なものがすべて与えられたらどうでしょうか。いつしか、それは与えられて当然だという思いになっていくでしょう。神さまから恵みとして与えられたものの、それを恵みと感ずることができなくなってしまう。それでは恵みを与えてくださった神さまに、感謝することができなくなってしまうのです。また今日のお話の最初で、神さまがわたしたちに求めておられることは、神さまのために自分のやりたいことを我慢して、一生懸命神さまにお仕えすることではないとお話しました。例えば、神さまに祈り求めることをせずに、みんなが一生懸命神さまのために頑張ったとしましょう。その後に自分の欲しかったものが手に入ったら、みんなはどう思いますか。「自分が神さまのために頑張ったから、神さまは欲しかったものをくださったんだ」と思うでしょう。それはもう神さまから与えられた恵みではなく、神さまに一生懸命仕えたことに対する神さまからのお礼として受け取っているということです。恵みとして与えられているはずのものを、もらえて当然のように思ってしまうのです。でも実際にはそうではありません。わたしたちが与えられているすべてのものは、もらえて当然のものではなく、神さまから恵みとして与えられているものなのです。わたしたちは神さまに祈り求めることによって、神さまから与えられた恵みを、ちゃんと神さまの恵みとして受け取ることができるのです。このことをとおして、わたしたちの幸せを誰よりも願っておられる父なる神さまに対して、神さまの子どもであるわたしたちは心から感謝しながら歩み続けることができるのです。（三輪 誠）

《今週の暗唱聖句》

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。

（テサロニケの信徒への手紙一6章16～18節）

6月21日 マルコによる福音書1章35～39節

【分級展開例A】

子どもたちが祈る祈り

〈お話のポイント〉

“祈り”については、子どもと親のカテキズム問84以降、主の祈りを入れて最後問97問までを、『祈りに生きる道』としての問答がある。問5後半にある「祈りつつ歩む」は、問5前半の神と隣人を愛し、神の被造物を大切にする心、その心の源泉を自らに持つことの無い罪の人間にとって、再生した心からの祈りをもって、愛の根源である神に尽きない愛をいただくことができるように、乞い願う“祈り”は必要不可欠であることを教えている。

カファルナウムの町中の人たちが、イエスのもとに押し寄せ、病の癒しと悪霊の追放を主イエスにしてもらおうと群がった。そのようなことが続く中、イエスは「朝早く位うちに、……人里離れた所へ出て行き、そこで祈」られた。明らかにご自身の本来の使命である「宣教」を、再認識するための祈りであり、宣教のために力を注ぐという方向に心を軌道修正するための祈りである。

〈分級で用いるしつもの例〉

しつもん1

あなたは、祈りをすることがありますか？ まだ祈ったことの無い人は、祈ることを考えてみましょう。

しつもん2

どんなことを祈りますか？ どんなことを祈ることができるでしょう？

お祈りのかだい1

かぞく（両親、兄弟姉妹など）やお友だちを、もっと愛する心（気持ち）が持てるようにお祈りしてみましょう。ことばにしてみましょう。

お祈りのかだい2

ようちえん、ほいくえんの先生や、きょうかいの先生たちのために、祈ってみましょう。あなたなら、どんな祈りをしますか？

6月21日 マルコによる福音書1章35～39節

【分級展開例B】

感謝しつつ歩む道・祈りに生きる

主イエスほど行動的な生涯を生き抜かれた方はおられません。悲しむ者、苦しむ者、不安や孤独に心がしぼんでいる者たちのところに出向き、神の国の到来を現されたのです。最後はご自分のお命まで私どものために捧げられました。しかし、それは決して「行動主義」的ではありません。主イエスは祈りの人でした。常に、父なる神により頼み、み心を尋ね、共に生きようと深く静まる時を設けられました。主の祈りに生きるお姿の中に、キリスト者の生の力、あるべき姿が示されています。祈りによって、すべてを神の栄光に帰しながら、神の恵みのみに頼る生き方を示されたのです。祈りこそ、神への「感謝そのもの」であり、また、すべての行動、生活、生き方が「感謝となるため」の筋道があります。

1. あなたはお祈りしていますか？

はい。 → すばらしい！（ほめてほめて、ほめまくりましょう！ 聖霊の神さまが、あなたにお祈りができるようにと働いていて下さるから、先生は、嬉しのだよと。）「天のお父さま、アーメン」これだけでも立派なお祈りだね！お父さまと呼ぶだけでもすばらしいね！と。

いいえ。 → 一人では、自分でお祈りできなくても、教会で、お家で、「アーメン」と言っていないですか？ だったら、いいえではなく、はいで良いのです。すでにお祈りの空気を吸っています。それは、聖霊のお働きにあずかっていること。だから、すごいのだと、感動を伝えましょう。そして、自分でも声に出して祈るように励ましましょう。

→ そうなのだね。だったら、今日、ここで、いっしょにお祈りしちゃう。先生がお祈りするので、くっついてお祈りしてね。「天のお父さま～。〇〇〇〇」「わたしは、初めて神さまにお祈りします。〇〇〇〇〇〇」「わたしが神さまを信じることができるようになってください〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇イエスさまの御名前によって、アーメン。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、アーメン」

2. どんなお祈りをしていますか？何をお願いしていますか？

私たちはイエスさまのおかげで神さまの子どもです。ですから、子どもらしく何でも御願いしてよいのです。励まして下さい。信仰を与えられて受洗後間もないとき、何でも祈れ素直に受けとめた筆者は、トイレの自販機からティッシュが出てこなかったとき祈った。もう一度、ガチャンとひねったとき出てきた。今も、忘れられない。子どもたちの素朴な祈りを神さまが無視することがあるでしょうか。

3. なぜ、お祈りしなければならないのですか？

お祈りは、神さまとお話すること。神さまと仲良くなるためには絶対に必要な方法。しかも、神さまが与えて下さった方法。祈りの恵みに教師が心底、驚くことなしに、祈りを教え、導くことは困難。お祈りは恵み、お祈りは賜物、お祈りは特権、お祈りは「しなければ……」ではない。共に祈ろう。

6月21日 マルコによる福音書1章35～39節

【分級展開例C】

感謝しつつ歩む道・祈りに生きる

Bの序文参照のこと。

1. イエスさまの生活はどのようなものだったのでしょうか？

マルコ第1章21～31節参照。主イエスは休む間もなく、多くの病人を癒されていました。

2. イエスさまは、なぜ、朝早くまだ暗い内に起きて、ひとりでお祈りされるのですか？
人々を癒し、助けると言う神の国のお働きは大切です。しかしそれは、ただ人を喜ばせ、助けるためのものではありません。神の御心を行うためのものです。お祈りは、神さまからのお力を受け、御心に従うための最強の方法なのです。

3. イエスさまがお祈りを終えたとき、なにか変化がありましたか？

はい。元気を取り戻し、信仰の確信に立ってお働きを続けます。祈りは信仰の原点、力の源なのです。

4. あなたはお祈りしていますか？

はい。 → すばらしい！（ほめまくりましょう！同時に、聖霊の神さまがあなたに働いていて下さるからだ、それがすばらしく、嬉しいのだよ。）

いいえ。 → 教会やお家で、「アーメン」と言っていないですか？その人は、はいで良いのです。すでにお祈りの空気（聖霊）を吸っています。上述のようにこの感動を伝えましょう。そして、自分でも声に出して祈るように励ましましょう。

5. どんなお祈りをしていますか？

神の子どもらしく何でも御願いしてよいのです。励まして下さい。同時に、「モノ」「デキゴト」よりも「神の愛」「神の力」を「信じることができるようにしてください」と祈るように導きたい。

6. なぜ、お祈りしなければならないのですか？

お祈りは、神さまとお話すること。神さまからのお話を聴くことから始まります。神さまに一方的に、話しかけて終わってしまうのであれば、あまりにも残念です。神は、祈りの手段を与えて、神の善きご意志、ご愛に気づかせようと熱心に求めておられます。神さまのその大きな、深い愛の心が分かるとき、神さまは大喜び、私たちも喜びが湧いてきます。これがお祈りの醍醐味です。

7. 神さまは、なぜ、感謝することを求めておられるのですか？

神は、私たちが健康な信仰の歩みをするために、常に、神がわたしに何をしてくださったのかに目を注がせようと導かれます。その結果、感謝せざるを得ないようにと促して下さいます。

6月28日 ペトロの手紙二1章16～21節

解説と黙想

「道の光としての聖書・御言葉」

○カテキズムの解説

『子どもと親のカテキズム』は序論「はじめに」で「神さまと共に歩む道」を教えている。問1で、私たちにとって一番大切なことは「神さまの子どもとして、神さまと共に歩むことです」と教え、問2で、神さまと共に歩むとは「まことの神さまを知り、……神さまと人に仕えて歩むことです」と教えた。

第一部「信じて歩む道」に入り、まず問6は、私たちにとって大切な「神さまと共に歩む」こと、そして何よりも神さまのことを私たちは何によって知ることができるのかを教える。

○聖書がなくても神さまがわかる？

「世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます」（ロマ1：20）。

多くの人が、被造物に現れる創造的力のうちに神の存在を感じることがあるのではないだろうか。大自然の中に身を置くとときや満天の星を見る時などに、人間の存在を超えた圧倒的な力を感じることがある。生物学者ファーブルは昆虫の足をじっと観察しながら「わたしは神の御業を見ているのだ」と語った。虫の足があまりにも緻密に造られているのを見れば見るほど、そこに神の御手のわざを認めた。

このように私たちは被造物のうちに神の存在を知ることができる。しかし、私たちが「神さまの子どもとして」「神さまと共に歩む」ために知らねばならない神さまの御心・愛・恵み・赦しなどを、被造物の存在から読み取ることは困難である。私たちが被造物のうちに神についての真理を知ることができないのは、罪に墮落し「心が鈍

く暗くなったからです」（ロマ1：21）。

したがって、罪に墮落し心が鈍く暗くなった私たちが神さまを知り、救われて、神さまの子どもとされ、神さまと共に歩むことのためには、神さまの言葉である聖書が絶対的に必要である。

○御言葉の解説と黙想

16～18節でペトロは「主イエスの変貌の出来事」を語る。「わたしたちは、キリストの威光を目撃したのです」（16節）。「わたしたちは、聖なる山にイエスといたとき、天から響いてきたこの声を聞いたのです」（18節）。「わたしたち」とは、ヤコブとヨハネも一緒にいたことを表している。彼らはキリストの栄光を直接目撃し、天から響く父なる神の御声を直接耳で聞いた。（マルコ9、マタイ17、ルカ9）

律法を代表するモーセと預言者を代表するエリヤが聖なる山でキリストとともにいた「変貌の出来事」を証して、「こうして、わたしたちには、預言の言葉はいつそう確かなものとなっています」（19節）とペトロは語る。

モーセもエリヤも神のことばを民に伝えた預言者である。律法も預言者もやがて来るキリストを指し示す神のことばである。その意味で旧約を代表するモーセとエリヤが主イエスとともにいるこの場面は旧約の部分的な成就と見ることができる。

「預言の言葉」「聖書の言葉」は決して誰か人間の意志に基づいて自分勝手に語られた言葉ではない。著者として選ばれた人々が、聖霊に導かれて神からの言葉を語ったものである。それゆえに、私たちにとって「暗い所に輝くとし火」である。

（小橋口貴人）

6月28日 ペトロの手紙二1章16～21節

【説教展開例】

「道の光としての聖書・御言葉」

◇..... 単元のねらい◇

子どもと親のカテキズム問1から問5では「神さまの子ども」として「神さまと共に」歩む大切さが教えられた。神さまの子どもとして生きるためにも、神さまと共に歩むためにも、この「神さま」がどういうお方であるかを知らなければならない。そして神さまと共に歩む道がどのような道であるかを知らなければならない。カテキズム問6は、それは「神さまの言葉である聖書によって」知ることができると教える。神さまと神さまの御心を知るためには、聖書が絶対的に必要であることを子どもたちに教えたい。

「聖書～神さまからの手紙～」

神さまはどういうお方？

みんなの中で多くの方がお父さんやお母さんと一緒に暮らしていると思います。一緒に暮らしていれば、みなさんは自分の親のことをよく知っていますよね。友だちと遊んでいてすっかり時間を忘れて夜7時を過ぎてしまった。帰ったらお父さんお母さんがどういふ反応をするか、大体わかりますよね。学校の算数のテストで90点とれた！ お母さんはほめてくれないだろうけど、お父さんに見せたら喜んでくれるな、とか。何をしたらお父さんお母さんは喜んで、何をしたら怒るのか。一緒に暮らしていれば親のことが分かってきます。

4月に入ってから、ずっと神さまの子どもとして、神さまと一緒に生きていきたいと思いますということを学んでいます。みなさんが神さまの子どもで、神さまと一緒に生きているなら、神さまのことがわかってくるはずですね。みんなにとって、神さまってどういうお方ですか？ 神さまのイメージはどうですか。おもしろいお方？ こわいお方？ やさしい？ どうでしょうか。

お父さんお母さんは目に見えるし、会話もできます。だからよくわかる。でも神さまは目に見えないし、実際に声が聞こえて一緒におしゃべりできるわけではありません。だから神さまってどういうお方です

か？ と聞かれても、パッと答えられないかもしれませんね。目に見えない、親と話すようにはおしゃべりもできない神さまのことがどうしたらわかるのでしょうか。

そのことを教えているのが、今日のカテキズムです。問6「まことの神さまを知り、神さまと共に歩む道は何によってわかりますか」。答え「神さまの言葉である聖書によってです。御言葉は私たちの道の光です」。

聖書がなくても神さまのことがわかる？

神さまのことがどうしたらわかると教えられていますか？ 答えは「神さまの言葉である聖書によってわかる」ということです。聖書を読まなければ、私たちは神さまのことをよく知ることができないよと教えています。

みなさんと一緒に考えてみたいと思います。聖書がなくては、私たちは神さまのことがわからないのでしょうか？ 聖書がなくても神さまのことわかるんじゃないかなあと思うお友だちはいますか？

パウロがローマの人たちに書いた手紙の中でこんなことを書いています。「世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができ

ます」(ローマ1:20)。難しい言葉がたくさんありますけれども、私たちは神さまがお造りになった世界を見れば神さまを知ることができるということを言っています。創世記の1章を見れば、全てのものは神さまがお造りになったものです。つまり、この世界にあるものはすべて神さまの作品です。山も海も川も木もお花も動物たちも私たち一人ひとりも、すべて神さまの作品です。その作品を見れば、それらを造ったお方のことが分かるということです。

確かに、夜空に輝く満天の星を見たり、美しい色をした鳥を見たり、きれいに咲く花を見たりすると、これを造った神さまはなんと素晴らしいのだろーと感ぜるときがあります。神さまの作品の一つ一つが神さまの栄光を表しているなあとわかります。生物学者のファールも昆虫の足をじーっと観察しながら「わたしは神の御業を見ているのだ」と言ったそうですよ。こんなに細かくきれいに昆虫の足や羽まで造る神さまは何と素晴らしいお方なんだろうかと感動したんですね。

そういう意味では、神さまの作品(被造物)を見た時に神さまの素晴らしさがわかります。でも、神さまは何を喜ばれ何を悲しまれるお方なのか。神さまは私たちのことをどう思っておられるのか。神さまは私たちのために何をしてくださったのかなど……。私たちが神さまの子どもとして一緒に生きていくために知らなければならぬ多くのことは、やっぱりこの神さまの造られた世界のあれこれを見ただけではわからないんですね。

だから、今日はこのことをしっかりと覚えてほしいんです。私たちが神さまのことを十分に知るためには聖書が絶対的に必要だということです。

聖書～神さまからの手紙～

聖書は神さまがわたしたち一人ひとりにあてて書いてくれたお手紙です。では神さまはどのようにこの手紙を書いたのでしょうか。実は、神さまはたくさんの人たちを用いてこの手紙を書かせました。モーセやダビデやパウロやペトロ、ヨハネという人たちに書いてもらったんですね。人々にわかる言葉で。

でも、これらの人たちは決して自分勝手に書いたのではありません。「なぜなら、預言は、決して人間の意志に基づいて語られたのではなく、人々が聖霊に導かれて神からの言葉を語ったものだからです」(2ペトロ1:21)。聖書を書く人に選ばれた人たちは、聖霊に導かれて神さまからの言葉を書き記しました。つまり、聖書を書いたパウロやペトロたちは、自分の考えを書こうと思って書いたのではないのです。神さまのことを知ってほしい。神さまの思いを知ってほしいと思って、聖霊の神さまに助けられ導かれて聖書を書きました。だから、聖書は神さまの言葉であり、神さまからのお手紙なのです。神さまが彼らを用いて聖書というお手紙を私たちに書き記したのです。

神さまはご自分のことをみんなに知ってほしくてこの手紙を書きました。だから聖書を読むと、神さまが私たちのために何をしてくださったのか。神さまは私たちをどう思っていて、どう生きてほしいのかが分かってきます。

私たちは神さまの子どもです。そして神さまと一緒に生きていきます。日々、お父さんお母さんと会話しながら一緒に生きていくように、聖書を通して神さまの言葉を聞きながら、神さまと出会いながら生きていきましょう。(小橋口貴人)

《今週の暗唱聖句》

「あなたの御言葉は、わたしの道の光 わたしの歩みを照らす灯」

(詩編119編105節)

6月28日 ペトロの手紙二1章16～21節

【分級展開例A】

聖書・神のみことば

〈お話のポイント〉

神はご意思を伝えるために、預言者をお立てになられ、預言者を用いて語られた。その言葉は、預言者の「人間の意志に基づいて語られたのではなく、人々（預言者たち）が聖霊に導かれて神からの言葉を語った」。だから、聖書の預言の言葉は、神の御言葉である。

〈分級ゲームの例〉

〔準備〕：

聖書（旧約39巻、新約27巻）の各巻の名前を、子どもたちに書かせる。筆記用具は

何を用いてもよい。書くのは、小石、折り紙、など。

旧約だけでも、新約だけでも、子供たちの人数や、制限のある時間に合わせる。

〔遊び方〕：

①66枚（個）をばらばらにおいて、教師が聖書の順番通りに巻名を声に出して言う。66のうちからその言われた巻を見つけて、聖書の順序通りに並べてさせる。

②すでに聖書の順番を、歌で覚えているなら、ばらばらにおいた小石あるいは折り紙片を、子どもたちに順序正しく並べさせる。

6月28日 ペトロの手紙二1章16～21節

【分級展開例B】

「道の光としての聖書・御言葉」

聖書は、神さまの子として歩み、神の教会と共に歩むために不可欠です。もとより小さな子どもたちに聖書を自分で読む習慣をつけさせることは至難です。また、分からないままに読ませて行くことは、かえって益にならない場合もあります。そもそも、聖書は、家でひとりで読むために編まれたものではありません。神の民が礼拝を捧げ、神の民としてつまり教会として生きるためのものなのです。したがって、聖書朗読と説教が、聖書に対する正しくふさわしい対応です。子どもたちのために聖書を語って聞かせ、その説き明かしとしての神の語りを、子どもたちの心のキャンバスに描くことこそ、私たちの究極の奉仕です。神からの語りかけを、自分のために浴びるほど聴いてもらえるように家庭と教会とで励みましょう。

1. 自分の聖書を持っていますか。

- ・はい → 契約の子。
カバンの中に入れっぱなしになっていませんか？ 暗唱聖句やその日に学んだ聖書の箇所を家で開いてみましょう！ 先ずは、聖書に触ることから始めると良いと思います。
- ・いいえ → 地域の子。（契約の子の可能性もあり）
何度か来たら、新約をプレゼントしますと約束し、励ましてみましょう。
新約しか見たことのない子には、聖書を見せて、いっしょに開いてみましょう。↑
新約も見たことのない子には、新約聖書だけでも十分です。

2. 聖書を書いたのは誰ですか？

マタイやマルコ、パウロやペトロたち、40人余の人たちがそれぞれの時代に書き残そう、書き送ろうと思って書かれた人間のことは、人間の書物の集まりです。しかし、聖書じしんが、「決して人間の意志に基づいて語られたのではなく、人々が聖霊に導かれて神からの言葉を語ったものだからです。」（Ⅱペトロ1：21）と告白しています。

3. 聖書を自分ひとりで読んだことはありますか？

- ・はい → すばらしい。でも、わからないはず。それが当たり前だと励ましましょう。
- ・いいえ → 自分で読む本、読める本だとは思っていない。それで良いと励ましましょう。そもそも、聖書は神さまからの愛の語りかけだから、お話をよくきくことこそ、大事ですよ、と。

4. 何故、聖書は私たちに必要なのでしょうか？

私たちは神さまのことが分からないまま生きるなら、暗闇の中を歩かされるようなものです。余りに危険です。怪我をし命を落とします。聖書は神さまとその御心を教えて下さり、私たちが転ばないように道を示し、その道を歩めるように照らして下さい。自分の聖書を持っている子らには、その聖書が特別の本で、いつか必ずそこから神さまの愛の語りかけを聴き取れるようになると励ましましょう。

6月28日 ペトロの手紙二1章16～21節

【分級展開例C】

「道の光としての聖書・御言葉」

B序文参照。

1. 聖書を自分ひとりで読んだことはありますか？

・はい → すばらしい。

・いいえ → 大人でも難しい。子どもたちが読んで理解できないのは、まったく当たり前なことだと強調してください。ただし、それ以上に「あなたのために」書かれた「神さまからの」唯一の手紙であることを強調して下さい。「神からの言葉を語ったものだからです。」(Ⅱペトロ1:21)

2. 聖書は最初から最後まで読まなければ、神さまのことは分かりませんか？

いいえ、大丈夫です、聖書の御言葉の一句でも、聴いて信じ、信じて行うなら、神さまのあなたに対する愛の手紙の意図は果たされます。聖書の一句を通してでも、神さまを知り、神さまを喜び、神さまの栄光をあらわすことができます。

3. それなら自分の好きな一句だけ、読めばよいのでしょうか。

そうとも言えます。小学生や中学生なら好きな箇所を読むだけでも大丈夫です。ただし、それだけでは満足できなくなる時が必ず来ます。カテキズムをちゃんと学んだ人なら、もう、聖書通読に挑戦できる力が着いて来るはずです。それまでは慌てずに聖書と仲良くなりましょう。

4. そもそも、聖書はひとりで読む本なのでしょうか？

違います。神は、聖書によってご自身の民を育てようとして私たちに与えて下さいました。(二テモ3:16, 17) 神の民がキリスト教会です。僕たち私たちは、教会を構成するひとり一人です。聖書は、みんなで集まって、つまり礼拝式の中で聴くためのものです。神さまは、聖書の文字のなかにはいらっしやいません。文字を通して語られる御声、つまり、聖書の「朗読」とその「説教」によって、私たちに働きかけ、届いて下さいます。だから、教会でいっしょに読んで行きます。そして、そのふさわしい準備と実践のためにこそ、家で、ひとりで聖書から神さまの御声を聴く必要があるのです。神といっしょに歩むためには、聖書は絶対に必要です。共に読み、ひとりで読む。この相互関係、命のリズムが教会とキリスト者を神の人として整えるのです。

5. 神からの愛の手紙は返信することを求めておられますか？

そうです。その人の人生そのものが、神への返信となります。御言葉を聴くのは、自分という用紙に神のことばを書きこんでいただくためです。もし、読みにくい字や落書きでびっしりだったら？ この手紙を読んでもらうべき相手(隣人)には、さっぱり分かりません。だからちゃんと聴くのです。人を動かすのは感謝でした。読む極意は、神さまに感謝できますようにと祈りつつ読むところにあります。

4月5日 くらやみ お 暗闇に追いつかれないよう に、光のあるうちに歩きな さい。【ヨハネ12:35】 	4月12日 「あなたは、わたしに従いな さい」 【ヨハネ21:22】 	4月19日 アブラハムとその子孫に対し て約束が告げられましたが、 その際、多くの人を指して 「子孫たちとに」とは言われ ず、一人の人を指して「あな たの子孫とに」と言われてい ます。この「子孫」とは、キ リストのことです。 【ガラテヤ3:16】
4月26日 あなたがたは食べるにしろ飲 むにしろ、何をするにしても、 すべて神の栄光を現すために しなさい。 【1 コリント10:31】 	5月3日 御言葉を宣べ伝えなさい。折 が良くて悪くても励みなさ い。 【2 テモテ4:2】 	5月10日 主イエスを信じなさい。そう すれば、あなたも家族も救わ れます。【使徒言行録16:31】 
5月17日 まだ遠く離れていたのに、父 親は息子を見つけて、隣れに 思い、走り寄って首を抱き、 接吻した。【ルカ15:20】 	5月24日 彼らは、使徒の教え、相互の 交わり、パンを裂くこと、祈 ることに熱心であった。 【使徒言行録 2:42】 十 主イエス・キリストの恵み 神の愛 聖霊の交わりが あなたがた一同と共にあるように アーメン 	5月31日 悔い改めなさい。めいめい、 イエス・キリストの名によっ て洗礼を受け、罪を赦してい ただきなさい。そうすれば、 賜物として聖霊を受けます。 【使徒言行録 2:38】 

6月7日

イエスは、近寄^{ちかよ}って来て言^いわ
れた。「わたしは天^{てん}と地^ちの一^{いっ}
切^{さい}の権能^{けんのう}を授^{さず}かっている。」

【マタイ28:18】



6月14日

お前^{まえ}のあ^{おとうと}の弟^しは死^しんでいたの
に生^いき返^{かえ}った。いなくなっ
たの^みに見^みつかったのだ。祝^{しゅく}
宴^{えん}を開^{ひら}いて楽^{たの}しみ喜^{よろこ}ぶのは当^あ
たり前^{まえ}ではないか。

【ルカ15:32】



6月21日

絶^たえず祈^{いの}りなさい。

【1テサロニケ5:17】



6月28日

あなたの御^み言^{こと}葉^ばは、わたしの
道^{みち}の光^{ひかり}、わたしの歩^{あゆ}み^てを照^てら
す灯^{ともしび}。 【詩編119:105】



2020年7～8月カリキュラム（第77号）

—救済史に基づく2年サイクル 第1年—

月 日 教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
7 月 5 日	人生の光	問6	ウ小2-3
		ヨハネ4:43-54	詩編119:105
	生きておられる神は、聖書を通して今も具体的に導かれる。光の中を歩もう。		
7 月 12 日	聖書の内容	問7	—
		テモテ二3:15-17	テモテ二3:15, 16
	聖書は、神と信仰生活について記された愛の手紙。福音的に読み、味わおう。		
7 月 19 日	三位一体の神さま 人格としての神	問8	—
		ヨハネ4:1-26	ヨハネ4:24
	神は人を対話の相手として創造された。神とお話する歩みを深めよう。		
7 月 26 日	三位一体の神さま 神の属性	問8	—
		ヨハネ4:1-26	ヘブライ13:8
	霊にして、永遠、不変、偏在の生ける唯一の神なくして被造物なし。		
8 月 2 日	唯一の神	問9	ウ小5
		申命記4:32-40	申命記4:35
	まことの神はただおひとり。この神のみを神とする幸いを知ろう。		
8 月 9 日	偶像礼拝の空しさ	問10	ウ小47, 48
		イザヤ44:9-20	レビ19:4
	偶像を求め、あふれる社会の中で、神の悲しみを思い、真の礼拝を求めよう。		
8 月 16 日	三位一体・神の本質	問11	—
		マタイ28:16-20	ヨハネ一4:16
	いのちと愛の交わりの内にいます三位の神と交わる至福を求めて生きよう。		
8 月 23 日	三位一体・神の経綸	問12	ウ告白8:6, 8
		エフェソ1:3-14	テモテ二1:9
	真の神が全存在をもって、人間を救われる。救いの神とその確かさをたたえよう。		
8 月 30 日	父なる神の本質	問13	子ども11、ウ大10, 11
		マタイ6:25-34	ヨハネ1:18
	キリストの父であるゆえに私たちの父となって下さった主権者をたたえよう。		
9 月 6 日	創造者なる神	問14	ウ小9、ウ大15、ハイデ26
		創世記1:1-5	コリント二4:6
	無から良いものを創造された神の恵みをたたえ、善きものらしく生きよう。		
9 月 13 日	摂理の神	問15	ウ小11、ハイデ27, 28
		エステル4:1-17	エステル4:14b
	歴史を創造し、支配する神のよき力を信頼し、へこたれず、安心して生きよう。		
9 月 20 日	父なる神の親心	問16	ウ小11、ハイデ1
		ヘブライ12:5-11	ローマ8:28, 30
	父なる神は、神の子のためにどんなことでも益に変えられる。神のみに頼ろう。		
9 月 27 日	人間・神のかたち	問17	ウ小10
		創世記1:26-28	詩編8:4, 5
	神のかたちに似せられた自分と他者の尊厳を知り、輝く人間、人生を求めよう。		

子どもと親のカテキズム

神さまと共に歩む道

日本キリスト改革派教会大会教育委員会

『子どもと親のカテキズム』の目指すもの ～「あとがき」より～

このカテキズムは、契約の子どもたちの信仰継承の前進、地域の子ども伝道の進展、成人求道者の洗礼教育、現代を生きるキリスト者の信仰の確立を願って、作成されました。

どうか父なる神が、ご自分の子どもたちをこのカテキズムを用いて主イエス・キリストの福音の真理の内に養ってくださり、聖霊の交わりのうちに親子の信仰の対話を祝福して信仰を告白する喜びに導き、教会と世界に感謝をもって仕える民として成長させてくださいますように。

カテキズム作成のために多大な労苦を払われた前大会教育委員会小委員会の牧田吉和委員、三川栄二委員、相馬伸郎委員に感謝しつつ、今ここに『子どもと親のカテキズム』をお届けします。

2014 年 10 月

日本キリスト改革派教会大会教育委員会



2014年10月15日発売

四六判・並製・64頁

ISBN978-4-7642-6454-0

販売価格 **400**円（税込）

書店での販売価格は540円（税込）ですが、大会教育委員会を通じての販売価格は400円（税込）です。

申込先 E-mail shintoko_ch_pastor@yahoo.co.jp 長田詠喜

振込先 01620-8-39213 長田詠喜

※『子どもカテキズム』とは申込先が異なりますので、ご注意ください。

教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1 TEL03-3561-5549 FAX03-5250-5107
HPをご利用ください。 <http://www.kyobunkwan.co.jp/publishing/> 【呈・図書目録】

大会教育委員会

「教会学校教案誌」

継続発行のための

50万円 自由募金のお願い

弊誌のためにお祈りとご購読をもってお支え下さいます事を、心から感謝するとともに御礼を申し上げます。

大会教育委員会の重要な使命と任務は、日本キリスト改革派教会独自の教案を作成することです。そのために委員会は、なにより「内容」を磨くことに全力を注いでおります。しかしそのためには、教案誌の「安定的発行」が不可欠です。

かつて執筆者には1000円の図書券を贈呈し、最低限の礼を尽くしてまいりました。現在は、何の御礼もさしあげていません。ひとえに誌代を維持したいからです。ギリギリの厳しい状況がつづいています。自由募金に積極的にご参加ください。

教会だけではなく、個人としてのご協力をも伏してお願い致します。

Soli Deo Gloria!

※ 購読申し込みは、西堀 元（熊本伝道所：✉boribori89@gmail.com）

〒862-0924 熊本県熊本市中央区帯山2-13-74 ☎ファクス (096)382-7630

お問い合わせは、相馬伸郎（iwanoue@me.ccnw.ne.jp）まで。

目標金額 50万円

送金先 郵便振替 00190 - 4 - 451670

日本キリスト改革派教会大会教育委員会

〈あとがき〉

●新型コロナの春。小中高生は突然の休校にどのような思いで過ごしているのでしょうか。学校だけが安全地帯の子ども達は大勢いるはず。施策に暗澹たる思いです。一方教会でも、楽しみにしていた中・大会のキャンプがなくなりました。適切な対応と思います。そのような中で今、毎春恒例の6年生の子と向き合っています。牧師は、中学生になる前の子らに絶対、マンツーマンでカテキズム教育をしてあげなければならないと思わされます。灯されている信仰の火が、中学校生活で消される事例が多いからです。してあげられなかった子どもたちのことを、申し訳ない思いで思い出します。(相馬伸郎)

●新年度を迎え、「子どもと親のカテキズム」に沿った2年間のカリキュラムが始まりました。今年度中には「子どもと親のカテキズムー解説」も出版される予定です。ぜひこちらも参考にしてください。

●新しい試みとして分級展開例から年齢表記を外しました。大まかな目安として、以下を考えています。

分級A：文字を読めない年齢

分級B：聖書を読める年齢

分級C：聖書箇所から展開して考えられる年齢

分級D：覚え歌など

それぞれの生徒の理解度に応じて参考にしていただければと思っています。

また新しい試みですので、編集部としても手探りです。ご意見をお寄せください。

●毎回綱渡りの編集が続いております。特

に今号は編集担当者の健康上の理由が重なり、購読いただいている皆様にはご迷惑をおかけする結果となりました。お詫びいたします。なんとか乗り越えることができましたことは感謝です。

編集部では編集に関わる奉仕をお願いできる方を募っております。一部でもお願いできる方、紹介いただける方はぜひご連絡ください。(長田詠喜)

●「中世の歴史をひもとくと、ペストの文字に必ず出会う……この嵐に損なわれること多く、その犠牲者の数は夥しかったし、それにどのような覚悟をもって対処するかは、神学的、信仰的な、厳しい問いであった」(『魂の配慮の歴史1』訳者まえがき)。与えられた今回の試練を乗り越えていく愛と知恵を、神が私たちに備えてくださいますように。(西堀 元)

※バックナンバーを御希望の方は下記までご連絡ください。

長野佐久伝道所 牧野信成

〒385-0051

長野県佐久市中込3-9-1

Tel & Fax : 0267-62-2409

E-mail : rcjnaganosaku@gmail.com

執筆者一覧

まえがき

立石章三（横浜中央教会牧師）

巻頭説教

小峯 明（船橋高根教会牧師）

教会学校教師のための説教準備ガイド1

牧野信成（長野佐久伝道所宣教教師）

長老になるための教育準備（1）

市川康則（千城台教会牧師）

家庭における契約の子の教育について

ステファン・ファン・デアヴァット

（神戸改革派神学校専任教授）

カリナ・ファン・デアヴァット

受洗の証

田好基生（江古田教会）

イラスト作画

表紙 中村未生（春日井教会・IBUKI）

高橋乃亜（湘南恩寵教会・IBUKI）

聖句カード

岡野美佳（青葉台キリスト教会）

聖書黙想・説教展開例

石原知弘（東京恩寵教会牧師）

小澤寿輔（高知教会牧師）

長田詠喜（新所沢教会牧師）

袴田清子（灘教会）

佐野直史（銚子栄光教会牧師）

高内信嗣（山田教会牧師）

柏木貴志（岡山教会牧師）

坂部 勇（厚木教会牧師）

三川共基（松戸小金原教会牧師）

長谷部真（堺みくに教会牧師）

三輪 誠（浜松伝道所宣教教師）

小橋口貴人（那加教会牧師）

分級展開例

愛智 愛（新座志木教会）

畑中寿子（田無教会）

光が丘聖書発見学習案内者訓練会

小堀尚美（花小金井教会）

相馬伸郎（名古屋岩の上教会牧師）

牧野信成（長野佐久伝道所宣教教師）

長田詠喜（新所沢教会牧師）

西堀 元（熊本伝道所宣教教師）

小川 洋（高松教会牧師）

編 集 部

相馬伸郎（長）

名古屋岩の上教会牧師

牧野信成

長野佐久伝道所宣教教師

長田詠喜

新所沢伝道所宣教教師

西堀 元

熊本伝道所宣教教師

小川 洋

高松教会牧師

日本キリスト改革派 大会教育委員会『教会学校教案誌』 第77号

2020年4・5・6月号（季刊）

2020年3月1日発行

発 行

日本キリスト改革派教会 大会教育委員会

発行所

日本キリスト改革派教会 大会教育委員会

名古屋岩の上教会 牧師 相馬伸郎

〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012

Tel/Fax 052-895-6701

郵便振替口座

00190-4-451670「日本キリスト改革派教会大会教育委員会」

編集・印刷 株式会社あるむ

頒価 900円（本体価格）

Reformed Church in Japan
Board of Education

